

奉願の覺

近來文華歳を追て相ひらけ、殊更御改正以後、諸道繁榮仕ゆ處、和學而已未行れ不申ゆ。尤神學歌學之儀  
ハ、其家々も御座ゆて、志有之ゆ輩、修行相成申ゆ得共、歴史律令之類ハ、差當るより所無御座ゆ。  
依之會所定置、同志之人々申合相勵、書生引立ゆハ、行々出情之ものも有之、國學永くすれ申間鋪  
と奉存ゆ間、講談所并文庫取立ゆ地所、拜借仕度奉願上ゆ。可相成筋之御座ゆハ、何卒御憐愍之程  
奉願上ゆ。以上。

寛政五丑年二月

寺社御奉行所

四月二十九日○寛政五年願之通被仰付ゆ間、場所見立可申趣脇坂淡路守殿申渡之趣、林家之御留ニアリ。

五月廿八日○寛政五年淡路守殿に差出ゆ拜借地願書寫

拜借地奉願ゆ口上

私儀國學講讀所并文庫取建ゆ地面拜借致度旨、先達て奉願ゆ所、先月○寛政五年四月廿九日於當御奉行所、願之通  
被仰付、猶亦場所之儀、見立ゆ様被仰渡、難有仕合奉存ゆ。依之所々承合ゆ處、裏六番丁小普請近藤左  
京殿御支配小泉新三郎殿上地六百坪之内三百坪之地所、別紙繪圖面之通、何卒拜借被仰付被下置ゆ様奉  
願ゆ。以上。

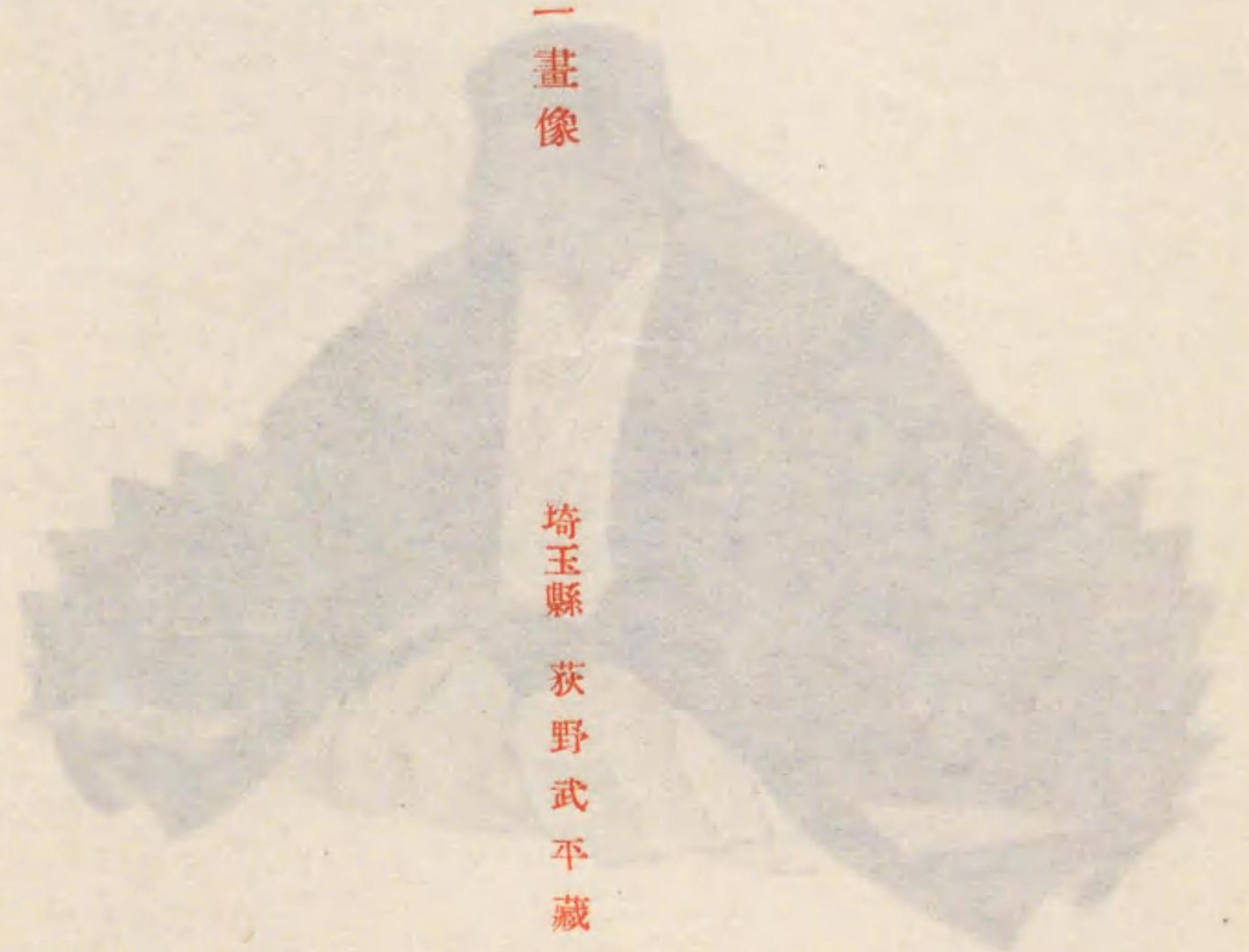
寛政五丑年五月

寺社御奉行所

稿 檢 校

塙保己一畫像

埼玉縣 荻野武平藏





奉願い覺

近來文華歳を追て相ひらけ、殊更御改正以後、諸道繁榮仕い處、和學而已未行れ不申い。尤神學歌學之儀  
り、其家々も御座いて、志有之い輩、修行相成申い得共、歴史律令之類い、差當るより所無御座い。  
依之會所定置、同志之人々申合相勵、書生引立いり、行々出情之ものも有之、國學永くすされ申間鋪  
と奉存い間、講談所并文庫取立い地所、拜借仕度奉願上い。可相成筋も御座いり、何卒御憐愍之程  
奉願上い。以上。

寛政五丑年二月

寺社御奉行所

塙

○保己一。

校印

四月二十九日 ○寛政五年願之通被仰付い間、場所見立可申趣脇坂淡路守殿申渡之趣、林家之御留ニアリ。

五月廿八日 ○寛政五年淡路守殿に差出い拜借地願書寫

拜借地奉願い口上

私儀國學講讀所并文庫取建い地面拜借致度旨、先達て奉願い所、先月 ○寛政五年四月廿九日於當御奉行所、願之通  
被仰付、猶亦場所之儀、見立い様被仰渡、難有仕合奉存い。依之所々承合い處、裏六番丁小普請近藤左  
京殿御支配小泉新三郎殿上地六百坪之内三百坪之地所、別紙繪圖面之通、何卒拜借被仰付被下置い様奉  
願い。以上。

寛政五丑年五月

寺社御奉行所

塙

檢

校

塙保己一畫像

埼玉縣 荻野武平藏







屋鋪六百坪

小普請 裏六番町 小泉新三郎上地

右屋鋪御書院番妻木佐渡守殿組與頭榊原主計殿の三百坪被下、殘三百坪右主計殿の圍込御預之罷成也。此地所拜借奉願度奉存也。以上。

五月〇寛政五年

七月廿三日〇寛政五年 淡路守殿の被仰渡左之通。

塙 檢 校

國學講談所并文庫取建付、裏六番丁小泉新三郎上ケ地之内三百坪、願之通拜借地被仰付也。  
八月四日〇寛政五年 淡路守殿の左之通申來。

塙 檢 校

拜借地、明五日〇寛政五年八月 晴雨とも四時、御普請奉行支配向出役、右地所相渡の間、傍示杭五本、且杭認め硯墨筆致用意、受取之の印形持罷出可申也。 八月四日〇寛政五年

八月五日〇寛政五年 淡路守殿の差出御届書寫

御届申上り口上覺

私願之通、裏六番町小泉新三郎殿上ケ地之内三百坪、拜借被仰付也處、今日

御普請方改役 林部善太左衛門 御普請方假役 端山定五郎

出役被致、御引渡有之付、私爲名代、門弟高橋市五郎を差出、地坪無相違受取、難有仕合奉存也。

殷 昌 期

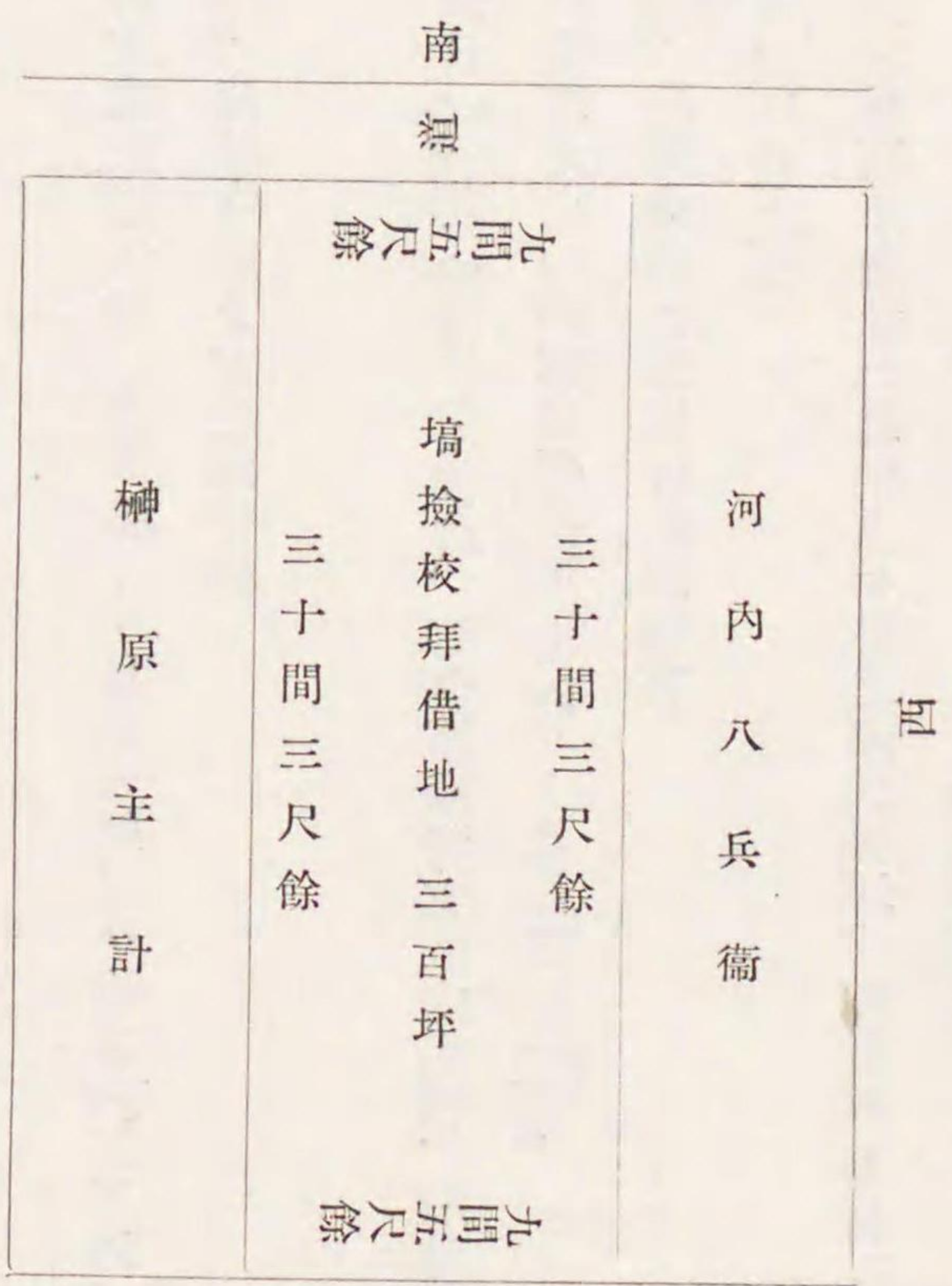
五六九



依之御届申上。以上。

丑〇寛政五年八月五日

塙 檢 校



裏六番町小泉新三郎上ヶ地之内、今度願之通拙者拜借仕、被成御渡之、四方間數坪數、右繪圖之面、御定杭之通、相違無御座受取申。爲後日仍如件。

寛政五丑年八月五日

御普請方改役  
林部善太左衛門殿

塙 檢 校  
名代門人高橋市五郎

御普請方假役  
端山定五郎殿  
拜借地普請出來之付、十一月八日〇寛政五年引移、翌九日〇寛政五年十一月より會始之。

會 頭

奈佐久左衛門殿 屋代太郎殿

横田孫兵衛殿 松岡平次郎殿後清助死去前  
清左衛門下改。

和學講談所御用留〇編年  
史料收。

寛政五丑年七月

寺社奉行。

塙 檢 校

右檢校國學講釋所并文庫取建付、裏六番町小泉新三郎上ヶ地之内三百坪、願之通拜借地被仰付之間、其段可被申渡。尤御普請奉行可被談。

圖略。

裏六番町 塙檢校拜借地 坪數三百坪

東 榑原主計。 河内八兵衛。  
南 道。 北 布施藤兵衛。

東 三十間三尺餘。  
南 北 九間五尺餘。

裏六番町小泉新三郎上ヶ地之内、今度願之通拙者拜借仕、被成御渡、四方間數坪數、右繪圖之面、御定  
般 昌 期  
五七一



杭之通、相違無御座請取申。爲後日仍如件。

寛政五丑年八月五日

高橋市五郎印

御普請方改役

林部善太左衛門殿

御普請方假役

端山定五郎殿

前書御繪圖之通境目立合い處、御改之通相違無御座。爲後日仍如件。

御書院番妻木佐渡守組與頭榊原主計内

林直右衛門印

御書院番仙石伯耆守組布施藤兵衛内

佐藤耕右衛門印

小普請組阿部大學支配河内八兵衛内

天野丹次印

屋鋪渡預繪圖證文

寛政五癸丑年

八月五日渡。小泉新三郎上地之内  
一、裏六番町三百坪

高橋檢校

但、爲拜借地。

文化二丑年正月廿七日小林權太夫の渡。

屋敷書拔

同五年七月和學講談所取建

堀前惣檢校保己一、武州兒玉郡保己村出生、寶曆七丑年八月江戸表へ罷出、萩原宗固門人相成、和

書學問致し、其後追々昇進致、天明三卯年三月檢校相成、寛政五丑年和學講談所并文庫取建の義、裏六番町小泉新三郎上ケ地之内三百坪願之通拜借地被仰付い段、寺社奉行脇坂淡路守申渡之。同政七卯年九月六日和學永續爲御手當、馬食町三丁目小傳馬町三丁目龜井町橋本町一丁目河岸通之、上納地壹ヶ所被下置、地面之義、町年寄方よて預り罷在、壹ヶ年取立金五十兩ツ、町奉行相渡い筈、松平伊豆守殿<sup>○信</sup>御書付を以被仰渡い段、寺社奉行青山下野守申渡、同日<sup>○寛政五年九月六日</sup>和學講談所の儀以來林大學頭支配之相成、和學御用筋の義相勤い様、堀田攝津守殿<sup>○正</sup>以御書付被仰渡。同政十年六月九日北品川よて板木置場地所千六十坪餘拜借被仰付い旨、堀田攝津守殿被仰渡い段、林大學頭申渡。享和三亥年六月惣錄之相成。文化二丑年正月十六日裏六番町拜借地返納、表六番町小林權太夫屋敷八百四拾坪餘拜借、願之通被仰付旨、寺社奉行水野出羽守申渡。文化二戌年四月七日和學御用向多年相勤、書物類校正差上骨折い之付、御序之節御目見可被仰付い旨、於躑躅之間、土井大炊頭殿被仰渡、同<sup>○文化二年四月</sup>廿八日御目見任、文政四丑年正月上京仕、同<sup>○文政四年二月六日</sup>職惣檢校相成、同<sup>○文政四年五月十五日</sup>御目見任、同<sup>○文政二年五月</sup>十九日御暇之付、金二枚時服二被下置い旨、菊之間縁頼よて、御老中御列座、土井大炊頭殿被仰渡、其後病氣之付上京仕兼隱居奉願、八月廿三日<sup>○文政四年九月</sup>願之通隱居被仰付い旨、所司代松平和泉守殿以御書付被仰渡。文政五年七月九日病死。

増補泰平年表

寛政五年<sup>癸丑</sup>四十八歳。舊友上野國人常照院來りて云、當時文明之御世にて、漢書よむのさしならぬ、神道歌道之たれても其家々定りあれとも、さ本朝の歴史律令及とよむのなきにいふのき衰とかけきて、歴史律令之講談せん所を定めんことを公願出んといふとにむ。



二月〇寛政五年國學講談所并文庫取立の地所拜借之儀、寺社奉行脇坂淡路守殿に奉願の處、四月〇寛政五年御同所之於多願之通被仰付、場所見立の様被仰渡、五月廿八日〇寛政五年裏六番町小普請組近藤左京支配小泉新三郎上地六百坪之地所之内三百坪、拜借奉願の處、七月廿三日願之通被仰付、同十一月〇寛政五年普請出來之付、會談相始。

—— 塙保己一年譜〇編年史料收 ——

塙檢校保己一、名高き盲人なりけり。和學をたくし、或令式をのりそつと講釋し、やふと類聚もの多く板行し、いま水府へいで、日本史の校合之あづめる。寛政五年のこ後、朝之願ひて和學校所とりつべき旨にて、地所を下し給ひけし。その學校の名を予に乞ふことしきりあり。故に温古堂とつけよと人をもて云やりあり。

—— 退閑雜記 ——

〔參考〕 塙保己一

温故堂先生傳

門人中山信名平田撰

温故堂塙大人、名は保己一、氏は荻野といふ。塙は其師須賀一檢校の本姓を冒されし也。其先小野朝臣篁卿より出て、世々武藏國兒玉郡保木野村に家居す。初め篁卿七世の孫孝泰一説に隆泰と聞へし人、武藏守にかりてこの國に下りしが、その頃のならひとて、任はて、後もかほこゝにとまりすみ、多くの庄園をたくはへもたれしかは、その子義孝一説に義隆も、是に次て多摩郡横山里に家造し、遂に國人となれりしか、家も富りしまゝに、武藏權介に請しなりて、五位のくらゐにさへあつかりしゆゑに、野大夫とも、又横山大夫ともきこえし也。この人の子十人有。中に太郎資孝一説に隆泰は、横山黨の始祖なり。三郎時資は猪俣黨のはしめにて、共に一族多く世にも聞えし氏なり。八郎義兼は横山野八とよはる。その子新六夫成

兼といふ人、相摸守源有兼といふか女をめとりて三郎季兼をうむ。季兼は外戚の祖父有兼か養子となり

て、かの國に移り住て、字を海老名の源太と改め、永くかしの國人となれり。是より小野氏を改めて

村上源氏の姓を冒す。季定一説に季貞も又海老名源八とよはる。一説に源太又源三に作る後に相摸權守となる。横山新大

夫季兼資孝の孫一説に隆兼が女をめとりてあまたの子生せたり。海老名本間國府などいふやからは、皆これか末也。

其五郎に季時一説に季重又は俊重に作るといひける人、はしめて荻野五郎とよひて、この氏の始祖なり。伯父小倉二

郎經孝孝兼か子一説に經隆といひける人の女を妻として子多く儲たり。治承の亂に平家の方人して、右兵衛佐主を

いたりし罪によりて終に失はれぬ。されとも兄弟一族みな鎌倉殿の御家人なりしかは、季時の子とも悉皆

其員につらなりて永く鎌倉に仕へき。武藏にはもとよりの因縁ふかき族も多かりければ、その中にはお

のつから移り住ものも有けり。これら則大人の先祖なり。星移りて元和の亂に、荻野某難波の城にこも

り、事果て後郷里なれば武藏にかへり、保木野村に隠れ住めり。この人持りし太刀は、曾祖と名つけて難波の役に敵を討

故ありて他の手に渡りき。又その折用ひられたる釜な夫より永く農人となり、世を捨て宇右衛門に至る。宇右衛門宇兵衛

を生む。これ大人の所生也。宇兵衛性質隱徳を好み、人の爲にはあへて身をもかへりみず、人もし疫疾

痢病など病ものあれば、親戚さへ病の傳轉を恐れて近づくものも稀なる習なるに、あへていとふとなく

自ら其家に行てもて扱ひ、養療を加へしかは、夫か爲に助る者多かりけり。其外の行狀これをもてはか

りしるへし。この人加美郡藤木戸村の父老齋藤理左衛門□□□これは公より職給はりて賞せられ、孝義録に傳をのせらる。これ大人の叔父なりといふも

の、女を妻として、延享三年丙寅大人を生めり。幼名を寅之助といふ。五歳の年より肝を病て、七歳の

春俄に盲目となる。或人大人の父母に告て云く、寅之助か歳星其身にかなはず、むへ歳星の次を轉じな



は能かるへしと。これによりて生年二歳を減し、戌辰の生に准へ、辰之助と改む。又同郡池田村なる  
 驗者王覺房か子に擬らへて、一名を多門房と名つけらる。幼少より本草の花を好みて、いまた盲目なら  
 ざりし時、野邊に出て、すみれ數種を求めて前栽に植られしとありき。ものみすなりて後も、何に  
 まれ花さく本草を數多植置て、人の見悦とあれば、みつからも並ならずたのしみめつると常の業なり。  
 されは人もし物の色めをかたらんする時に、花□□□といへは、□□□□□□□□られき。十二といふ年  
七年丁丑母をうしなひてうれへ忍ふこと尋常ならず、これより漸東都にて業を爲すへき心起されしか、或  
 人の語るをきかれしに、當時某とかやいふもの太平記一部暗誦し、東都にありて諸家にていり名を顯  
 はすときいて、大人心におもはく、太平記は全部四十卷に過ず、これをしるをもて名を顯し妻子を養ふ  
 ことを得かたかるへきとかは。こゝに至りて東都にいつるの志いと切なり。□□といふとしの、春  
寶曆十三年父に請て絹商此絹商は江戸へ出て與方の株を買て、後遂に町奉行まで根岸肥前守といひし人なり。と共須賀一檢校本氏は瑞といふ。常陸國茨城郡原村の人なり。雨富といふは盲人一坐のならひに、在名といふものにて別稱なり。本氏をそのまゝに在名に用ゆる人もあり、ことに設て稱ふるものあり。雨富の家は四谷の西念寺横町にあり。に東都にいたり、

雨富檢校須加一か門人となり、彼家に寄宿し、名を干彌と改む。  
 琵琶箏三絃といふものを習らひ得て、音曲の事を業とし、右針治導引など業くさとなすとなるを、大  
 人は文讀む思ふ事始よりの根さしなれば、心そこにあらず、されと師のいさめやむことなれば、其  
 筋のことも習ふさまなれと、ともすればひまをうかひ文讀とのみを目とす。翌年萩原宗固百花庵と稱すか門  
 弟となり、物語やうの文ともをよみて、歌よむ業をまなはる。其比川島貴林字は源といふ人あり。山崎  
 の流れを汲みて神道の事にこゝろをいたせし人なり。大人これにつきて小學近思錄なりよりはしめて、

異朝の書籍をならふ節には、神道の教をも受たり。又雨富か家の隣は松平乗尹正徳の家なりけるか、こ  
 の人も文よむを好み、大人の學才の人にとなるをめて、いと懇にして、劇務のひまには、物よみを  
 しへければ、大人もいとうれしきことに思ひ、其家に行通ひて契約をたて、あしたの寅の刻より卯の刻  
 にいたりて、一時かほとは必らず文よみならはれけり。乗尹は公の務いとまなき人なれば、一日をへたて  
 つゝもかくはせられけり。一日乗尹同僚に語りけらく、彼瞽人か人となりを見るに、度量大に常人に越た  
 り、彼をして明あきたらんには、かへりて法令をもおかし、其身をもそこなひなん、明なきこそ幸には  
 ありけめ、後に必らず業をなしぬへきものなり、かく思ふか故に常に懇にはすなりとそいひける。山岡  
 妙阿は、その頃博學なるをもて名をあらはす。大人又この人によりて律令をよまれき。難經素問などい  
 ふ醫書をば、品川東禪寺の僧孝首座に習ふ。十八といふ年寶曆十三年癸未に、一坐の衆分となり、名を保木野一  
 といふ。凡盲人一坐の長官を檢校とし、次官を勾當といふ。其つき平□□人の坐上たるもの□□□といふ。在名□□□ことを得□□（コノ間草本細書數百字蠹食シテ詳ナラス）千日の一日  
 に百卷をよまむこの力によりて衆分になることを得むと。果して□□にして是を得たり。こゝにいたり  
 ていよ／＼つとめて物よむをむねとす。もとより記憶すくれしかは、やうやくその名をしるものある  
 に至る。はしめ大人雨富か室にいりし時、そのをしへにまかせ三弦を習けるに、今日ならひ得しものは  
 一夜か程にわすれて、明日は、しらすなりけり。すへて三年か間に一曲をも全くは覺へ得ざるのみか、調  
 子さへ合さりければ、雨富もせんすへなくて針治の術を旨と習はせけるに、醫書よむ方は人にすくれて、  
 二度よますれば其次の度には一文字もたかへず讀ほとなりければ、術にかくれば人よりは遙に劣れり。  
 こは文讀かたにひかるればなるべし。雨富餘りに覺えて、せめいひけるは、凡人の郷里をさりて他邦に



赴くとはなす事あらんとての意なり、汝父母の家をいて、こゝに來るもしかあるへし、されとも産業となすへきとを一つも習ひ得るものなし、且朝夕汝かなすところは露はかりも我心にかなはず、さはあれとも門人の祿となる術をしふるは師の職分なり、汝か好まざることをなせといふにあらず、賊と博とを除きてのほかは何にまれ心になひたらむものをつとむへし、これよりして三とせか間汝を養ふへし、三年へてなすとなくは速に郷里に送りやるへしといふ。大人肝にしるして晝夜となく讀書をつとめしかは、終には名をあらはすまてになりたり。されは大人意を得て後常にいへらく、我素より讀書をこのまさるにあらず、然れとも業をなし名を顯すものは皆師のたまもの也、たゞうらむる處は、師の在世のほとかはかりの幸をきかしむる事なきのみ也と。大人もと病多し、雨富よくやしなふになほいえす。一日雨富大人に告て曰く、なす事あらんと思ふもの病多ければ果すと能はず、病ある人旅に赴く時は、まゝいゆる事あり、思ふに汝か病も又しかる事あらん、我金五兩をあたふへし、我に代りて伊勢の神宮に詣てよ、雨富らん日はゆくとなかれ、必らずあしき氣をうけぬへし、費餘りあらはなほ他方に行き、盡るに従ひて歸り來るへしといふ。大人そのをしへを受け、廿一といふとし<sup>明和三年</sup>の春、父宇兵衛と共に海道をのほり、まつ伊勢にまうて、兩宮を拜し、師より始めてさるへき人を平ならん事をねんころにのへて、相熊二見などめぐりありきて、その夜旅宿に歸りけるか、宇兵衛は大人のぬきおける脚半を見るに、その裏の赤き事すはうもて染たる布の如し。あやしみなから水もてそゝき見るに、水さへいと赤くなりたり。いふかしとおもへと、大人の物思はむともやとそこにては語らず、日をへてかうく有しと言ければ、大人も如何なる祥ならんと思はれしか、東都に歸りて後にきけは、その日は雨富の師なりし雨谷といひける、檢校のことに當りて惣録のつかさとられし日にあたれりとか、神も大人の誠をいたしてのみけるにめて、かゝる神異をも示されし成へし。又伊勢より京都にのほりて寺社佛寺などまうてありきけるか、北野にまゐりてことにたうとく思はれければ、永く一身の守護神とせられき。これより先大人思はく、凡人は神明をたのみて心を決むるにあらざれば業をなすことを得ず、抑皇國の神明の内にては伊勢清水はいふもかしこし、人臣の分にては北野か、もしくは豊臣太閤か、北野はもと文筆の家より起り、官は大臣を極め、死ては神となる、上は公家よりはしめて下は凡民にいたるまで歸敬事よの常ならず、太閤はもと尾張の賤民也、一たひ起に及びて、天下悉く服従、威風異邦におほへり、□□□□にして名をなされたり、この二人を除ては又よるへき神なしと。然れとも心未だ定まらず。或はおもはく太閤をいのらん、又おもはく北野をたのみむ、こゝに至りて決て北野をいのる。この後百度詣千度詣など年毎に絶る事なし。それより難波にいたり、住吉天王寺を禮し、播磨に渡りて須磨明石の浦傳へし、再ひ難波に歸り、堺の浦を経て紀の國にいたり、高野山粉川寺三井寺にも詣しかは、大和にかへり南都を巡禮す。彌生の程なりければ、吉野山に行て花をめてつゝ、西行庵にしはしやすらひけるに、藤門秀齋といふ老人、<sup>法隆寺</sup>又外にふたり、<sup>一人は難波の人</sup>これも花見にとてこゝに來り合けるか、かたみにうしはいつくの人そなとかたらひて、かゝる花の本にたいめしつるか興あるわさなれば、當坐の歌よまんとて、秀齋よりはしめて皆よみたりしに、大人は盛りにはいつれをそれとしらくものかゝるも匂ふみよしの、花となむ聞へし。各めて悦ひて別にけり。なへて六十日あまりの日を積て、東都に歸られけり。果して雨富の言のこと病はみな愈たりき、いとあやしきことになむ。廿四といふ年の春、<sup>明和六年</sup>三月、歌の師宗固、大



人と横田茂語字孫兵衛とを招ていへらく、汝等このとしこる讀書詠歌にまめなること餘人にすぎたり、後には皆業なりぬへし、然れとも人各得る處あり、彼を學ひこれをならはんとすれば、人にすぐれんと固かりなむ、これよりの後茂語は歌をむねとし、讀書はこれにつけよ、保木は歌よむ事をやめて、専ら文よむへし、されとことに勝れたらん人によらずはことゆくへからず、當時賀茂眞淵は國學の才名世に知られたり、保木は彼につきて學へよ、但吾にならひし事かたくかたるへからず、もと學流異なれば、かの人もしくは隔心ありなんと。大人そのことに従ひ、縣居につきてならふ。初てゆきたりしをり、縣居こゝまては何書讀れしやなと問れければ、文よむすへをもわきかねしまゝには宗祇季吟などやふの人のかゝれたりし書のみよみて侍れば、あたらいとまをむなしくなし候といらへられしに、縣居いたくめてゝ、そはよき業をしつる人かな、今の世の學者は大かた人のいひけん言まなひをのみして、書のよしあしをおのれとさとする人は少し、おのれとわきまへしるものならねは、業なりかたしとなんいひける。又大人の詠出したる歌は、すかるなす腰ほそをとめ得ましかは、あさよひさけすなつさはましを。今一首のは、宮城のゝ萩の露原分ぬ夜も、ひとりしぬれはぬるゝ袖かなとありし。大人古躰の歌よまれしは多くきこへす、且これそ初にはありける。されは縣居も並ならず感思はれけり。こゝにて六國史をもとけ讀れけり。されとこの冬縣居死たりければ、わつか半年はかりなむをしへは受られにき。この頃豊一といふ衆分の盲人あり、金若干をたくはへもたりしか、俄に死てゆつるへき子もなかりければ、或人大人をしてその家をつかしめなはよかりなむと雨富にすゝむるものあり。雨富このよしをきこゆ。大人うけすして言らく、豊一生りしをりおのれとこゝろよからず、死たりとてその家をつくへきすちあるへか

らす、且彼か家をつかてありとも、去へき果報のありなんには、かはかりの財たくはへなんこと難かるへからずと答ければ、雨富我もしか思へりとて、そのこと止てけり。さて大人の學業日を追て進みけるまゝに、雨富もいたくめでゝ、一日大人を招てさとすやう、當世一坐の様を見るに、席を進むるもの皆金をむねとして、術藝にかゝはらず、かくて有なは後には一坐のうちに藝學ふものたえうせなん、汝か學業はやう人に越たり、しかれとも財も持得されは席をすゝむる事を得へからず、吾これをおもふかゆゑに、汝か爲に金百兩をたくはへ置り、むへこれをもて席をすゝむる料とせよとて出したひたれば、遂に安永四年といふとしの元日、階を進めて一座の勾當となり、塙勾當と稱す。名を保己一と改む。文選に保己安永四年といふにこれよりさき大人この職に昇んことを天滿宮にいのり日參し、あした毎に火の物たちて心經百卷を讀誦見千日に見てんといふ願をおこさる、こゝに至りて九百日にしてその望を得たり。この年雨富の家を離れて番町の厩谷の北坂上なる高井山城守か宅地に移りすむ。大人つらゝおもはく、われすこの財をたに持得すして勾當の職にもなりたり、これまさしく天滿宮の御はからひにして、心經薰備の功力なるへし、猶二千日の願を起しなは、檢校の職にもあかりなんとかたかるへからず、然れともそは一身のはかりとそかし、あはれ世の爲後の爲にもならんとをなしてん、異朝には漢魏叢書などより始めて、さる叢書ともに聞えたり、中國にはいまたそのためしなし、さらはこゝにもかしこにならひて、かしここゝにちりほひある一卷二卷の書をと集て、かた木にゑりおきなは、國學する人の能たすけなるへしと思ひとりて、同八年己亥の元日より天滿宮に誓ひ、心經百萬卷願たてし、なかは讀まむほとに、千部の書をあつめよみをへなんまてには、上木の巧なりねかして、これよりあしたには鹽たちし、日ごとに



寅の時より起いて、百卷つゝの看經おこたらず。此年又宅うつりして土手四番町なる東條信濃守か宅地に住む。これより先にも來たり學ぶもの無にはあらねと、こゝに至りて門人となるもの數多かり。源氏など講せらるゝにつどひきく人大かたならず。奈佐勝皋妙阿の門人字は久右衛門、横田茂語などはみな學ひのともなりけるか、物語やうのことは大人に問聞えたり。屋代公賢字は太も大人の門人となりて、二心なく學ひければ、後には世にもきこゆる人となれり。さて彼集めてんと思ふ書をは群書類從といふ名を設けて、こゝに求めかしこにかり得しほとに、珍書とも多くいて來にければ、やかて上木の功を起し、年に從ひて若干の卷數いて來にけり。天明三といふとの春三思ひのほかは檢校の職にうつりぬ。翌年天明四年雨富やみて死せんとせしをり、大人を呼ていひけらく、われさきに人にかし置る金若干あり、その中に我世にありてすらかへし得さる人あり、其券契をは皆やきすてたり、さもおもふ券契をはこゝに残し置けり、ゆつるへき子もなければ、われ死のちにはうへとりて汝か用にあてよかしときこえければ、大人うけすしていらへしやうは、やつかれ郷里を出しをりは露はかりのたくはへはなかりしに、師のめくみにより檢校にさへなりにけり、徳これよりあつかはなし、このほかになにか給はりなんや、その券をは、いまた職にもあつかうてある門人にたひ給へかしてかへされけり。これをきく人感さるはなし。このとし宗固また大人をよひていうやう、汝先に我とに従ひ、歌を廢て讀書に力を盡して、今既に學術なりにけり、むべこれより又歌をかね動むへし、人のこはむをりに上下つゝかさらん歌よまむも便なければなり、われ年老にたればかなふへからず、日野資枝卿の門人となるへしと聞へければ、これより日野殿の教をうけらる。當時宗固翁は、冷泉家にて鶴村の門人なり。さるを二條なる日野殿の門に在るへきよしは、後日野殿の教をうけらる。は二條宗固翁は、冷泉家にて鶴村の門人なり。令息光隆等にあたりて鶴村の門に在るへきよしは、後日野殿の教をうけらる。

卿はもと光永卿に習らひ給ひしゆかりあるゆゑなり。されは初も思ひてかくいはれたるものなりとぞ。この卿薨し給ひし後は、閑院宮(親王)に學ひまゐらせ又宮もかくれ給ては、外山光實卿の門にいられしなり。大人一日屋代弘賢か家をとむらはれしをり、水戸の文學立原萬稱甚五郎もその席にありて、某か秘藏る三年の御願文のことを弘賢と論らひたり、この御願文は奥に太上天皇某とのせられて、御諱はまさしくするされす、□□□年は後伏見院花園院ともに太上帝にておはせし時なれば、いつれともわきかねたりしに、大人かたはらにきして、その文はいかにかゝせ給ふにや一通りきかせ給へとてよまするに、帝禁之闕、宸居無動、姑射之山、南樹不虧といふ句に至りて、大人そこにてよくわかれたり、花園帝の御願文なり、いかにといふに、先つ帝禁之闕とかゝせ給へるは、後花園帝なり、これは御子ながらも御位におはすればなり、つきに姑射之山とかゝせ給ひしは、父の帝後伏見院をさゝせ給へるなり、されは花園帝にたかひあるましといはれければ、萬をはしめて皆感し合たり。初め萬大人の名をきく、こゝにいたりて名と實のかなへるをしり、日本史の校合をゆたぬる意を起す、然れとも同僚のうけさらんををはかりて、まづ参考盛衰記を校正することにつけて、大人を文公にすむ。この故に同じき五年といふとしはしめて文公を拜し、月俸五人の分を給はりて往來のたすけとす。盛衰記の校合の事はてゝまた日本史の校合にあつかる。其功勞あるをもて月俸をまして十人分を給はる。これよりさき大人花咲松といふ書をあらはす。こは南朝長慶院と後龜山院との御位のことを論せり。萬いまた其説に服はず、問答あまたゝひになりて、萬ついにそのいふ所をよしとす。これによりていよいよ大人をすゝめてこのよせあるとを得たり。そのをりに萬の同僚みなすゝめていひけらく、國史はわか先君の脩むる處なり、瞽者をして其事にあつらしむるはこれ吾等の恥にはあらずや、むへそのことを



とむへしと。萬うけすしていふやう、其人の盲たるは病なり、尊卑のいたす處にあらす、しかれとも常にいはゆる盲人は世のもてあそひくさとなるを勤とす、この故にいやしまれさることかたし、塙は文學を業とし人多く師の禮を致して來り學ぶ。その説もまた取へきか多し、さらはいかてか明不明のへたてあるへきや、もし國史の校正にあつかりて補ふ處なくは、萬その罪をかふむりなんといらへしかは、終にそのとなりけり。こゝにいたりて大人の名四方にあらはる。たゞ礪川殿にさむらふのみならず、市谷殿麴町殿にまうで、貴躰を拜しまつれり。其外諸侯大夫の家に往來するはわけてもいひかたし。寛政四年といふとし笄橋のほより火いて、東都なかは焼亡たりしか、四番町の家もやけにければ、しはし人の家に假居したり。その折に驗者常照院といふものあり、上野國の人文字のかたにもこゝろさしありければ、常に大人のかたに來とふらひけるか、いふ様、今の世は文道ひらけて經書よむかたはいふもさならなり、神道歌道につきてもその家々皆定まれり、たゞ歴史律令などよむかたのなきかいとをしきに、あはれ公に請てさるへき地所給はりて講談の所ため、かんのくたりときをしへてんやと。大人もさるへく思はれければ、翌年の春寛政五年癸丑五月そのあらましを請せしかは、公にもいとよきことにおほして、和學講談所建へき地所なし給はるへきよしとみに仰ことありて、その七月に裏六番町なる宅地三百坪をしかし給はる。同十一月講談所なりにければ、やかて會始あり。翌寛政六年盲人一座の取締りといふ仰を蒙り、秋の頃九月山道より京上せられけるか、碓氷のとうけにて、紅葉はのうすひのみさか越しより猶深からん山路をそおもふと詠れたりしか、まらへめてたしとの口すさみとはなれり。同七年の九月に講談所永く絶ましき料にとて町屋敷を給はり、年ごとにその納むる金五十兩をもて雜費にあてらる。同十

二月白銀十枚を給ふ。これよりさき群書類從のうち板になりたるもの若干巻を奉るか故なり。同十年五月開板のかたき納へき庫たつへき敷地にとて、品川村のうち御殿山の下なる地千六拾坪をかし給はる。同十一年五月一座の取締の職辭し申すにより、しろ銀二十枚を給はせて、その勞苦を賞給ふ。同十二月このころ學問所にて撰はせらるゝ所の孝義錄を校正し、假字のつかひさま詞のべやうなど改へき仰ことありて、あまねく校たゝして功なりにたれば、やかて開板なる。又となる仰によりて、この年より門人を京師にのほらしめ、諸家にひめもてる名記を寫さしめ、書あらためて紅葉山の御文庫に納む。年を追て數百部に及ぶ。其草稿をは家に納るとをゆるさる。當時かくはかり家々の日記を納めもてる人絶て有ことなし。又日本後記は世のなかに久しく絶て傳はらさりしを、さきに京都の名家よりもとめ出されて、かたきにゑらしむ。すへて十卷あり、全部の五分か一なりといへとも、なほ六國史の員備はることは、今の御代となりてこの時はしめなり。令義解百鍊抄などをもよくかうかへ正して、ともにかたきにゑりて世にひろく行はしむ。このほか國史格式などことごとく校正して、なほ追て上木の功をくはたてらる。世の國學をいふものたはやすく奇書を見ることを得しは、多くは大人のいさをなり。享和三年一座の惣録となりて、本所なる惣録宅地に移り住む。文化二年正月裏六番町なる敷地を召上られて、そのかはりとして表六番町にて敷地八百四十坪を給はり、講談所をこゝに移したつ。これまでの地所せまきをもて也。天満宮を宅地中にいとなみ、年頃の宿願を賽す。このとし一座の惣録の職を辭て十老の列となり、表六番町に歸りすむ。一座の先例、十老に入もの必らず京師に移り住す、しかるに大人はとなる勤あるを以て公より江戸にとゝめ給ふ。同五年六月宇多帝仁和三年よりこのかた、正親町帝慶長八年



まての間、實録修めらるへき料あみて奉るへき由仰こと有て、これを史料といふ。御家に侍ふ人の内にて門人のさるへき者あまたをさへそへ給ふ。又そのついでをもて武家にかゝれるもの、職名文書兵器なとなへてあるへき名目をも類聚し奉るへきよしをも命せらる。これによりてことに御手當として年ごとに金五十兩を給ふ。同八年螢蠅抄六卷をゑらひて奉しかは、白銀五枚を給はりて賞せられき。同十二月四日和學のよにつきて常に公の仰を承りいさをしあるを賞し給ひて、大城にまうて、はしめて兩御所を拜し奉る。これより年毎のはしめには、御醫者たちと共にとの始め御悅を甲して拜謁しける。大人さきに子弟に語りていはく、一坐の職たるもの、一職をよひてかならず公を拜し奉る事は規模なりといへとも、常の例なり、われもし職にいたらざる前にその望を得む願たりぬへしと。こゝに至りてその望をとくる事を得給へり。これより先脇坂義周といふものあり、心學をとくをもて名をあらはす。又よく人を相するに巧なり。大人のいまた大にあらはれさりし程に相していはく、大人容貌常にすぐれたり、大に名をのこす事あらん、ことに貴人のために愛せらるゝの相なり、願ふ所果して其所を得へし、且壽あるへしと。當時の相をいふものゝこと多くはこの類ひ也。こゝに至りて皆そのよの如し。文政二年群書類從六百七十卷かた木の功なる。年ころの願望はとけぬ。國開てより後かく大部の書上木せしとこれにこゆるものなし。これよりさき續集のくはたてありて年を追て奇書多く集り、すへて一千八百部にいたる。前編千二百七十部餘、合せて三千餘部なり。つゝきて上木の功をおこされんとす。大人物語てふもの何ならずくらからねと、ことに源氏榮花などをそむねとせられしなり。源氏など講せられしをり、よむもの讀たかへたりしをりは、よみつきなとせらるゝに、一文字もたかはす。榮花を標注せられたれと、

いまた板にはのほせられず。今とし大人とし七十四、そのさかりなること常の人の五十餘ほどの如し。猶このさきもいかはかりの榮かおはすらんいとたのもし。凡大人にしたかひをしへを受るなかに、術を得たる人すくなからず。屋代弘賢松岡辰方稻山行教石原正明など、ことにその旨を得し人ともなり。信名等ほどのものは數多かれはいふにたらねと、この年頃並ならずをしへを受しかは、いかてそのいつくしみをもむくはんと思ふほとに、この頃大人の集られし群書類從の上木功なりしまゝに、その思ひくはたたれしはしめをはりをも人にしらせたきよしなど、同じ學ひの友なる人ともに語りしに、おなしくは大人の行狀をも大様に筆とりものせよとすゝめられしかは、おのれか術のつたなきをもしらて、文政二年といふとしなか月もちかりにしるし侍りぬ。こは大人の陰徳の世に弘こりて、この徳に壽もいやな

——日本教育史資料

屋鋪受授

八月二日壬戌○寛政五年(紀元二四五三年)○壬戌、三正綜覽。屋鋪預ヲ爲ス。外ニ是月○寛政五年(紀元二四五三年)八月。受授スル所若干屋鋪有リ。○屋鋪預繪圖證文。屋敷書拔。相對替御書附書拔。寛政錄。

屋鋪受授事

屋鋪受授 寛政五年八月左ノ各屋鋪ヲ受授ス。

圖略。文化五年辰二月四日御臺所御膳所御臺所頭吉田伊左衛門に渡ス。

四谷内藤宿 前島寅之助上ヶ地 坪數百四拾七坪。

東北 道。西南 田口忠左衛門上ヶ地。

東南 道。西北 前島寅之助御預地。

殷 昌 期



同 前島寅之助御預地 坪數九拾坪餘。

東北 道。田口忠左衛門上ヶ地、前島寅之助上ヶ地。

西南 駒木根大内記御預り同心組屋敷。加藤忠太郎。

東北 五間三尺。西南 六間貳尺。東南 十五間二尺。西南 十五間貳尺。

四谷内藤宿新屋鋪、前島寅之助上ヶ地、并御預地共、加藤忠太郎に被遊御預替、四方間數坪數、右御繪圖之通、相違無御座奉預い。爲後日仍如件。

寛政五丑年八月二日

小普請組南部主税支配加藤忠太郎内

高橋與四郎清印

御普請方改役

清水三郎右衛門殿

御普請方假役

端山定五郎殿

前書御繪圖之通境目立合い處、御改之通り相違無御座い。爲後日仍如件。

寛政五丑年八月二日

小普請組近藤左京組

御預り地立合 小澤庄次郎印

御書院番駒木根大内記御預り同心

永田奎之進印

小普請組南部主税支配加藤忠太郎内

高橋與四郎印

圖略。

小日向新屋鋪 星野又四郎引替上ヶ地 坪數四拾坪。

東南 淺香清七郎。飯村覺左衛門。西北 川村新八郎。

東南 八間。西南 五間。

同 櫻井次郎吉引替上ヶ地 坪數六拾五坪。

東 道。榊原平左衛門。北 森井滿之助。

東南 五間餘。西南 十三間餘。

小日向新屋鋪星野又四郎、櫻井次郎吉引替上ヶ地、御賄組屋鋪大繩之内御座い之付、御請取、直之右組に被成御差戻、四方間數坪數、右御繪圖之通、相違無御座請取申い。爲後日仍如件。

寛政五丑年八月十一日

御賄六尺頭 菊池郷左衛門印

御普請方改役

鈴木喜太郎殿

御普請方

宮崎段七殿

前書御繪圖之通境目立合い處、御改之通り相違無御座い。爲後日仍如件。

小普請組菅沼大膳組

榊原平左衛門印

寄場奉行村田鐵太郎支配

川村新八郎印

御賄六尺

淺香清七郎印

御臺所御膳所御臺所頭支配六尺

飯村覺右衛門印

賄組屋鋪



圖略

本郷丸山 鹽澤利兵衛上ヶ地 坪數六拾坪餘

東 小菅文藏。 西 吉川茂市。  
南 小笠原佐渡守中屋鋪。 北 道。

東 十間。 西 十二間。  
南 五間二尺。 北 五間四尺。

本郷丸山甲府小普請鹽澤利兵衛上ヶ地、拙者に被成御預、四方間數坪數、右御繪圖之通、相違無御座預申。爲後日仍如件。

寬政五丑年八月十四日

進物取次番之頭飯田市太郎組下番 市 濤印

御普請方

菊間 庄助 殿

御普請方改役假役

角田武右衛門 殿

前書御繪圖之通境目立合ひ處、御改之通り相違無御座預。爲後日仍如件。

御廣鋪番之頭萩野小左衛門・松田小兵衛・都筑七郎太夫組伊賀者

小菅文藏 印

進物取次番之頭飯田市太郎下番

吉川茂市 印

小笠原佐渡守内 喜多尾源太兵衛 印

圖略

小石川富坂上 伊右衛門引替上ヶ地 坪數六拾坪

東 小田熊太郎。 西 市川喜太郎。  
南 道。 北 松平豊前守。

東 十五間。  
南 四間。

小石川富坂上伊右衛門引替上ヶ地、御掃除の者組屋鋪大繩之内に御座預之付、御請取、直之右組に被成御差戻、四方間數坪數、右御繪圖之通、相違無御座請取申。爲後日仍如件。

寬政五丑年八月十八日

高倉助右衛門組御掃除世話役

小倉千五郎 印

同人組御掃除組頭

小田喜四郎 印

掃除之者  
組屋鋪

御普請方改役

林部善太左衛門 殿

御普請方

菊間 庄助 殿

前書御繪圖之通境目立合ひ處、御改之通相違無御座預。爲後日仍如件。

二丸御留守居支配御小人

市川喜太郎 印

紅葉山御靈屋附森秀巴支配小田熊太郎病氣二付

森重五郎 印

松平豊前守家來

大木儀右衛門 印

圖略

殷昌期



根津元御屋鋪之内 鈴木彌四郎上ケ地 坪數五拾坪。

東 道。 高山平次郎。  
南 吉川幸七。 長田德兵衛。  
北 西  
東 五間。  
南 北 十間。

根津元御屋鋪之内甲府小普請鈴木彌四郎上ケ地、拙者に被成御預ケ、四方間數坪數、右御繪圖之通、相違無御座預り申い。爲後日仍如件。

寛政五丑年八月十九日

御普請方改役 鈴木喜太郎殿

御普請方假役 端山定五郎殿

前書御繪圖之通境目立合い處、御改之通り相違無御座い。爲後日仍如件。

西丸御門番之頭大前孫兵衛組同心 長田德兵衛印

御勘定所御普請役 吉川幸七印

火消役森川織部組同心 高山平次郎印

西丸御裏門番之頭大前孫兵衛組同心 長田德兵衛印

長田德兵

圖略○

小石川 後藤彌左衛門引替上ケ地 坪數六拾七坪餘。

東 道。 横川文吉。  
南 安藤甚之助。 北 西

東 十四間三尺。  
南 北 西 四間四尺。

小石川阿部伊勢守上ケ地之内後藤彌左衛門引替上ケ地、拙者に被成御預○申預り申い。爲後日仍如件。

寛政五丑年八月廿二日

御普請方改役 清水三郎右衛門殿

御普請方 菊間庄助殿

前書御繪圖之通境目立合い處、御改之通り相違無御座い。爲後日仍如件。

野村次郎左衛門組御小人 安藤甚之助印

小普請方御掃除之者 横川文吉印

圖略○

四谷鮫橋千日谷 金田藤八郎當分拜借地 坪數百四拾七坪。

東 渡邊和吉。 久住六郎左衛門。  
南 道。 北 西 野田文藏支配所。

東 十七間餘。  
南 北 八間四尺。

四谷鮫ヶ橋千日谷清水龜之助上ケ地、今度願之通、拙者當分拜借地被成御渡之、四方間數、右御繪圖之面、御定杭之通、相違無御座請取申い。爲後日仍如件。

寛政五丑年八月廿四日

御膳奉行支配御春屋御門番人 金田藤八郎印

殷 昌 期

安藤甚之助

金田藤八郎



御普請方改役

清水三郎右衛門殿

御普請方假役

端山定五郎殿

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通り相違無御座ハ。爲後日仍如件。

支配勘定

久住六郎左衛門印

小普請組近藤左京組

渡邊和吉印

御代官野田文藏手代

中村小市郎印

支配所立合

圖略

濱町大川通 物揚場。

東大川。西道。

南道。北道。

東西北。西間。七尺。

濱町大川通酒井修理太夫<sup>○忠</sup>中屋鋪附物揚場所、今度願之通被仰付、被遊御渡之、四方間數坪數、<sup>○中</sup>奉請取<sup>ハ</sup>。爲後日仍如件。

寬政五丑年八月廿五日

御普請方下奉行

明樂八五郎殿

同改役

鈴木喜太郎殿

酒井修理太夫内

池上太兵衛印

圖略

巢鴨西丸町 中島直五郎上ケ地 坪數百坪。

東北 渡邊富五郎。西南 町田吉太郎。

東南 酒井雅樂頭下屋鋪。

巢鴨西丸町中島直五郎上ケ地、拙者<sup>ハ</sup>被成御預、四方間數坪數、<sup>○中</sup>御預り申<sup>ハ</sup>。爲後日仍如件。

寬政五丑年八月廿七日

小普請組青山美濃守組

渡邊富五郎<sup>清</sup>印

御普請方改役假役

角田武右衛門殿

御普請方假役

端山定五郎殿

元方御金同心

町田吉太郎印

小普請組青山美濃守組

渡邊富五郎印

酒井雅樂頭内

吉澤九十郎印

屋鋪渡預繪圖證文

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通り相違無御座ハ。爲後日仍如件。

寬政五癸丑年

殷昌期



八月二日預。前島寅之助上ヶ地  
一、四谷内藤宿新屋敷百四拾七坪餘

小普請組南部主稅支配  
加藤忠太郎  
預地。

但、外之九拾坪餘寅之助預地共預。

(朱) 文化五辰年二月四日吉田伊左衛門に渡。

八月十九日預。鈴木彌四郎上ヶ地  
一、根津元御屋敷之内五拾坪

西丸御裏門番之頭大前孫兵衛組同心  
長田徳兵衛  
預地。

(朱) 文化十二亥年九月三日長坂市右衛門に渡。

八月廿五日渡  
一、濱町大川端中屋敷附物揚場地所

酒井修理大夫  
屋敷書拔

寛政五丑年八月廿三日

伊豆守殿○松平 丹阿彌を以御下ヶ、阿波守○長田 請取。  
御普請奉行に。

稻垣定淳

矢部正勝

安藤定名

安藤八郎右衛門拜領屋敷  
西久保元土石場向千四百坪餘之内五百貳拾坪  
同所千四百坪餘之内  
八百八拾坪餘  
稻垣若狭守拜領下屋敷  
麻布白銀田島町貳千四百坪餘之内三百坪  
矢部半左衛門拜領屋敷  
西久保城山六百拾坪

稻垣若狭守○定淳  
御小性組淺野野人組  
矢部半左衛門○正勝  
御書院番仙石伯耆守組  
安藤八郎右衛門○定名

植村正智

渡邊久年

堀田通胡

長坂庄八

朝比奈泰文

藤山廣高

中山勝信

笹本清次郎

荒木常道

太田晴義

青山幸完

渡邊助三郎拜領屋敷  
小川町裏神保小路五百三拾坪  
植村隼人拜領屋敷  
北本所二ツ目三ツ目之間四百四拾六坪餘  
長坂庄八郎拜領屋敷  
本所石原元御藏屋敷跡百五拾四坪餘  
堀田鐵五郎拜領屋敷  
本郷御弓町七百坪之内貳百坪  
藤山數馬拜領屋敷  
麴町元山王貳百坪  
朝比奈新九郎拜領屋敷  
麴町貝坂五百三拾坪餘  
笹本清次郎拜領屋敷  
芝三田百坪  
中川金次郎拜領屋敷  
四谷舟板横町百六拾四坪  
太田藤之助拜領屋敷  
深川大和町五百坪  
荒木三四郎拜領屋敷  
赤坂三軒屋三百貳拾坪  
右願之通屋敷相對替被仰付の間、得其意、例之通可被致し。  
八月廿九日 ○寛政五年  
○中略。

御先手  
植村隼人○正智  
小普請組淺野佐渡守支配  
渡邊助三郎○久年  
御小性組佐野右兵衛組  
堀田鐵五郎○通胡  
小普請組阿部大學組  
長坂庄八郎  
御小性組大久保豊前守組  
朝比奈新九郎○泰文  
御書院番諏訪若狭守組  
藤山數馬○廣高  
小普請組酒井紀伊守組  
中山金次郎○勝信  
支配勘定  
笹本清次郎  
小普請組菅沼大膳支配  
荒木三四郎○常道  
明支配  
太田藤之丞○晴義  
相對替御書附書拔

西丸下屋敷御用之付家作共差上、湯島天神下立花出雲守屋敷三千百四拾五坪家作共被下之。

青山大膳亮○幸完



右於芙蓉之間、老中列座、伊豆守○松平申渡之。

立花種周

立花出雲守○種周

湯島天神下屋敷御用之付差上、西丸下青山大膳亮屋敷家作共被下之。

—寛政録

附記、一  
關東河川  
修築

〔附記、一〕 關東河川修築

八月四日 ○寛政五年  
○中略

金三枚。

御勘定組頭  
各務傳之丞

時服三。

御勘定  
西野嘉内

木城貞右衛門

右之關東筋川々御普請見分爲御用被遣之付被下旨、於御右筆部屋縁類、伊豆守○松平申渡之。攝津守○堀田侍座。

金貳拾枚。

御普請役元々支配勘定格  
早川富三郎

右同斷。

八月七日 ○寛政五年  
○中略

攝津守殿 ○堀田 正教

御目付。

近年相續諸國大水有之、年々御普請御入用多分相掛り候處、此度關東川々大水之有、定式御普請所大破

計、御料村方之有、自普請所、私領寺領共、舊例等申立、依願一統御普請被仰付筋之無之、見分之上、大川通格別之大破、村方自力難及、或之領主地頭之手當難行届、御料所にも可差障場所、糺之上、品之寄御普請等被仰付候義も可有之、左迄も無之破損所、或内郷堤往還道橋樋類等破損之分、猥之御普請等、村方願出共不取上管之間、決り願出間鋪候。

右之通去々亥年 ○寛政三年 相觸候得共、心得違之願も多分有之、未行届候間、此度之猶更本文之趣急度相立候様、掛り之面々取計候間、村々之有堅相守、心得違無之様、御料私領寺社領とも、御代官領主地頭より、不洩様猶又可被申渡候。

八月 ○寛政五年

十月廿九日 ○寛政五年  
○中略

御代官  
淺岡彦四郎

金二枚。

時服二。

御勘定  
米津猪之助

同。

支配勘定  
久住六郎左衛門

右之關東筋川々御普請爲御用被遣之付被下旨、於御右筆部屋縁類、伊豆守申渡之。備前守○京極侍座。

十一月六日 ○寛政五年  
○中略

攝津守殿 ○堀田 正教

般昌期



御目付に。

今般關東川々御普請之付、先達を見分之者目論見外之追願増願、於場所願出共不取上管之間、決  
多願出間敷い。掛り役人差圖次第、諸事無差支、正路之御普請可相仕立い。御普請之儀、都多請之相  
仕立外、請負人等相渡中間敷、且御普請中無謂竹木石其外御普請之諸色、高直之致間敷い。

右之趣、御料之御代官、私領之領主地頭、不洩様可申渡い。

右之通武藏下總上野下野常陸領分知行有之面々、可被相觸い。尤西丸御目付にも、可有通達い。

十一月 〇寛政五年

三月廿一日 〇寛政五年

攝津守殿

御目付に。

關東筋川々御普請被仰付い付、領知并知行之内、御普請有之い面々、爲御禮、老中支配之分老中彈正  
大弼 〇本多忠義 可相越い。若年寄支配之分、伊豆守 〇松平信明 若年寄中可罷越い。病氣幼少之分、名代、  
在邑飛札、可差越い。

右之通可被相達い。尤西丸御目付にも可有通達い。

三月 〇寛政五年

四月廿三日 〇寛政五年

關東筋川々御普請御手傳御用被仰付い。

松平出羽守  
名代松平美作守 〇直伊

松浦壹岐守 〇清

右於波之間、老中列座、伊豆守 〇松平信明 申渡之。 〇中略

關東筋川々御普請御用被仰付い、在邑ニ付以奉書達之。

加藤佐渡守 〇明

七月六日 〇寛政五年

時ふく五。

御勘定奉行  
柳生主膳 〇久通

金五枚。

御勘定吟味役  
佐久間甚八 〇茂

右之關東筋川々御普請相勤い之付被下旨、於芙蓉之間、老中列座、對馬守 〇安藤信成 申渡之。

金三枚。

御勘定組頭  
各務傳之丞

同貳枚つゝ。

御代官  
淺岡彦四郎

御勘定  
米津猪之助

銀十五枚。

木城貞右衛門

同格元

早川富三郎  
名代和田爲右衛門

右同斷之付被下旨、於御右筆部屋縁類、伊豆守 〇松平信明 申渡之。攝津守 〇堀田正政 侍座。

金貳枚。

御勘定組頭  
篠木源左衛門

殷昌期



銀廿枚。

同三枚。

御勘定 大貫與太郎

山田常右衛門

同江戸懸助 西澤與左衛門

名代石井忠四郎

右同斷御用於江戸表取扱相勤ひ之付被下旨、於同席同人申渡之。侍座同前。

七月七日 寛政五年

攝津守殿 堀田正敦

御目付

銀三枚宛。

御小人目付

人

右之關東筋川々御普請御用相勤ひ之付被下之。

七月十九日 寛政五年

金貳枚。

御勘定 西野嘉内

右關東筋川々御普請御用相勤ひ之付被下之旨、於御右筆部屋縁類

伊豆守 松平信明 申渡之。攝津守 堀田正敦

侍座。

十月十五日 寛政五年

御白書院

關東筋川々御普請御用仕廻候。

松平出羽守 松平

同十。

同斷。

時服十。

右之關東筋川々御普請御手傳御用相勤ひ之付被下旨、於御白書院縁類 老中列座、采女正 戸田氏敦 申渡之。

銀三十枚。羽織。

松平出羽守家來 柳多四郎兵衛

時服三。羽織。

副奉行 平賀主稅

銀貳十枚。羽織。

番頭留守居兼 布施作左衛門

同。

用 渡邊政右衛門

銀十枚。羽織。

同 市原次郎左衛門

同。

物 萩野喜内

同。

留守居 福島才右衛門

同。

物 横田新兵衛

銀三十枚。羽織。

目 玉木勝之進

時ふく三。羽織。

松浦壹岐守家來 志目岐十郎右衛門

殷昌期



銀十枚。時服貳。羽織。

同。

同。

銀三十枚。時服三。羽織。

銀十枚。時服貳。羽織。

同。

用人 古川甚右衛門

元~~々~~役 城 喜左衛門

留守居 菅 沼 量 平

惣奉行 加藤佐渡守家來

副奉行 石川 外 記

毛 利 團 右 衛 門

元~~々~~役 石川 茂 助

留守居 和田 角 之 進

寛政録

右同斷之付被下旨、於檜之間、伊豆守○松平申渡之。

四日 ○寛政五年八月 關東川々修復檢視として、勘定組頭各務傳之丞元確はじめ四人、暇給ひ賜物あり。

十日 ○寛政五年八月 令せらるゝは、近き頃國々出水にて、としぐ修理の費用多く、此たび關東川々大水、これ

まで修整の地も破損し、公私社領とも、舊例により修補請ふとも、願かのふまじく、點視せしめ、

破損多き村々、または采邑のものゝ自力に及ばず、公領にさはりある場所あらば、査檢し、修理かのふ

べし、左までもあらぬ場所、または堤往還橋樑かど損じありて、修補請ふとも、不充ゆへ願出まじと示

さる。八日 ○寛政五年十一月 ことび關東川々修理し給ふにより、點檢せしめし後は、請ふ事ありともかかふまじ、か

りの吏人指揮により、正しく修整なし、諸用村々に任し、保人<sup>ハ</sup>委任せず、また修補のうちには竹木其

外の物價も、騰貴させまじと令せらる。廿三日 ○寛政五年四月 松平出羽守直行、松浦壹岐守清、加藤佐渡守明陳、關東川々修復の事命ぜらる。佐渡

守明陳は、在邑にて奉書をもつたふ。

六日 ○寛政五年七月 勘定奉行柳生主膳正久通時服五を賜ひ、同じ吟味役佐久間甚八茂之は金五枚を賜ふ。其

他所屬のともがら賜物差あり。これは關東川渠浚利奉はりしによりてなり。

十五日 ○寛政五年十月 松平出羽守治郷、加藤佐渡守明陳、松浦壹岐守清、關東川々浚利助役つとめしにより、

出羽守治郷は時服二十、佐渡守明陳、壹岐守清は、おのゝ十賜ふ。その家士等時ふく銀羽織をたまふ

—文恭院殿御實紀

附記、二 城門修理

〔附記、二〕 城門修理

八月五日 ○寛政五年

銀三枚。

御大工頭 馬場 助左衛門

名代和田源助

右と小石川御門御普請御用相勤ひ之付、被下旨、於御右筆部屋縁頼 同人○松平申渡之。攝津守○堀田侍

座。

銀三枚。

御作事下奉行 益池 半 兵 衛

右同斷之付被下旨、於躑躅之間、若年寄中出座、備前守申渡之。

般 昌 期



銀三枚つゝ。

御徒假役

内山半次郎

忌御被官  
黒子半右衛門

大棟梁  
平内大隅

銀二枚。

勘定役

田中太一郎

右同斷之旨、於燒火之間、攝津守申渡之。  
九月十三日 〇寛政五年  
〇中略

銀貳枚。

御被官

黒子半右衛門

右之小石川冠木御門并大番所其外御普請御用相勤之付被下旨、於燒火之間、備前守〇京極  
高久申渡之。

寛政録

〔附記、三〕 屋鋪受授

圖略〇

小石川富坂上 倉本三郎兵衛上ケ地 坪數五拾九坪餘。

東 市川喜太郎。 西 木下喜左衛門。  
南 道。 北 松平豊前守。

東 十三間二尺。  
南 西 四間三尺。

小石川富坂上倉本三郎兵衛上ケ地、御掃除之者組屋鋪大繩之内御座之付、御請取、直之右組に被成御  
差戻、〇申請取申付。爲後日仍如件。

御掃除頭高倉助左衛門組御掃除組頭  
渡邊忠兵衛印

寛政五丑年九月五日

御普請方改役  
林部善太左衛門殿

御普請方  
佐藤源七殿

小石川富坂上御掃除組屋鋪大繩之内倉本三郎兵衛上ケ地、御請取、直之右組に御差戻之付、銘々屋敷境目  
立合ハ處、御改之通相違無御座之。爲後日仍如件。

寛政五丑年九月五日

松平豊前守内  
土井琢右衛門印  
高倉助右衛門組御掃除組頭  
木下喜左衛門印  
二丸御留守居支配御小人  
市川喜太郎印

御普請方改役  
林部善太左衛門殿

御普請方  
佐藤源七殿

圖略〇

四谷南伊賀町 富田富五郎上ケ地 坪數百五拾三坪餘。

東北 山岡虎次郎。 西南 玉置丹次郎。  
東南 道。 西北 祥山寺。

東北 二十六間二尺餘。 西北 貳十四間五尺餘。  
東南 六間餘。 西南 六間餘。

殷昌期

附記、三  
屋鋪受授

掃除之者  
組屋鋪



玉置丹次

四谷南伊賀町甲府小普請富田富五郎上ヶ地、拙者の被成御預、略中預り申ひ。爲後日仍如件。

寛政五丑年九月廿二日

明屋鋪番伊賀者  
玉置丹次郎印

御普請方

野中利三郎殿

御普請方改役假役

角田武右衛門殿

前書御繪圖之通境目立合ひ處、御改之通相違無御座ひ。爲後日仍如件。

明屋鋪番伊賀者

玉置丹次郎印

同

山岡虎次郎印

種徳寺末

祥山寺印

屋鋪渡預繪圖證文

附記、四  
郡代屋鋪  
普請

〔附記、四〕 郡代屋鋪普請

九月十四日 ○寛政五年

時服三。

小普請奉行

神保佐渡守○長

右郡代屋敷御普請御用相勤ひ之付被下旨、於芙蓉之間、老中列座、備中守申渡之。若年寄中侍座。

銀拾五枚。

御勘定組頭

各務傳之丞

名代田口五郎左衛門。

小普請方

竹内半十郎

名代山上熊太郎

同拾枚。

同七枚。

御勘定

大貫與太郎

支配勘定

久住六郎左衛門

右同斷之付被下旨、於御右筆部屋縁頼、伊豆守○松平申渡之。

銀五枚。

小普請方吟味役

川島仁左衛門

大工棟梁

溝口淡路

右同斷之付被下旨、於燒火之間、備前守○京極申渡之。

寛政録

十四日 ○寛政五年九月 小普請奉行神保佐渡守長光郡代屋敷修築の事奉はりしをもて、時服を賜ひ、その他所

屬の輩おのゝ賜物差あり。 ○文恭院殿御實紀

九月十八日戊申 ○寛政五年(紀元二四五三) 將軍家齊○徳川吹上苑ニ臨ミ、魯西亞國へノ漂流

民ヲ引見ス。 ○文恭院殿御實紀。通航一覽。

漂流民引見 時勢ノ漸ク國際問題ニ留意ヲ促スニ至レルコトヲ見ル可シ。

十八日 ○寛政五年九月 この日吹上にして、去りし天明二年十二月伊勢國より出帆し、魯西亞國へ漂流し、かの

國よりおくり歸され、松前地に於て目付石川將監忠房・村上大學義禮請取かへりし伊勢國白子濱船頭幸太

夫及び水主磯吉を御覽あり。松平越中守定信・小老加納遠江守久周・平岡美濃守頼長・高井主膳正清寅など

座し、また事のさま尋問すべきために、小納戸頭取龜井駿河守清容・小野河内守近義・多紀永壽院元惠・桂

川甫周國瑞、目付には中川勘三郎忠英・矢部彦五郎定令列る。さて問答しばらくありて後、御前にも入御

事蹟

漂流民引見

般昌期



あり、漂流民には午飯下され、ふたゝびめされて問答數十條、かれより申事もありて、やがて暇下されまか  
ん出ぬ。

文恭院殿御實紀

同年五年○寛政 九月十八日、文恭院殿吹上に於て漂流民を御内覽あり、老中若年寄及び近侍の輩、御側に候す。  
官醫多喜永壽院、桂川甫周命によりて事情を尋問す。

寛政五年九月十八日、將軍家吹上へ御成、魯西亞國より歸朝せる幸太夫磯吉を御覽あり。彼者本は勢州  
白子の船頭なり。天明二亥年按するに、實年誤り。十二月、駿州の沖にて難風に逢ひ、魯西亞に自注、日本より東、北一萬四千里。漂着し、  
彼國に滞留する事十二年にして、今年五年○寛政 九月三日按するに、去年（○寛政四年）九月五日の誤なり。下同じ。蝦夷のネモロの地に送り歸  
されしとなん。片山氏筆記。近世東西略史。

寛政五年 漂流民御覽席圖

|      |     |      |    |                               |                |
|------|-----|------|----|-------------------------------|----------------|
| 付行   | 目奉  | 御吹   | 圖所 | 上覧                            | 洗關             |
| 内洲   | 白御  | めり   | 利砂 | 磯吉                            |                |
| 御小納戸 | 御小姓 | 段り上御 | 御  | 彦五郎<br>勘三郎<br>永壽院<br>甫周<br>河守 |                |
|      |     |      |    | 越後守<br>中川                     | 主美<br>屋藏<br>正守 |
|      |     |      |    | 御                             | 御              |

漂流民之圖略

寛政五年九月十八日吹上之於上覽所、去天明二年壬寅十二月十三日勢州白子を出船し、其夜駿州の沖  
にて、俄に大風吹放たれ、同明三年卯七月廿日、魯西亞の屬島アミツカと云地へ漂着いたし、夫より  
カムサスカ、イキツカ、イルヲツクといふ地を経歴し、歐羅巴洲なる魯西亞のみやこへ出女帝に見えて  
許を請、去年四年○寛政 九月三日蝦夷のネモロと云地にて、彼國の船にて送り歸されたる神昌丸の船頭大黒  
屋幸太夫同水主磯吉なる者を按するに、九月三日は蝦夷地ハラサンの沖を渡來せし日次にし。上覧有。御物見の正面に御簾を  
て、ネモロに着せしは、同月（○寛政五年九月）五日なり。懸、御透見被遊。御座の右の方御入側には、松平越中守按するに、老中定信。加納遠江守、平岡美濃守、高井主膳正  
守・多喜永壽院・桂川甫周列座、是等は事由を尋訪すへき旨を命せらる。次に御目付中川勘三郎・矢部  
彦五郎、此兩人は今日の執事なり。御座の御後は御小性、御左は御小納戸群居せり。御白洲に床几一脚  
を居る。これは彼二人のものゝ爲儲けたるなり。扱午の初に向とすとすする頃ほひ、幸太夫磯吉を召出さ  
れ、幸太夫齡四十二髪をは上に組て後に垂れ、黒き絹にて包、黒き氈毛を以はさみ、襟をは黄金にて製し  
たる少き鐘のときものを懸、桃色銀莫臥兒にて製したる筒袖の外套に、赤き玉の衣紐を施し同じをり  
物の袴をはき、こん地の錦のしたきを着、足は白莫大小の上に、魯西亞革の深沓をはき、魁藤の杖を突、  
磯吉は齡二十八、同じ様に髪を組、幸太夫懸たる如き物を、銀にて作りたるをかけ、笠を脇はさみ、紺  
哆囉呢のうはきに、銀のぼたんを付、したきは猩々緋に黒き縁を懸たるを着し、黄黒間道の天鷲絨の袴  
をき、白めりやすのうへに深沓をはき、是は幸太夫沓とは少違、半より上柿色の革を繼たり。製作は同  
股 昌 期



じ様なり。諸共に笠を地に置拜をなして床几に坐したる體、更に此國の人とはみえず、紅毛の形に髻鬚たり。夫よりかの二人に問を下すに、こたふる所的實にして、聊も虚誕なし。誠に千古の一大奇事也。

一、其方とも、最初着船したる所は何と申地成や。

アミシツカと申島へ漂着仕ゆ。此所に四年罷在ゆ内、食事は魚の潮蒸、黑白合の根を水にて煮、碎て白酒の如くに致しゆ物をたべ居申ゆ。女は腮に二本、鼻の穴に二本角有之面體、并手の甲に青筋を入黒に仕ゆ。其通自然に生ゆ物には無御座、鯨の牙にて筆の軸の大きに削、長二三寸懸はつし相成ゆ様に拵ゆ。常にははつし居申ゆ。男子は被髮にて、男女とも鳥の毛を着、穴居に御座ゆ。又カムサスカと申地へ罷越、在留の中、乗組の内六人死亡仕ゆ。其病躰日本にては見及ひ不申、チャンと申病に御座ゆ。白註、和蘭にてシケウルホイクと云、青眼牙拵なり。 此地に魯西亞の加比丹白註、官名なり、紅毛にもあり。、チモへオシホイチと申者に出逢ひ、オホツカと申地へ連渡られ、夫よりイルカウツカと申地に四年滞留仕ゆ。此所は寒氣殊に甚敷、冬の間は外出仕ゆには

裘を著し、狐皮にて面を包、眼計出して歩行仕ゆ。若引合の透間より耳鼻などを顯しゆ得は、こゝへて石のこたく堅く相成、家に入暖氣を得ゆへは、忽解落申ゆ。頬先などは多くりたるごとく拔落申ゆ。右の節は、乳酪に丁子肉桂の末を加へ、口を撫ゆ得は愈申ゆ。嚴敷寒氣を請ゆ得ば、手足脱落申ゆ。既に同船之者庄五郎と申者、右之症に多相惱ゆ所、彼國之醫師大成鉤を懸ゆ鋸にて足を挽切、焼酒にひたしゆ木綿にて、切口を包、療治仕ゆ。煎藥は硝子に入與へ申ゆ。勿論療治前にも飲せ申ゆ。食物の手宛は、一日に銅錢十文つゝ相渡ゆ。右之錢にて牛肉に麥などを調へ給申ゆ。十文にて一日の雜費十分に御座ゆ。乍去右之錢後には繁々相渡し不申ゆ。不自由にゆは、元手借與ゆ上、地代年貢等も取申間敷ゆ間、商

人に相成ゆへは、追々取立申ゆまゝ、奉公仕ゆとも致し、彼地の人に相成ゆ様、一向相勸めゆ得とも、何分日本へ歸國仕度願に御座ゆ故、一向承引不仕、兎角仕ゆる露命を繫、あれ是に歸國願之事相願ゆへとも、一圓埒明不申ゆは、中にて支へ、女帝の御前に達し不申故のよし承り出しゆに付、私一人都へ登り、帝へ直訴仕ゆ。其砌女帝は、へーホルと申所に御座被成ゆ。私儀、早速被召出所、宮中には數多の官人嚴重に相詰、玉座の左右には、官女雪のこたく圍繞仕ゆ故、心恥しき様に、猶豫仕ゆへは、御老中と可申官人、手を取て女帝の御前へ伴ひ、兩手を重出しゆ様に教られゆ故、右のこたく仕ゆへは、帝御手を差延指先を私掌の上へ、そと御のせ被成ゆを、三度いたゞきゆて、昔ゆ様に可仕と教へられゆ間、如右仕ゆ。これははじめて帝へ見えゆ時の禮儀のよしに御座ゆ。歸國願も早速相すみ申ゆ。偕王城の構へは、一向城とは相見不申ゆ。練土にて土藏作りに仕、或は石にて疊上、五重六重に仕ゆ。家の二重目三重目迄、築山泉水などを拵、花畑など作申ゆ。下地を銅にて張、其上へ土を入ゆものゝよしに御座ゆ。家作之儀は、王城も平人のすまひも、左迄違ゆ儀無御座ゆ。

一、火災の儀如何ゆ哉。

右申上ゆ通、家居大かた練土石にて御座ゆ間、火災は甚稀に御座ゆ。彼地に居ゆ内、火事兩度御座ゆ。二階の火事を三階にて存不申、尤隣家等にて猶更存不申ゆ様に御座ゆ。畢竟土家焼失仕ゆ儀は無御座ゆ。家内の道具或は造作等、焼失致ゆ迄に御座ゆ。乍去木にて家作仕ゆ所は、隨分火災も御座ゆよし承申ゆ。一、城櫓の上に、大成自鳴鐘有之由、見及ゆ哉。

殊之外大造成物にて御座ゆ。車の大き、此國にて仕る水車の輪ほとつゝ相見申ゆ。



一、城門之上に、魯西亞中興の帝伯多録の像有よし、見及ゆ哉。  
伯多録の像は、靈屋に安置仕御座ゆ。御寶庫に大成磁石有之ゆ。大き三尺計にて、四角に仕、筋金を入  
りて釣下御座ゆ。其四角に百貫つゝの礎一挺つゝ吸付居申ゆ。磁石の脇に仕懸ゆ螺旋を扱ゆへは、吸所  
の喰違ゆ故にや、四方の礎地に落申ゆ。又はねちを戻ゆへは、件の礎飛付、如元吸付申ゆ。

一、ムスクワに大石火矢有之由、見及ゆ哉。  
銃口へ仰向に臥ゆて、手を延ゆ所、指先少しつかへ申ゆ。長さ三間計に相見申ゆ。同所に大鐘御座ゆ。  
焼落ゆよしにて、鐘は大地に喰入居申ゆ。廻を掘石垣致、其内へ下りゆる見ゆに、其大なる事言語に絶  
し申ゆ。重き日本の四貫五貫賦〇百目を一貫目に仕、二千五百貫目有之ゆ由、小山の如く相見え申ゆ。

一、駝は見及ゆ哉。  
ヤカウツカよりイルコウツカへ参りゆ道にて見申ゆ。一躰鼠色にて、殊外大きく背に瘤有之ゆ。頭は殊  
外細長く、小きものに御座ゆ。ヘルヘルウクと申ゆ。

一、多ばこは此方同様にゆ哉。きせるは焼物にゆ哉、金物にゆ哉。  
此方のより下品に御座ゆ。やはりタバコと申ゆ。きせるは、やきもの、金石も御座ゆ。水晶にて天火を  
とり、夫にてたべ申ゆ。私ともは無勿體ゆ故、天火にてはたべ不申ゆ。何故と尋申ゆ間、もつたるふき  
むね申ゆへは、わらひ申ゆ。

一、武藝は稽古いたしゆ哉。

右の躰一向見及不申ゆ。足輕躰の人鐵炮稽古仕ゆを見物仕ゆ。専ら足の踏を習ひ申ゆ。弓は侍の持ゆ躰

見及不申ゆ。獵師の持ゆを見懸申ゆ。至極そまつ成ものにて、蝦夷人の弓同様に御座ゆ。又ものは一向  
切不申ゆ。金色は荒砥にて白研に仕ゆことく御座ゆ。

一、老中とも相見ゆ人、往來の躰如何ゆ哉。

是は至て手輕に御座ゆ。輿高く立派に作り、車の輪四ツに仕、馬六疋にひかせ申ゆ。輿の内には四人程  
乗申ゆ。私儀も折々御老中と同車にて野遊ひに出ゆ事有之ゆ。女帝の行幸迎も、手重儀無御座ゆ。先驅  
兩人立ゆものみに御座ゆ。乍併跡備はよほどみえ申ゆ。人留之儀無御座ゆ。

一、首に懸ゆは何にてゆ哉。腰に下るものは何てゆ哉。

腰に提ゆは、女帝より賜りゆ時計にて御座ゆ。襟にかけゆは、メンタアリと申物にて、片面は開祖伯多  
録帝乘馬の像、片面は當今女帝アカテリナの肖像に御座ゆ。是を女帝より賜りゆ。此メンタアリを懸ゆ  
ものは、魯西亞國中何方へ参りゆても、籠略の取扱ひ不仕ゆ。總多私共儀は、制外に仕御座ゆへは、何  
方へ参ゆも、咎め人も無御座ゆ。食事の節杯も、御老中宅へ参、一所に給ゆ事ふとも御座ゆ。

此問答終て、上にも暫入御。漂民にも晝食を賜ふ。諸支度相濟て、即白洲へ召出さる。此度は幸太夫  
は油綠色の羅呢ラシヤ、磯吉は老虎色の羅呢ラシヤなり。

一、其方共魯西亞にて救命の恩、其外の厚情仇には存間敷事に有之ゆ。如何そんし罷在ゆ哉、大切に存  
居可申事にゆ。

恩儀においては、聊も仇には存不申、乍去大切と申程の儀は無御座ゆ。

一、左程に恩義も有之ゆ所、何故強て願を立、日本へ相戻りゆ哉。



乍恐日本國に老母妻子兄弟共も御座ゆへは、恩愛の情相忘かたく、其上食物等も不自由にて、難儀仕ゆ而已ならず、第一、言語明かに相通兼、朝夕心にまかせざる事勝に御座ゆ。身命を擲ひたすら歸國仕度段相願ゆ事にゆ。

一、言葉は覺ゆては無之ゆ哉。

是迎も聞取に御座ゆへは、誠に以萬分の一にて、まさかの所に至て、一向相通辯仕ゆ事相成兼、何角に付不辨利成事のみに御座ゆ。唯饑こへ申さる程の用を辨ゆ迄の事之御座ゆ。

一、歸國之儀申渡ゆ節、何ぞ被申付ゆ事無之哉。

老中と可申役人、歸國の砌被申ゆは、世界の國々大抵我國と交易通商せざるは無之ゆに、日本のみ通信無之ゆ。此度汝等を送還ゆに因、交易の儀を取結び度事有之ゆ、乍去強てと申筋にては無之ゆと、くれくれも申合られゆ。此儀帝より被仰渡たるにて無御座ゆ。全右役人の存寄にて被申聞ゆ事と推察仕ゆ。

一、彼地にて耶蘇宗門に入、改宗致ゆ者は、四十二日水を浴、うしろを向て唾吐し、其上にて名を改ゆよし、勿論名を改ゆ節も、水を浴せゆよし見及ゆ儀有之ゆ哉。

御尋のことくに御座ゆ。名を付ゆ時は、いつれ水を浴せ申ゆ事と相見え、七夜に小兒の名を付ゆ節も、大抵に水をたへ、小兒を水中に三度浸ゆ上にて、名を付申ゆ。小兒殊外啼申ゆ。

一、宗門に入不申ゆは、左様の儀見及申ましくゆ事之有之ゆ。

前にも申上ゆ通、私共は制外故、何方に參、如何様之儀を見ゆるも、左迄答る者も無御座ゆ。右様の儀、

心まゝに見物仕ゆ儀に御座ゆ。

一、十文字に致ゆを貴候儀、見及ゆ哉。自注、是切支丹の法器なり。

是は家々の入口に懸、人之首に懸申ゆ。名をキリストと申ゆ。但、此十文字にては無御座ゆ。末廣かりに横木三本入ゆ物に御座ゆ。都鄙人の宅に參ゆ節は、參りかゝりに先佛壇を拜し、其上にて主人挨拶仕ゆ事に御座ゆ。歸りゆ節も、主人は暇乞不仕、佛壇拜しきへ仕ゆ得は、よろしき事に御座ゆ。佛の事をこしつと申ゆ。こしつとは上と申すことにて、すかはち天の事を申ゆ様に承り申ゆ。

一、硝子を吹ゆを見ゆ哉。

私ベチエルボルへ出ゆ節、旅中萬端世話仕吳ゆキリロと申ゆ者、硝子師にてゆ間、彼宅に罷在ゆ内、見物仕ゆ。石を粉に仕、山鹽と小麦のときき物、其外に二品程交物に仕ゆ。是は承ゆへ共、教不申ゆ。板硝子を吹ゆには、先徳利のとききものを吹、筒に吹立、山鹽にて堅に筋を引、穴に入ゆへは、右の筋より二に破ゆ様之成申ゆ。右を三方土に重て塗塞ゆ竈の内へ並へ焼ゆへは、兩方へのひ、平に相成申ゆ。

一、瀧の製法見及ゆ哉。

随分見物仕ゆ。地を掘ゆて甕をいけ、厚板にて蓋を仕、多く穴を明け、上へ土をかけ、松杉の類總て脂多木を積ゆて、火を懸申ゆ。火廻りゆ時分、上より生草を覆ひ、蒸焼に仕ゆ得者、下の甕へ自然に溜り申ゆ。瀧一斗出ゆへは、上に水六升ほど湛へゆ物にて御座ゆ。水共に煎煉仕、收貯申ゆ。

一、哆囉呢の織方見及申ゆ哉。

是又見物仕ゆ。綿羊の毛を紡ぎゆて、突杼にて織申ゆ。織上ゆ節、水を噴き、毛硬き刷毛にてこすり、



疊付申ゆ。

一、魯西亞は、冬至の頃は、殊の外日短にて有之よしゆ。如何に覺ゆ哉。

さのみ短き様にも覺不申ゆ。只五月頃より八月頃迄は、夜中も殊外あかるく、曇ゆ晝よりはきと仕ゆ。細に認ゆ物なども、燈ふしにみえ申ゆ程に御座ゆ。

一、何ぞ格別恐敷と存ゆ事に逢ゆ儀は無之ゆ哉。

左程恐敷儀にも逢不申ゆ。唯可恐は彼國の寒氣に御座ゆ。最初にも申上ゆ如く、耳鼻も解落、手足切落ゆ時宜御座ゆへは、是程おそろしき儀は無御座ゆ。

一、雁は年中居ゆ哉。

大抵年中居申ゆ。其内春中旬より秋の初まで別て夥敷、卵をもうみ返し申ゆ。家々にも羽を切、鷺のこたくに養置、卵を取食料に仕ゆ。雄四五羽に雌三四十宛附置申ゆ。卵の味は甚よろしきものに御座ゆ。

一、ムスクワに大成石橋有之ゆよし見物致ゆ哉。其橋は損ゆて、とふじは板にて假橋を懸往來仕ゆ。

一、彼地にて、日本の事そんじ居ゆ哉。

何事に不依存居罷在ゆ。日本の事實に詳にてゆ。書物并日本圖なども見及申ゆ。日本人にては、桂川甫周様・中川淳庵様と申御方の御名をは、何れも存居申ゆ。日本の事を書ゆ書物の中にも、書のせて有之ゆ様に承及申ゆ。

中川淳庵は若州の醫なり。往年病死仕ゆ。彼邦には官醫の様に覺居申ゆ。

一、水車風車は見及ゆ哉。

水車前々に有之ゆ。鍛冶屋錢座等皆水車相用ゆ。風車は羽根四枚にて、殊の外大造成物に御座ゆ。是は流川無之所にて相用申ゆ。尤風無之節は廻り不申ゆ。

一、都の入口に、彼國の掟、石に彫付有之ゆ由、見及ゆ哉。

一見仕ゆ得共、文牒相分り不申ゆ。如何様成儀共辨別仕かねゆ。

私共歸國願度々差出ゆ得共、兎角遲滞仕ゆ故、日本へ通信仕ゆ段兼々承及ゆ故、紅毛人に便、日本へ送返呉ゆ様相願ゆ所、魯西亞の帝へ差出ゆ歸國願ひ、願下しに仕、魯西亞の手を放れゆは、送り歸し可申ゆよし申ゆ。海上何ほど懸り可申哉と相尋ゆへは三年懸りゆよし答申ゆ。魯西亞より、左程年月は懸り不申ゆ様に承りゆへとも、萬一願引しろい申ゆは、紅毛人に相願可申上存居ゆ内、歸國の儀被申渡ゆ事。

イルコウツカにて、朝鮮人を見申ゆ。唐人をも見申ゆ。北京の人の由に御座ゆ。

冬中權に乗、氷の上を犬に牽せ申ゆ。一人に犬四疋懸申ゆ。殊外早きものに御座ゆ。貴人は馬にて引せ申ゆ。

ペチエルポルに、鼠程の野猪、兎、雀程の矮鶴御座ゆ。野猪は歸國の節持歸り可申と存、三疋迄飼置申ゆ處、彼地の者とも、所詮保ち申ましくゆ段申聞ゆへとも、若やと存飼置ゆ處、不殘落申ゆ。

當今は女帝にて、御名をアカテリナアンキセウナと申、御年六十四、太子は御名、パウルトロイチと申ゆ。御年三十九。皇孫は二人。御名アレキサンデルハウセイチと申、御年十六。一人は御名コンスタン



チンパウロイチと申、御年十四に御成なされゆ。

右件の問答終、其後二人の漂流は、御暇給り、きじ橋の外成御厩に泊に歸ぬ。家も昇平大和の御代に生れ出、御身近く仕ふまつる故に、すでにかゝる事をも見聞すれ。去にても、たゞに聞捐へき事ならねばとて、柄短きふんでをとりて、ひそかにしるし終こと爾なり。栗園漫抄。漂流御覺記。○按するに、此記事官醫桂川甫周か記すところなり。

同年〇寛政六年甲寅年六月十一日、漂流二人多年艱難を凌ぎ、歸朝せし事を賞せられて、金子を賜ひ、番町御藥園中に居住せしめ、御手當あり。

寛政六甲寅年六月十一日采女正按するに老中戸田氏教渡す。

幸 太 夫 磯 吉

右之者とも、外國の漂流致ゆ處、年月之艱難を凌、無恙歸國仕ゆ事、奇特なる志に付、金三十兩つゝ被下之。

一、此度は別儀、在所には不相返、當地に被差置ゆ。住所之儀は、番町明地藥草植場之内住居爲仕、月々爲御手當、幸太夫の金三兩、磯吉の金二兩つゝ相渡可申ゆ。

一、兩人とも勝手次第妻を呼迎へ、安堵いたし住居の様可被致ゆ。尤植物手傳等申付ゆ儀は、先見合、無役に差置可被申ゆ。

一、外國之様子等、みたりに物語不仕様可致ゆ。

右之趣被得其意、當人にも可被申渡ゆ。且又兩人領主へも、何れもより按するに、何れもとあるは何後にや詳ならされとも、かれを官醫遊江長伯御預の關中もと置しは、官醫なるべしれ、可被達ゆ。身分之儀は、藥草植場に差置ゆとも一同、何れもにも差置可被致ゆ。

寛政六甲寅年六月十一日類聚

通航一覽

昌平學規

職制事蹟

是日〇寛政五年(紀元二四〇三年)九月十八日幕府昌平學〇市内本郷區ノ學規及職制ヲ定ム。〇昌平志

昌平學規職制 昌平志ニ據ル。

九月十八日〇寛政五年詳定學政、始置學規職掌二制。

遜、(〇大家)按、學規五則。一曰、入學。僧道商工藥伎優雜、及雜二絶君父、僧道姓。二曰、行儀。學校是育材首善之地、而教化所由附焉、宜篤實退讓、必信必禮、勿驕。三曰、修業。經史作文、各因其材、而造就亦須由四書小學、尤禁四曰、講會。討論義理、講究精微、須必有依據、切禁無稽臆說、作詩若夫字句聲律、須就先哲質問。五曰、放繳。學門啓闢、嚴限晨昏、牌具姓名出入必信。放於卯時、繳於

西時、自非疾病、有故、不許出宿於外、人亦不許留宿於內。職掌八條。一曰、職員長。二員、掌教育生徒。每二曰、司監。察勸怠、每日二次巡視學舍。三曰、司籍。一員、掌簿。一員、掌簿。一員、掌簿。一員、掌簿。

四曰、司漏。一員、掌簿。一員、掌簿。一員、掌簿。一員、掌簿。五曰、司實。二員、掌簿。一員、掌簿。一員、掌簿。一員、掌簿。六曰、司記。一員、掌簿。一員、掌簿。一員、掌簿。一員、掌簿。七曰、司簿。一員、掌簿。一員、掌簿。一員、掌簿。一員、掌簿。八曰、司簿。一員、掌簿。一員、掌簿。一員、掌簿。一員、掌簿。

學規、立職員、貯學本、防於此。

因ニ、童科ヲ試ムル是年〇寛政五年十一月ニ始マリ、六年〇寛政六年二月ニハ試格ヲ改定ス。

是月〇寛政五年十一月始試童科。

按、考官預更稟議、詳定程格。〇十五歲下十一歲、上試四書五經。十歲下八歲、上四大學頭林衡・柴野邦彦・岡田恕・尾藤孝肇、並典考。中川忠英・森山孝盛、並監試。預設書案一、張於正堂、監試坐、右西向、童子進、坐案前、員長由(在方)榜、執書兵(各)部、與讀、數行、

考試已訖、從其熟否、準比賞格。越十二月四日〇寛政五年賜合格者大、匹段、以勸獎之。明年甲寅(〇寛政六年)添定、習熟者、亦是童科每歲一試。著爲定格。經童之科助於此。

六年甲寅〇寛政六年二月、改定試格、開闢廳堂、應試者二百三十七人。

般 昌 期



按、癸丑○寛政五年試法、有故不行。令改試格。考官更加審議、立之程式。前年○寛政五年十二月會試入於廳堂。蓋試人預以所通、達於監試、監試乃達於典考。於是典考監其人與所、通之書示、以定立格、而問就否、且席間揭示試格、使之先知定嚮。皆遵體格。是年○寛政六年二月三日以論語小學、同試焉。此爲初場。應者爲合格、以就本試。其不能應者、雖科兼數目、業精一經而中格、黜爲附試。其本試科目凡三。曰、經義。學庸孟爲一、通易書詩春秋三。禮各爲一通、每通各試三道。即演譯也。試卷格式、曰原意、曰字訓。又別出題目一通、每通各試二道。曰、歷史。左傳史記爲一、通兩漢書爲一通。曰、作文。紀事題二。對譯史論一通。復文。二試凡試五道。而經史皆用墨義。日餘義、日餘論、首署姓名尾題年月。又預更建白、有異學唱新奇說者、輒痛排抑之。四書義主集註、漢句易主本義、書主蔡傳、詩主集傳、春秋主胡傳、禮主陳註、儀禮周禮並主古註疏。此爲準格。越二十日試本科。皆初場合格者也。林衡柴野邦彦岡田恕尾藤孝肇並典考、中川忠英石川忠房並監試。試人既就闈、監試奉命賜試目、前一日典考封試目、各二道以上、於貼之廳壁。後改三。通。席上給紙筆、令各自寫。切禁挾懷及口相受授者。辰時就試及暮納卷。受卷二貼之廳壁。每科六通。後改三。通。席上給紙筆、令各自寫。切禁挾懷及口相受授者。辰時就試及暮納卷。及受試卷。手分局給紙筆、及暮未成、凡五場而畢。初日學庸孟、次易書詩。又次歷史。又次作文。此爲本試。及受試卷。不賜秉燭、以防代筆換卷。許納二道。試後一日爲附試、前後凡五場。丁巳特立不換書格、更與秋書。同科異日、典考閱卷累日、準比程式朱書通否。批評始定、乃擬考校。兼科合格者、爲上等、優說經義不與現短者爲中等、一否者爲下等。如說失經意、言無根據、即爲蕪衍、背馳忘返者、即其文辭難可觀、皆不在收采、唯示取放許其後試。具試卷及其姓名、封上官、依賞格、隨其甲乙、褒賜衣物銀錠各有差凡十人。是年○寛政六年改定試法、三歲一次。著爲定格。

昌平志

寛政五丑年十一月

大目付に。

聖堂におゐて學問御吟味有之儀ハ、惣て學問之儀專御引立之御趣意之由間、右御吟味之節、望いて罷出の之不限、學術よろしき聞へ有之者ハ勿論之支、相應之解了いふしゆ迄も、無遺漏取調書出し可被申ゆ。學問厚く心掛けゆもの、右書出し洩ゆては、頭支配不行届筋之も可相成ゆ間、悴共并厄介之至まては、無殘念を入ゆ様之可被致ゆ。尤御吟味之上ハ、若年寄對面之儀も可有之由條、可被得其意ゆ。右之趣組支配有之向に、可被相觸ゆ。

御觸書

十一月。

十一月廿一日○寛政五年

堀田攝津守殿御渡書付、御目付森川主膳達。

於聖堂學問御吟味有之義ハ、惣て學問之義專御引立之御趣意之由間、右吟味之節、望いて罷出の者之不限、學問専心掛ケ、相應解可致ゆ者ハ、悴共并厄介之至迄も、不洩様可差出ゆ。尤御吟味之上ハ、若年寄對面之義も可有之由條、可被得其意ゆ。右之趣、向々に可被相觸ゆ。

十一月二十三日○寛政五年

於聖堂、組々學問御心見御目付達有之。

十月四日甲子

○寛政五年(紀元二四五三年)○甲子、三正綜覽。

屋鋪預有リ。

外ニ屋鋪若干是月

○寛政五年(紀元二四五三年)十月。

受授

御徒方萬年記

股 昌 期

六二三

屋鋪受授



屋鋪受授事

セラル。○屋鋪渡預繪圖證文。屋敷書

屋鋪受授 寛政五年十月屋鋪受授左ノ如ク行ハル。

圖略○

牛込北御徒町 成田八右衛門上ケ地 坪數百九拾壹坪餘。

東北 倉地政之助。 西南 加々爪芳太郎。  
東南 道。 西北 成田八右衛門永御預上ケ地。

東北 十八間。 西南 十八間。  
東南 十壹間壹尺。 西北 十間壹尺。

成田八右衛門永御預上ケ地 坪數三拾貳坪餘。

東北 倉地政之助。 西南 加々爪芳太郎。  
東南 成田八右衛門上ケ地。 西北 南藏院。

東北 三間半。 西南 貳間半。  
東南 十間壹尺。 西北 十間餘。

牛込北御徒町甲府小普請成田八右衛門殿上ケ地、加々爪芳太郎保被遊御預中奉預り保。爲後日仍如件。

寛政五年十月四日

御普請方奉行

村山榮藏殿

御普請方改役

鈴木喜太郎殿

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通り相違無御座保。爲後日仍如件。

小普請組南部主税支配加々爪芳太郎内

八木市右衛門印

瀨名傳右衛門組御徒

高月左一郎印

山里御庭之者支配倉地政之助内

多田藤右衛門印

小普請組南部主税支配加々爪芳太郎内

八木市右衛門印

京智積院末南藏院役僧

善龍印

圖略○

小石川 新見勝左衛門上ケ地 貳百五坪。

東北 伊熊貞三郎。 西北 波多野忠藏。  
東南 岡田和平、東條吉十郎。 西南 道。

東北 西南 二十間三尺。  
東南 西南 十間。

小石川新鷹匠町甲府小普請新見勝左衛門殿上ケ地、東條吉十郎保被遊御預、四方間數坪數、右御繪圖之通、相違無御座保。爲後日仍如件。

寛政五年十月五日

御普請方改役

林部善太左衛門殿

御普請方

野中新三郎殿

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通り相違無御座保。爲後日仍如件。

殷昌期

東條吉十郎

小普請組青山美濃守支配東條吉十郎内

高瀬半右衛門印



立花種郷

圖略○

湯島天神下 立花大吉種郷屋鋪 坪數三百八十坪。

東 黑田鶴松。 西 青山大膳亮。  
南 青山大膳亮。 北 道。

東 西 三十三間餘。  
南 北 十六間三尺。

深川六萬坪立花大吉唯今迄之屋鋪差上、今度湯島天神下立花出雲守殿上ケ屋鋪三千五百貳十八坪餘之内東北之方隅、當時大吉罷在ハ場所之ヲ、屋鋪拜領仕、被遊御渡、四方間數坪數、略中奉請取<sub>ハ</sub>。爲後日仍如件。

寛政五丑年十月六日

御普請方下奉行 明樂八五郎殿  
同改役 鈴木喜太郎殿

御小性組淺野隼人組立花大吉内 瀬戸小右衛門印

御鳥見 波多野忠藏印

御臺所頭支配無役 岡田和平印

御鷹匠伊熊貞三郎内 梅谷勇次郎印

小普請組青山美濃守支配東條吉十郎内 高瀬半右衛門印

御普請奉行長田阿波守渡レ之。外御用ニ付出席無レ之。

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通り相違無御座<sub>ハ</sub>。爲後日仍如件。

黒田鶴松内 宇佐美順藏印

圖略○

本所北割下水 安藤金次郎上ケ地 坪數六百八拾六坪餘。

東 境堀。 西 花房清左衛門。  
南 内藤右近將監下屋敷。 北 道。

東 三十五間。 西 三十六間。  
南 貳十間。 北 十八間四尺。

本所北割下水甲府小普請安藤金次郎殿上ケ地、花房清左衛門幸被遊御預ケ、四方間數坪數略中奉預<sub>リ</sub>。爲後日仍如件。

寛政五丑年十月十日

御普請方下奉行 明樂八五郎殿  
御普請方改役 林部善太左衛門殿

寄合花房清左衛門内 松井新次郎印

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通り相違無御座<sub>ハ</sub>。爲後日仍如件。

内藤右近將監内 津村左治助印  
寄合花房清左衛門内 松井新次郎印

花房幸佐



圖略。文化九申年八月十四日支配勘定杉浦市郎兵衛屋鋪ニ引渡ス。

本所北割下水 服部角左衛門上ケ地 坪數九拾三坪餘。

東 水田松五郎。  
南 川村佐源太預り地。 西 武藤音次郎、三好丈助。

東北 十六間。  
南 五間五尺。

本所北割下水甲府小普請服部角左衛門上ケ地、拙者に被成御預、略中預り申。爲後日仍如件。

寬政五丑年十月十日

御普請方下奉行

明樂 八五郎殿

御普請方改役

林部善太左衛門殿

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通り相違無御座ハ。爲後日仍如件。

小普請方伊賀者

三好 丈助 印

御代官勤向菅野谷嘉平次・山口鐵五郎手附武藤音次郎在勤ニ付

幸村 太郎左衛門 印

西丸切手御門番之頭渥美平之丞組同心

川村 左源 太 印

表陸尺水田松五郎病氣ニ付名代

中村 勝之丞 印

圖略。

麻布長坂下 小野藤右衛門上ケ地 七拾七坪餘。

東 松平萬之助。 町屋。  
南 道。

東 十四間餘。 西 十間、三間。  
南 六間五尺。 北 三間三尺、三間。

松平萬之助

麻布長坂下甲府小普請小野藤右衛門殿上ケ地、松平萬之助に被遊御預、四方間數坪數、略中奉預。爲後日仍如件。

小普請組近藤左京支配松平萬之助内  
小嶋 嘉右衛門 印

寬政五丑年十月十五日

御普請方下奉行

村山 榮藏 殿

同改役

清水三郎右衛門殿

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通り相違無御座ハ。爲後日仍如件。

小普請組近藤左京支配松平萬之助内  
小嶋 嘉右衛門 印

麻布永坂下甲府小普請小野藤右衛門殿上ケ地、今日被遊御請取ハ之付、町屋境目通り立合ハ處、御改之通相違無御座ハ。爲後日仍如件。

寬政五丑年十月十五日

御普請方下奉行

村山 榮藏 殿

同改役

清水三郎右衛門殿

殷 昌 期

麻布永坂町月行事 七 印



圖略○

深川六萬坪 立花大吉引替上ヶ地 坪數四百四拾八坪餘。

東 道。 南 建部六右衛門下屋鋪。北 西 道。

東 十七間。 南 二十六間。 西 十七間三尺。 北 十六間餘。

深川六萬坪立花大吉引替上ヶ地、建部六右衛門<sup>○廣</sup>に被遊御預、<sup>○中</sup>奉預<sup>○</sup>。爲後日仍如件。

寬政五丑年十月廿七日

御普請方下奉行

村山 榮藏殿

同改役 鈴木喜太郎殿

御徒頭建部六右衛門内 尾崎 榮藏<sup>清印</sup>

前書御繪圖之通境目立合<sup>○</sup>處、御改之通り相違無<sup>○</sup>御座<sup>○</sup>。爲後日仍如件。

御徒頭建部六右衛門内 尾崎 榮藏<sup>清印</sup>

圖略○

根津元御屋鋪之内 吉村善次郎上ヶ地 坪數五拾坪餘。

東 青山長次郎御預り地。 南 伊能久四郎。 西 道。 北 青山長次郎。 東 北 西 五間餘。

根津元御屋鋪之内甲府小普請吉村善次郎上ヶ地、拙者の被<sup>○</sup>成<sup>○</sup>御預、<sup>○</sup>申<sup>○</sup>。爲後日仍如件。

寬政五丑年十月廿八日

前書御繪圖之通境目立合<sup>○</sup>處、御改之通相違無<sup>○</sup>御座<sup>○</sup>。爲後日仍如件。

小普請組菅沼大膳組 伊能久次郎<sup>清印</sup>

小普請組南部主稅組 青山長次郎

同菅沼大膳組 伊能久次郎<sup>印</sup>

屋鋪渡預繪圖證文

御小性組淺野隼人組 立花 大吉

小普請方伊賀者 三好 丈<sup>預地</sup>

寄合 花房清左衛門<sup>預地</sup>

屋敷書拔

十月十日<sup>○寬政五年</sup>

殷昌期

伊能久次郎

寬政五癸丑年

十月六日渡。立花出雲守上ヶ地之内

一、湯島天神下三百八拾坪

但、深川六萬坪屋敷差上<sup>○</sup>爲<sup>○</sup>代地<sup>○</sup>渡。

十月十日預。服部角左衛門上ヶ地

一、本所北割下水六百八十六坪餘

(朱) 文化九申年八月十四日杉浦市郎兵衛渡。

十月十日<sup>○寬政五年</sup>

殷昌期



安藤信成

松平乘寬

東京市史稿

吳服橋内屋敷御用ニ付差上、大名小路松平和泉守屋敷家作共被下之。

右於奥相濟。

大名小路屋敷御用ニ付差上、吳服橋内安藤對馬守屋敷家作共被下之。

右於御白書院縁類、老中列座、采女正○戸田氏教申渡之。

乘寬源次郎。左衛門佐。和泉守。○大給松平。

同年○寛政五年 同月○十月十日吳服橋内安藤對馬守殿屋敷家作共被下之。大名小路只今迄之屋敷、家作共可差上旨被仰付い。

〔附記〕

船藏修理

十月十一日○寛政五年

銀七枚。

右之深川御船藏十四棟御修復御用相勤い之付被下旨、御右筆部屋縁類、伊豆守○松平信明申渡之。若年寄中侍座。

銀三枚。

右同斷之付被下旨、於躑躅之間、若年寄中出座、攝津守○堀田正敦申渡之。

銀三枚。

同五枚。

御作事下奉行格御船上乗役  
松井吉之助

小普請方吟味役  
川島仁右衛門

御徒假役小普請方改役勤方  
桑山甚右衛門

同三枚。

同貳枚。

右同斷之付被下旨、於燒火之間、備前守○京極高久申渡之。

廿一日辛巳○寛政五年(紀元二四五三年)十月辛巳、三正綜覽。堺町○市内日本橋區。狂言座勘三郎芝居退轉シ、都傳内代リテ假芝居ヲ興行ス。○寛政享和撰要集。

堺町狂言座轉替 相傳フ。

寛政五丑年十月

堺町狂言座勘三郎地立并都傳内外一人芝居興行願一件。

(朱) 丑○寛政五年十月五日采女正殿(○戸田氏教)に御直上ル。同(○寛政五年十月)七日鍋三郎ヲ以承付ニ御下ケ、翌八日(○寛政五年十月)承付、致返上。

堺町 狂言座勘三郎地立之儀ニ付奉伺書付

書面伺之通可申付旨被仰渡奉承知い。

第十月七日(○寛政五年)

池田筑後守(○長惠)

訴訟人 堺町家主 佐兵衛

南塗師町吉右衛門店七右衛門妹去後見 相地主 吉五郎

新乗物町佐兵衛店 相手 勘三郎

一、地立出入

六三三

堺町狂言座轉替

堺町狂言座轉替事蹟

六三二

安藤對馬守○信成

松平和泉守○乘寬

寛政錄



同 新和泉町忠次郎店 七

右訴訟人外壹人相願ひ、家守并後見仕の地面、相手傳七地受人より取、勘三郎の狂言場之貸置の處、追て地代金相滞、當時佐兵衛方三千百六拾兩餘、吉五郎方六百四十六兩餘相滞の得共、此節濟方相願ひ存寄無之、勘三郎狂言座之儀、大借にて、迎も是迄之姿にて致興行の儀、難相成、年々休日多、地代金も右躰相滞、地主之儀、町役出銀等甚難義仕の付、無是非訴訟申出の由。尤當時地代金の拘り申さば、間、地主之儀相願ひ旨申之。

一、相手勘三郎相答ひ、家主佐兵衛外一人申立の通、地代金相滞の段と相違無之、追々困窮の付、處々借金多迎も此上興行可仕手段無之、年來相續仕の芝居、只今之至退轉仕の儀、歎鋪の得共、地主共地代金の不拘、一同地立相願ひ上之、外之可申立品を無御座の間、如何様裁許申付の共、申分無之旨申上。

地受人傳七義も、勘三郎相答ひ通相違無御座の旨申上。右之通双方申立の間、遂吟味の處、訴訟方申立の通、地代金滞の段と無相違、殊に勘三郎儀、此外處々借入金多、取續兼、興行も難相成、依之地代滞之儀と、此度不相願、地面明渡の様致し度旨相願、相手方勘三郎儀も、如何様裁許有之の共、申分無之段申上。其上町内家主并芝居近來休日多、家業取續も難相成、困窮仕の間、勘三郎身分の歎鋪の共、迎も興行相成間、若地立を申付の、芝居地の得て、何之を跡芝居之儀相糺、願出度旨申之。

右吟味仕の趣、書面之通御座。堺町芝居之義、寛永年中凡百七十年來相續仕の狂言座より御座の共、地主共地立之義相願ひ上、定例之通、右地面十五日限明渡の様可申付の哉。前々芝居興廢之度毎

相伺の間、此段奉伺。以上。

(朱) 但、前々狂言座名題代り伺濟之例を以、去ル酉年木挽町三丁目伊兵衛店勘彌義、地代金相滞、其上打續狂言相休の付、右町内芝居掛りの共、渡世無之、芝居休之儀申定、地代店賃相滞、難儀之旨申立家主清兵衛外八人一同、勘彌地立之義相願ひ付、伺之上地立申付、跡芝居取立之義、河原崎權之助相願、町内も願出の付、是又伺之上、權之助名題申付の間、此度も伺之上、勘三郎地立被仰渡の、跡芝居取立之義申出次第取調、猶又相伺の様可仕。

丑〇寛政五年十月

池田 筑後 守〇長

(朱) 丑〇寛政五年十月十五日采女正殿(〇戸田氏教)に御直上、同(〇寛政五年十月)廿一日鍋三郎を以承付に御下

堺町狂言座勘三郎立跡之芝居興行仕度旨相願之付伺書付

書面伺之通可申付旨被仰渡、奉承知。

池田 筑後 守

小田 切土 佐 守〇直

堺町居付地主

外地主家持共

同町家主惣代

文 右

藏

六 人。

衛門

外壹人。



右相願ひ、此をの共之内、堺町居付地主か後見新兵衛、同町地主南塗師町吉右衛門店七右衛門妹は後見吉五郎所持地面之内、古來狂言座勘三郎芝居地之貸置い處、同人大借りて打續興行不相成、地代金夥鋪相滯、地主共致難儀之付、當八月○寛政五年中地立之儀願出、吟味之上、當月○寛政五年十月九日、地面十五日限り明渡い様、裁許有之い。然處町内數年來相續仕い歌舞伎狂言無之い多て、料理茶屋并芝居掛り之をの共之不及申、隣町諸商人等迄一統難溢仕い間、南本所番場町助右衛門店都傳内儀、先祖之芝居名題株所持罷在い付、勘三郎狂言場立跡之て、傳内名題を以、假芝居興行爲致、大勢之をの共家業に相成い様仕度、尤勘三郎狂言座之義、寛永元子年之百七十年來致相續い義之有之、休座仕い多て取續を相成間鋪い間、傳内方興行之日毎、金二分宛町内之取立、勘三郎之相送、暮方合力致し遣、追て同人芝居取建い、傳内假芝居之儀、早速爲相止可申い間、前書之通、勘三郎立跡之て傳内名題を以、假芝居興行之儀相願い旨、一同申立之い。

南本所番場町助右衛門店  
傳内  
同人悻  
龜  
松

右相願い、此をの共先祖都傳内儀、往古大坂表之御當地に罷下、芝居興行仕、明曆三酉年類焼後、葺屋町之て興行仕い節、京都之都傳内と申をもの罷下、放下師之て、芝居興行致しい付、出入之相成い處、内濟致、夫之先祖傳内義、いよしへ都傳馬と唱、京都之罷越い傳内、都右近と相改い由承傳、父傳内芝居興行之義、兼て相願い處、享保十九年寅年大岡越前守町奉行中、木挽町狂言座勘彌休座仕い節、前々

之狂言座相願い父傳内并桐大藏河原崎權之助、右三人越前守番所之て圖取仕、權之助當り圖之て、同人之興行申付い義等有之、名題株之義之付、諸書物之先年類焼之節焼失致しいへ共、權名題持傳い之相違無御座、舊來休座仕罷在い處、此度堺町狂言座勘三郎義、地主之地立相願、當月○寛政五年十月九日裁許有之之付、右立跡之て此者名題を以、芝居興行仕度、願之通申付い、勘三郎休座申、興行之日毎金二分つ、此者方之相送、追て勘三郎芝居取建い、此者芝居を早速相止可申い間、前書之通勘三郎立跡之て、此者名題を以芝居興行之義相願い旨、申立之い。

右之通筑後守○池田長惠方之願出い付、相糺い處、堺町狂言座之義、寛永年中之相續興行仕い處、勘三郎儀地代金相滯、難儀之旨、地主共訴訟申出、取調、伺之上、此度地立申付い付、芝居掛り之をの共之勿論其外商人共迄、家業無之、難儀仕い間、勘三郎立跡之て、傳内名題を以假芝居興行仕度旨相願、傳内義權名題株持傳い處、先年類焼之節諸書物致焼失いへ共、享保十九年寅年大岡越前守町奉行中、木挽町勘彌休座之節、權名題所持之をの糺之上、都傳内桐大藏河原崎權之助圖取申付い儀等申立、芝居興行之儀一同相願之い。

(朱)  
本文圖取之義、享保十九寅年木挽町勘彌芝居致い間、狂言座へ新興行之義右町内之をの共相願、大岡越前守稻生下野守町方勤役中、伺之上芝居一軒申付、權名題所持仕い都傳内桐大藏河原崎權之助右三人、越前守番所之て圖取爲仕、權之助圖之當りい付、同人名題之て芝居申付い段、御役所書留有之い間、傳内義、權名題所持仕い儀、無相違相聞申い。

右吟味仕い趣、書面之通御座い。堺町狂言座之義古來有之處、當時歌舞妓座無御座いて、同所町人



大勢之きの渡世無之、難儀之段之相違無御座の間、都傳内名題にて歌舞妓狂言仕の様申付、追て勘三郎芝居再興行仕ゆ、傳内芝居相休可申旨、可申渡ゆ哉、此段奉伺ゆ。以上。

丑〇寛政五年十月

池田 筑後守  
小田切土佐守

南本所番場町右衛門店  
傳内  
同人悴 松

此もの共儀、先祖の櫓名題持傳ゆ處、此度堺町勘三郎芝居地立申付ゆ之付、右立跡まで傳内名題を以芝居取建興行致度、願之通申付ゆ、興行之日毎、勘三郎の金貳分宛差遣可申、追て同人芝居取立ゆ、此者芝居の相休可申旨、申立ゆ付、願之通、於右場所芝居興行可致。右之通被仰渡、難有奉畏ゆ。爲後日仍如件。

丑〇寛政五年十月二十一日

南本所番場町  
傳内  
同人悴 松印  
家主 右衛門印  
五人組 右衛門印

堺町居付地主

外十八人藏

此もの共儀相願ゆ、町内居付地主かね後見新兵衛、同斷南塗師町吉右衛門店七右衛門の妹ま後見吉五郎所持地面之内、古來の狂言座勘三郎芝居地之貸置ゆ處、同人大借にて打續興行不相成、代金滞、此度勘三郎芝居地々立申付ゆ處、數年來相續之歌舞妓狂言無之ゆ、町内芝居掛之ものを勿論、隣町諸商人等迄難澁致ゆ間、南本所番場町助右衛門店都傳内義と、先祖の櫓名題持ゆ間、勘三郎立跡まで、右傳内名題を以假芝居興行爲致、大勢家業相成ゆ様致度、願之通申付ゆ、芝居興行之日毎、傳内方金貳分つゝ町内取立、勘三郎に相送り、追て同人芝居取立ゆ、傳内芝居を爲相止可申旨、相願之付、願之通申付之。

右之通被仰渡、難有奉畏ゆ。爲後日仍如件。

丑〇寛政五年十月二十一日

堺町家持庄

藏印

同年〇寛政五年十一月朔日中村勘三郎座都傳内云々成。市村座ふゝひ桐長桐座之なり、木挽町森田勘彌と去々亥年〇寛政三年河原崎權之助座之成。此處よて三座とも替る。

〔附記、一〕 河原崎權之助芝居棧鋪増設

寛政享和撰要集ヲ左ニ抄録ス。

河原崎權之助棧鋪新規出張補理度願一件

殷昌期

六三九

附記、一  
河原崎權之助芝居棧鋪増設



木挽町五丁目清兵衛店狂言座權之助芝居棧鋪新規之儀之付相調申上之書付

|    |   |   |   |   |
|----|---|---|---|---|
| 樽  | 與 | 左 | 衛 | 門 |
| 願  | 人 | 權 | 之 | 助 |
| 煩  | 二 | 付 | 代 | 悖 |
| 長  |   |   |   | 十 |
| 家  | 主 | 清 | 兵 | 衛 |
| 五人 | 組 | 傳 | 兵 | 衛 |
| 名  | 主 | 七 | 左 | 衛 |
|    |   |   |   | 門 |

右狂言座權之助願ひ、芝居南側上棧鋪拾八軒、同所下棧鋪十八軒、北側上棧鋪十七軒、同下棧敷十五軒、向棧敷九軒、同前より九軒折廻し、舞臺上棧鋪三軒、都合八拾九軒有之の處、此度北側上棧鋪前之張出し、棧鋪三軒補理申度旨、願訴狀御渡被成ひ。

右訴狀御渡被成ひ間、猶又相糺ひ處、右棧鋪三軒新規相願ひ儀、古借金濟方仕度御座の間、増棧敷相願ひ旨申之。尤棧鋪隨分入念丈夫之仕の間、願之通被仰付被下ひ様、相願之申。依之先例相調ひ處、左之通之御座。

一、場所狂言座中村勘三郎芝居、東側二階棧鋪、未之方前通り長七間幅五尺張出、棧鋪補理申度旨、天明八年十一月十二日山村信濃守殿御勤役之節、右御番所の相願ひ所、同日一月十八日、願之通被仰付。尤見分り不被遣。

一、葺屋町狂言座市村羽左衛門芝居東側上棧鋪前通り未之方長五間幅四尺中段致し、込合ひ節、見物人差置申度段、天明八年十月二十八日は又山村信濃守殿御勤役之節、右御番所の相願ひ處、同日十月廿八日、願之通被仰付。尤見分り不被遣。

一、木挽町五丁目元狂言座森田勘彌芝居棧敷上下増棧鋪補理申度段、安永三年二月廿八日牧野大隅守殿御勤役之節、右御番所の相願ひ處、同日十月廿八日、願之通被仰付。尤見分り不被遣。右相調ひ處、前書之通、先例御座の間、權之助願之通増棧鋪可被仰付哉之奉存。則書付二通返上仕、依之此段申上。以上。

樽 與 左 衛 門

酉十月

棧鋪敷書上

- 一、南側上棧鋪有來
- 一、同側下棧鋪有來
- 一、北側上棧鋪有來
- 但、前方之出張棧鋪新規三間、都合貳拾間、
- 一、同側下棧鋪有來
- 一、舞臺上棧鋪有來

札ケ下

|             |
|-------------|
| 十八間。        |
| 同。          |
| 十七間。        |
| 此三間、新規御願申上。 |
| 十五間。        |
| 三間。         |

般 昌 期



一、向棧鋪有來  
一、同前方棧鋪有來

同。九間。

有來棧鋪九間。

新規棧鋪三間。

都合九拾貳間。

右之通御座也。以上。

寛政五丑年十一月十六日

願人 木挽町五丁目狂言座 助印

煩二付俸 長 十 郎印

家主 清兵衛 印

五人組 傳兵衛 印

名主 七右衛門 印

御番所様

乍恐以書付奉願上

一、木挽町五丁目清兵衛店狂言座權之助申上。私芝居南側上棧鋪十八間、同側下棧鋪十八間、北側上棧鋪十七間、同側下棧鋪十五間、向棧鋪九間、同前之九間折廻し、舞臺上棧鋪三間、都合八十九間、衣裳御見分之節、右書上仕仕處、此段北側上棧鋪前之出張棧鋪三間、惣八十九間、永々仕置申度、奉願

上。尤隨分入念丈夫之仕仕間、何卒右棧鋪數、御願申上申通、被爲仰付被下置仕様、偏御慈悲奉願上。以上。

寛政五丑年十一月十六日

願人 木挽町五丁目狂言座 助印

煩二付俸 長 十 郎印

御番所様

一、私御願申上仕、芝居南側上棧鋪十八間、同所下棧鋪十八間、北側上棧鋪十七間、同下棧鋪十五間、向棧鋪九間、折廻し舞臺上棧鋪三間、都合八十九軒有之仕處、此度北側上棧鋪前出張出、棧鋪三軒、補理、都合九十二軒、永々仕置申度段、當月○寛政五年十一月十六日當御番所奉願上仕處、樽與右衛門方之て糺有之仕上、今日私共一同被召出、願之通被仰付、隨分丈夫補理増柱仕、怪我無之様可致旨被仰付、難有奉畏也。

木挽町五丁目狂言座權之助煩二付代 十 郎印

〔附記、二〕 建具職組合

建具職組合定

願人 白魚屋鋪忠七店建具屋 兵衛

同 小傳馬町 定 右 衛門

外拾八人。

附記 一  
建具職組合



同 鈴木町茂右衛門店外建具屋惣代  
 同 南鍋町壹丁目平右衛門店 吉  
 同 太郎右衛門  
 外十八人

此者共之内、久兵衛外貳人、定右衛門外拾八人之者共願出ひて、建具屋渡世之者、仲ヶ間取極無之故、大御用又て火災等之節、建具直段手間賃、猥に引上ケ、申合難行届、并弟子共細工習得ひ得て、年季之内暇取或て欠落致、同職其外に罷越、心儘職分相稼ひ故、自然と身持放埒之相成、難義致ひ間、此度仲間取極メ、御作事方定小屋に無代之職人差出、御用等相勤度旨、願出ひ得共、右定小屋御用相勤ひ多之難義及ひ旨、多分申立、右御用不相勤、仲ヶ間取極、弟子共メリ仕法之通致度、一同得心印形差出、外之相障ひ義も不相聞ひ間、以來見世持建具職三百拾人を惣仲間之申付ひ間、寂寄々之組合十組之相定仲ヶ間并弟子共取メリ等、仕法書之通取極メ、一同町年寄方之帳面に名前相記置、向後加入望之者共ひ、仲ヶ間金納入不相應様、早速寂寄之組合加入爲致、弟子共之義之、取入之爲之い迎、爲差事も無之聊之義をも非道之取扱不致、職業之勿論、身持等迄能々おしへ遣し、非常之節迎も、無謂直段手間賃引上ケ不申様、一同精々爲申合置ひ様可致ひ。

但、惣仲間之者共右之趣銘々之可申通ひ。

右之趣被仰渡、奉畏ひ。爲後日仍如件。

寛政五年十月廿一日

右之池田筑後守様御之御被仰渡ひ旨達有之。町年寄調奈良屋。

家當人 連 印  
 撰要永久録

附記、三  
 金銀分銅  
 鑄造

〔附記、三〕 金銀分銅鑄造

十月廿五日 〇寛政五年

銀五枚。

御勘定 廣瀬吉之丞

同。

同 中川久三郎

右之金銀分銅吹方立合御用骨折相勤ひ之付被下旨、於御右筆部屋縁類、伊豆守〇松平信明申渡之。備前守〇京極高久侍座。

御徒目付 坂尾源左衛門

銀貳枚。

右同斷之付被下旨、於燒火之間、備前守申渡之。

金三枚。

後藤四郎兵衛

時服貳。

右同斷之吹方御用骨折相勤ひ之付被下旨、於同席、若年寄中出座、攝津守〇堀田正敏申渡之。

寛政録

附記、四  
 江戸大火

〔附記、四〕 江戸大火

變災篇ニ詳録ス。

廿五日 〇寛政五年十月中略 此日申の中牌、湯島松平出雲守利謙別墅より出火、北の風烈しくして、神田の邊より

本町通石町、堺葺屋兩芝居まで、ことごとく焼失、日本橋を落し、翌辰牌頃やうくにして火鎮りぬ。

文恭院殿御實紀

般昌期

六四五



屋鋪受授

十一月二日辛卯

○寛政五年(紀元二四五三年)○辛卯、三正綜覽。

上收屋鋪ヲ還附シタル者有リ。外ニ若干屋鋪是

月

○寛政五年(紀元二四五三年)十一月。

受授セラル。

○屋鋪渡預繪圖證文。屋敷書拔。寛政錄。相對替御書附書拔。

屋鋪受授事蹟

屋鋪受授ノ寛政五年十一月ニ於テシタル者ハ、

圖略○

淺草新堀 黒澤佐吉上ケ地 坪數百貳十九坪餘。

東 安井藤右衛門。 中村傳右衛門。  
南 長谷川藤三郎。 北 道。

東 十九間。 北 十八間三尺。  
南 六間三尺。 西 七間二尺。

淺草新堀端黒澤佐吉上ケ地、御書院與力同心組屋鋪大繩之内ニ御座ハ之付、御請取、直ニ右組ニ被成差戻、御請取申。爲後日仍如件。

寛政五丑年十一月二日

御書院番頭中坊近江守與力 西尾彦左衛門印

御普請方 野中新一郎殿  
御普請方改役假役 角田武右衛門殿

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通り相違無御座ハ。爲後日仍如件。

御徒頭丸毛勘左衛門組 長谷川藤三郎印  
御書院番頭中坊近江守組同心 安井藤右衛門印

書院與力組屋鋪

同人組 中村傳右衛門印

圖略○ 寛政十二年七月相渡ル。

小石川 松下十左衛門上ケ地 坪數貳百五坪餘。

東南 西村平吉。 西北 多田彌左衛門、小幡小十郎。  
東北 道。 西南 鈴木傳十郎。

東南 西南 二十二間五尺。  
東北 西南 九間。

小石川七軒町甲府小普請松下十左衛門殿上ケ地、小幡小十郎ニ被遊御預、奉預ハ。爲後日仍如件。

小普請組阿部大學支配小幡小十郎内 林 丈 助 清印

寛政五丑年十一月四日

御普請方改役 清水三郎右衛門殿  
御普請方 佐藤源七殿

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通り相違無御座ハ。爲後日仍如件。

西丸火之番 西村平 吉印

新御番松平小十郎組與頭多田彌左衛門内 菊池惣兵衛 衛印

小普請組阿部大學支配小幡小十郎内 林 丈 助 印

小普請組近藤左京支配鈴木傳十郎内 天野源 藏印

小幡小十郎



圖略○

小石川上富坂町 眞方五平治上ケ地 坪數百五拾四坪餘

東 道。石川兵十郎。北 西 内藤織部。町並屋鋪、内田權右衛門、町屋。

南 九間。三。北 西 七間五尺。十八間一尺。

小石川上富坂町甲府小普請眞方五平次殿上ケ地、内藤織部に被遊御預、○中奉預り。爲後日仍如件。

寛政五丑年十一月五日

御普請方下奉行

村山榮藏殿

同改役假役

角田武右衛門殿

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通相違無御座ハ。爲後日仍如件。

御臺様御膳所御臺所人

石川兵十郎印

御鷹匠頭内山七兵衛組同心

内田權右衛門印

御書院番長谷川丹後守組内藤織部内

青木八右衛門印

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改被遊ハ通相違無御座ハ。爲後日仍如件。

小石川上富坂町家主

權左衛門印

内藤織部

定普請同心組屋鋪

圖略○

下谷廣德寺前 定普請同心大繩組屋鋪

坪數六百坪餘

東 道。北 西 割殘明地。南 道。北 平岡四郎兵衛。

南 東 二十壹間三尺。北 西 十六間三尺。南 二十四間。北 三十四間。

下谷廣德寺前元植木同心組屋鋪上ケ地之内、今度願之通定普請同心大繩組屋鋪拜領仕、被成御渡、四方間數坪數、○中請取申ハ。爲後日仍如件。

寛政五丑年十一月十六日

御作事方定普請同心組頭

赤城新右衛門印

同勘定役

田村重次郎印

御普請方改役

林部善太左衛門殿

御普請方

佐藤源七殿

前書御繪圖之通屋鋪境目立合ハ處、御改之通相違無御座ハ。爲後日仍如件。

小普請組近藤左京支配平岡四郎兵衛内

高井文左衛門印

圖略○

巢鴨火之番町 井戸半十郎預り上リ地 坪數百三坪

東 南 山内直次郎。北 西 百姓龜五郎。西南 岩本内膳正。東北 松平市郎右衛門、向坂久三郎。

殷昌期

六四九



向坂久三郎

巢鴨火之番町井戸半十郎預り上り地、向坂久三郎に被遊御預、四方間數、略中奉預ひ。爲後日仍如件。

小普請組淺野佐渡守支配向坂久三郎内  
岩倉茂八清印

寛政五五年十一月十八日

御普請方下奉行

村山榮藏殿

御普請方改役

清水三郎右衛門殿

前書御繪圖之通銘々境目立合ひ處、御改之通相違無御座ひ。爲後日仍如件。

御書院番戸川山城守組松平市郎右衛門内  
松本定右衛門印

小普請組淺野佐渡守支配向坂久三郎内  
岩倉茂八印

小普請組武田河内守支配山内直次郎内  
後藤武左衛門印

前書御繪圖之通境目立合ひ處、被遊御改ひ通相違無御座ひ。爲後日仍如件。

巢鴨火之番町百姓植木屋龜五郎代  
彌七印

駒込片町名主  
八左衛門印

圖略

巢鴨火之番町 岩本内膳正正添地

坪數貳百七拾坪餘。

東南 山内直次郎。西南 道。

東北 井戸半十郎預り上り地。

東南 十七間二尺。西北 十八間三尺。  
東北 十五間一尺。西南 十五間一尺。

仍如件。

寛政五五年十一月十八日

御普請方下奉行

村山榮藏殿

御普請方改役

清水三郎右衛門殿

御普請奉行三島但馬守渡之。外御用ニ付出席無之。

前書御繪圖之通屋鋪境目立合ひ處、御改之通相違無御座、爲後日仍如件。

小普請組武田河内守支配山内直次郎内  
後藤武左衛門印

圖略

巢鴨 岩本内膳正永御預ヶ地 坪數百三坪。

東南 山内直次郎。西北 百姓龜太郎。  
西南 岩本内膳正添地。東北 松平市郎右衛門、向坂久三郎。

東南 七間壹尺餘。西北 五間三尺。  
西南 十六間壹尺。東南 十六間二尺。

巢鴨火之番町井戸半十郎預り上り地、今度願之通岩本内膳正永御預地被成御渡之、四方間數坪數、略中奉

殷昌期



請取<sub>レ</sub>。爲後日仍如件。

寬政五丑年十一月廿日

御普請方

佐藤源七殿

御普請方改役假役

角田武右衛門殿

圖略。

小石川白山御殿跡近所 平井七郎兵衛上ヶ地 坪數三百拾六坪餘。

東南 長谷川清太郎、小林惣左衛門。西北 道。

西南 道。 東南 二十間。西北 貳十四間。西南 十四間。東北 十八間一尺。

小石川白山御殿跡近所甲府小普請平井七郎兵衛殿上ヶ地、小宮山吉之助<sub>レ</sub>被遊御預<sub>レ</sub>ヶ、<sub>○中</sub>奉預<sub>レ</sub>。爲後日仍如件。

小普請組青山美濃守支配小宮山吉之助内 介川孫四郎<sub>清印</sub>

寬政五丑年十一月廿一日

御普請方改役

林部善太左衛門殿

御普請方假役

松尾藤兵衛殿

前書御繪圖之通銘々屋鋪境目立合<sub>レ</sub>處、御改之通相違無御座<sub>レ</sub>。爲後日仍如件。

小普請組南部主税組長谷川清太郎病氣ニ付同組世話役名代 加藤助右衛門<sub>印</sub>

佐々木傳次郎支配大筒下役組頭 小林惣左衛門<sub>印</sub>

屋鋪渡預繪圖證文

寬政五癸丑年

十一月十六日渡。元植木同心組屋敷上ヶ地之内

一、下谷廣德寺前六百坪餘

但、定普請同心大繩組屋敷之渡。

十一月十八日渡。井戸伴十郎上リ地

一、巢鴨火之番町貳百七拾坪餘

但、爲添地<sub>二</sub>渡。

同日預。同斷。

右 同 永預地<sub>人</sub>

文化十酉年三月廿日小出宮内預替<sub>レ</sub>。

十一月四日 <sub>○寬政五年</sub> <sub>○中略</sub>

願之通下屋敷被<sub>レ</sub>下旨、

場所見立可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>願旨。

右於芙蓉之間、老中列座、采女正<sub>○戸田</sub>申渡之。

寬政五丑年十一月九日

采女正殿<sub>○戸田</sub>專阿彌を以御下<sub>レ</sub>、但馬守<sub>○三島</sub>請取。

般昌期

御留守居 岩本内膳正

御留守居 岩本内膳正

屋敷書拔

御留守居 岩本内膳正

寬政錄



御普請奉行

杉浦良昭  
山中盛寅  
齋藤喜市郎  
赤井五郎兵  
内藤權太夫  
中島次右  
田村長芳  
阿部正親  
諏訪部定堅  
朝倉權左  
東條道貫  
遠藤政五郎  
諸星藤太郎

山中吉十郎拜領屋敷  
裏六番町五百坪  
杉浦猪兵衛拜領屋敷  
永田町貳百貳拾五坪  
赤井五郎兵衛拜領屋敷  
小石川御門之内八百八拾坪  
内藤權太夫拜領屋敷  
三番町馬場際四百八拾三坪之内貳百五拾坪  
齋藤喜市郎拜領屋敷  
駒込新屋敷貳百五拾坪  
田村兵庫拜領屋敷  
麴町元山王四百坪餘  
中島次右衛門拜領屋敷  
三田元御屋敷之内五百坪  
諏訪部友次郎拜領屋敷  
本所相生町三丁目三百七拾五坪  
阿部右門拜領屋敷  
南本所猿江千八百坪  
東條吉十郎拜領屋敷  
小石川鷹匠町貳百坪餘  
朝倉權左衛門拜領屋敷  
牛込若宮貳百貳拾坪  
諸星藤太郎拜領屋敷  
本郷丸山百拾八坪  
遠藤政五郎拜領屋敷  
小石川白山御殿跡小原町壹百坪餘

右衛門督番頭  
杉浦猪兵衛○良昭  
小普請組阿部大學支配  
山中吉十郎○盛寅  
御裏門番之頭  
齋藤喜市郎  
御小性組安藤伊豫守組  
赤井五郎兵衛  
御書院番駒木根大内記組  
内藤權太夫  
大御番本田肥後守組與頭  
中島次右衛門  
御書院番戸川山城守組  
田村兵庫  
庫○長芳  
御書院番勝田安藝守組  
阿部正親  
小普請組酒井紀伊守支配  
諏訪部友次郎○定堅  
同南部主税支配  
朝倉權左衛門  
同青山美濃守支配  
東條吉十郎○道貫  
西丸表火之番  
遠藤政五郎  
表御臺所頭支配無役  
諸星藤太郎

附記  
災時車ニ  
關スル戒  
諭

右願之通屋敷相對替被仰付之間、得其意、例之通可被致す。  
〔附記〕 災時車ニ關スル戒諭

寛政五丑年十一月廿六日

筑後守様○池田長政 御番所ニ、壹番組貳番組拾壹番組拾貳番組拾三番組肝煎一同、并出火場近邊車持有之町々名主貳拾五人、并月行事持場所貳ヶ所一同被召出、吉田百助殿御掛り之御調有之、御白洲被召出、左之通被仰渡す。

一、先月○寛政五年十月 出火之節、車ニ諸道具積引退け者夥敷有之、兩御奉行様御見請被遊、於場所御召捕、車諸道具とを御取上、御吟味可被遊之所、夥敷儀故、致混雜、消防妨之も可相成之被召御思、其場之御見遁被成置、追々右出火場並近邊車持共御糺被遊い處、心得違仕、車之諸道具引退恐入い段申上り者多有之、又之土藏穴藏等之諸道具仕舞、空車之引退け者有之、或之車之疊持退け者有之、燒失車等も一向引出不申い申立有之得共、右之内之疑敷相聞け者有之、右大火之節車引出申間敷等之儀、度々御觸有之、殊之明和九辰年御觸年久敷義之も無之、忘却可致様無之所、右躰車引出い段之、不埒之付、嚴敷御吟味可被仰處、肝煎名主共並其町々名主共一同、御慈悲相願い之付、先此度之、大火之義之もい得之、格別之御慈悲を以、御吟味御沙汰不被及い間、以來之前々御觸之通、急度相守、出火之節、車之諸道具積出し儀、決之致間敷い。且飛火等防方之儀之付、度々御觸有之い間、此段名主共得之申合、車所持之者并車力渡世之者之不及申、店々之者共いも、不洩様申聞、爲相背申間敷、萬一以來出火場へ車引出い者有之い間、御見請被遊次第御召捕、諸道具御取上、嚴敷御吟味可被仰付間、此

相對替御書附書拔



上無忘却、御觸之趣急度相守の様、惣名主共にも申通、一同行届の様、可取計旨、被仰渡い。尤此度之御吟味御沙汰之不被及び得共、爲以來之、今日召出い名主并肝煎共、書付差上置い様、被仰渡い。

撰要永久録

筋違橋外等  
火除地

是月○寛政五年(紀元二四五三年)十一月及十二月○寛政五年(紀元二四五三年)命ジテ筋違橋外○市内神田區等ニ火除地ヲ設ケ

筋違橋外等  
火除地事蹟

市街ヲ後退又ハ轉移ス。新地ノ割渡ハ六年甲寅○寛政(紀元二四五四年)ニ在リ。  
筋違橋外等火除地 是年○寛政六年十月廿五日ノ災後、筋違橋外佐久間町一二丁目河岸等ニ、火除地ヲ設ク。下文市街異動ノ條ヲ參看セヨ。

神田之内○中略

寛政五丑年十月此邊燒失跡地之内、南之方神田佐久間町壹丁目、同町拜領町屋、同町上納町屋地續一纏、同壹丁目貳丁目同所上納町屋地續一纏、北道向神田柳屋敷町屋、同山本町拜領町屋地續三纏、神田山本町拜領町屋、同御弓師屋敷町屋、麴町平河町壹丁目地地續一纏、都合六纏之町屋被召上、並北之方神田佐久間町壹丁目、同所拜領町屋、同所東道式を隔同壹丁目貳丁目地先共被召上、同政○寛政六年月不詳四月、右佐久間町壹丁目貳丁目地先切レ地跡ハ東西通路新道式出來、神田柳屋敷二纏、麴町平河町壹丁目地地二纏、右町屋南之方ハ同様新道式出來、神田佐久間町壹丁目同町相生町中程拜領町屋、同上納町屋地續一纏、都合六纏○當時町名共本文之通町屋割替代地被下、南之方ニ火除廣道之成○中略  
寛政五丑年十一月此邊燒失跡地之内、前書神田花房町一纏、同町上納町屋一纏、同町上納町屋神田通船屋敷地續一纏、都合三纏町屋被召上、同政○寛政六年月不詳四月、右上ケ地之内北之方ハ神田花房町一纏、同町上

納町屋神田通船屋敷地續一纏、都合二纏○二纏名當時町屋地、同所ニ割替被下、南之方ニ火除廣道之成

御府内○作選沿革圖書

神田佐久間町壹丁目○中略

一、町内火除地之儀ニ、寛政五丑年十月廿五日湯島無縁坂ノ出火之致類燒、跡退ヘ代地被下置、河岸通火除地之相成、長百三十七間一尺五分、幅東西之ヲ四十三間五尺、中程之ヲ四十四間二尺、此坪六千四百六坪九合六勺有之。右之内河岸拾八間通物置場之相成居、東西之ヲ幅二十五間五尺、中程之ヲ幅貳十六間二尺、往還火除地之相成居申い。

一、町内物揚場、西之方揚場幅貳間、中程物揚場幅四間程御座い。起立御願濟年月等年古キ儀之ヲ相分り不申い。

神田佐久間町貳丁目○中略

一、町内火除地之儀ニ、和泉橋ノ西之方間口八間三尺、河岸迄四十三間五尺、此坪三百八十貳坪五合八勺有之。右之内河岸十八間通物置場之相成居、幅二十五間五尺、往還火除地之相成居申い。

——文政町方書上

十二月二日辛酉○寛政五年(紀元二四五三年)○辛酉、三正綜覽若干屋鋪ノ相對替有リ。是月○寛政五年(紀元二四五三年)十二月外ニ

モ幾多ノ屋鋪受授ヲ見ル。○相對替御書附書拔。寛政呈譜。屋鋪受授屋敷書拔。寛政錄。

屋鋪受授 寛政五年十二月若干屋鋪ノ受授有リ。

寛政五丑年十二月二日

殷 昌 期

屋鋪受授

屋鋪受授事蹟



伊豆守殿○松平 丹阿彌ヲ以御下ケ、阿波守○長田 請取。

御普請奉行信成。

岩本正利

小出主膳拜領屋敷  
虎之御門内千貳百拾八坪之内三百坪

小出輝英

岩本内膳正拜領添屋敷  
巢鴨火之番町貳百七拾坪餘

外永御預り地百三坪。

中川忠英

岡田豐吉拜領屋敷  
北本所番場町四百六拾七坪

大久保忠經

中川勘三郎拜領屋敷  
小川町表猿樂町三百五拾坪

岡田俊亮

大久保九郎兵衛拜領屋敷  
小石川御門之内御臺所町五百四拾八坪之内貳百五拾坪

田澤昆當

東宗庵拜領屋敷  
北本所三ツ目四ツ目之間千五百坪之内三百三拾壹坪

東宗庵

田澤久左衛門拜領屋敷  
裏二番町千三百坪之内三百三拾壹坪

守屋原福

小野条五郎拜領屋敷  
三番町横町三百坪

小野吉壽

長井岩太郎拜領屋敷  
表六番町四百坪

長井實儀

守屋彌惣右衛門拜領屋敷  
市ヶ谷淨瑠璃坂上五百五拾貳坪

井出正福

石原政八郎拜領屋敷  
北本所三ツ目永倉町貳百坪

石原政孝

井出主税拜領屋敷  
淺草新堀端阿部川町四百三拾七坪

諏訪次郎右

青板源左衛門拜領屋敷  
四谷北寺町百四拾坪餘

青板源左

諏訪次郎右衛門拜領屋敷  
麻布筭橋貳百九坪

右願之通屋敷相對替被仰付ひ間、得其意、例之通可被致ひ。

寛政五丑年十二月十七日

對馬守殿○安藤 專阿彌ヲ以御下ケ、阿波守○長田 請取。

御普請奉行信成。

東條季勝

神織部拜領屋敷  
牛込神樂坂上横町四百九拾四坪

神忠榮

東條權太夫拜領屋敷  
南本所六軒堀貳百三拾三坪餘

小野田信利

神谷銀一郎拜領屋敷  
本所横網御竹藏前千拾六坪

神谷教彪

小野田三郎右衛門拜領屋敷  
北本所三丁目横町三百坪

右願之通屋敷相對替被仰付ひ間、得其意、例之通可被致ひ。

寛政五丑年十二月廿八日

殷昌期

御留守居

岩本内膳正利○正

小普請組青山美濃守支配  
小出主膳○輝

御目付  
中川勘三郎○忠

御腰物方  
大久保九郎兵衛○忠

小普請組淺野佐渡守支配  
岡田豐吉○俊

大御番菅沼織部正組與頭  
田澤久左衛門○昆

御番醫師  
東宗庵○庵

西丸切手御門番之頭  
守屋彌惣右衛門○原

小普請組酒井紀伊守支配  
小野吉壽○吉

同山口勘兵衛支配  
長井實儀○實

御小性組前田安房守組  
井出主税○正

大御番松平但馬守組  
石原政八郎○政

御天守番  
諏訪次郎右衛門○次

西丸御裏門番同心  
青板源左衛門○左

右衛門督殿用人  
東條權太夫○季

小普請組青山美濃守  
神織部○忠

御代官  
小野田三郎右衛門○信

小普請組武田阿波守支配  
神谷銀一郎○教



對馬守殿○安藤信成專阿彌ヲ以御下ゲ、但馬守○三島政喜請取。

德川宗睦

河野長之助拜領屋敷  
市ヶ谷木村七百貳拾坪餘

尾張大納言殿○宗睦

船橋宗迪

尾張大納言殿下屋敷  
四谷追分千五百貳拾坪之內七百貳拾坪

御番醫師  
船橋宗迪○宗睦

河野通顯

船橋宗迪拜領屋敷  
飯田町貳合半坂下八百九拾坪之內五百六拾坪

小普請組南部主稅支配  
河野長之助○通顯

松平定信

有馬中務大輔拜領中屋敷  
元矢倉千貳百六拾坪

松平越中守○定信

松平定國

松平越中守拜領中屋敷  
巢鴨五千坪

松平隱岐守○定國

有馬賴貴

松平隱岐守拜領下屋敷  
二本榎六千三百五拾貳坪餘

有馬中務大輔○賴貴

福王信尹

市岡左近拜領屋敷  
裏六番町三百五拾貳坪

大御番堀内藏頭與頭  
福王新右衛門○信尹

市岡正喜

福王新右衛門拜領屋敷  
四谷傳馬町三丁目横町三百五拾五坪之內三百坪

御書院番長谷川丹後守組  
市岡右近○正喜

由比勝有

蠅川善九郎拜領屋敷  
南本所猿江四百貳拾坪之內貳百坪

御小性組松平内匠頭組  
由比勝主膳○勝有

蠅川親贊

由比主膳拜領屋敷  
元矢之倉村松町四百五拾坪之內百八拾坪

表御右筆  
蠅川善九郎○親贊

太田資周

下枝刀之助拜領屋敷  
牛込築土明神下百八拾四坪

大御番本多肥後守組  
太田源助○資周

下枝正路

太田源助拜領屋敷  
小石川白山權現裡門近所四百貳坪

小普請組淺野佐渡守支配  
下枝正路○正路

内山光益

小林惣左衛門拜領屋敷  
小石川白山御殿跡七百拾五坪

小十人新見長門守組  
内山安次○光益

小林惣左

内山安次郎拜領屋敷  
小石川三百坂百貳拾坪

佐々木傳次郎支配大筒下役組頭  
小林惣左衛門○惣左

右願之通屋敷相對替被仰付之間、得其意、例之通可被致し。

相對替御書付書拔

政孝○初政奉。政八郎。石原。

寛政五丑年十二月二日御小性組前田安房守組井出主稅淺草阿部川町屋敷下、北本所三ツ目永倉町屋敷、願之通相對替被仰付之。

忠經○九郎兵衛。鐵彌。外記。大久保。

小川町御臺所町五百廿八坪之內、御目付中川勘三郎添屋敷小川町表猿樂町三百五十坪、淺野佐渡守支配黒田豊吉屋敷北本所番桶町三方替、寛政五丑年十二月二日願之通被仰付、表猿樂町へ引移申し。

昆當○正賢。鶴太郎。主水。佐兵衛。久左衛門。田澤。

先祖義、屋敷拜領仕年日不知、先年番町邊出火之節居宅類焼之節、書物等焼失仕不知。寛政五癸丑年十二月二日表二番町屋敷、北本所三ツ目四ツ目之間東宗庵屋敷、切坪相對替被仰付、松平伊豆守殿○信明被仰渡、菅沼織部正申渡し。

青山幸完

幸完○從五位下。大膳亮。初式部。青山。

同年○寛政五年八月廿九日西丸下屋鋪家作共就御用可差上、湯嶋天神下立花出雲守屋鋪家作共被下し旨、被仰付之。同年○寛政五年十月廿五日○寛政五年湯嶋天神下屋鋪類焼、同○寛政五年十二月十六日右屋鋪就御用可差上、

殷昌期



加藤昭庀

木挽町伊達遠江守下屋敷内三千五百七拾貳坪餘被下置<sub>レ</sub>旨被仰出。  
昭庀<sub>上七</sub> ○初直威。幼茂吉。權左衛門。  
○加藤。

同年<sub>五年</sub> ○寬政 十二月十六日神田旅籠町拜領屋敷御用之付差上、爲代地、上野山下明地之内三百坪賜、御手當

金二拾五兩賜。

溝口直奮

直奮<sub>相模守</sub> ○溝口。幼名金彌。

同年<sub>五年</sub> ○寬政 十二月十五日京極備前守殿<sub>久高</sub> 御用之儀有之<sub>レ</sub>間、明十六日御城<sub>レ</sub>罷出<sub>レ</sub>様、當御番御目付中

少達在之、同<sub>十二月</sub> ○寬政五年 十六日登城仕<sub>レ</sub>處、下谷廣小路居屋敷御用之付可差上旨、爲代地、木挽町伊達遠

江守屋敷之内千五百九十八坪餘被下之、爲御手當金八拾五兩被下旨御書付、京極備前守殿<sub>久高</sub> 平井專

阿彌を以被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>御渡<sub>レ</sub>。

土井正恒

正恒<sub>九十郎</sub> ○土井。平助。重四郎。

同政<sub>五年</sub> ○寬政 五癸丑年十月廿五日類燒仕<sub>レ</sub>。同年<sub>五年</sub> ○寬政 十二月十七日下谷御成道屋敷御用之付差上、爲代地木

挽町伊達遠江守上ヶ地之内被下置、爲御手當金貳拾五兩被下置<sub>レ</sub>。

信利<sub>三郎右衛門</sub> ○小野田。幼名吉次郎。

元本所祿町四丁目横町、寶永五年八月廿八日拜領仕<sub>レ</sub>。寬政五年十二月十九日武田河内守支配神谷銀

一郎屋敷本所横網御竹藏前屋敷下、願之通相對替、安藤對馬守<sub>成</sub> 傳之段、柳生主膳正申<sub>レ</sub>渡之。

忠榮<sub>初熊吉</sub> ○神部。織部。  
同年<sub>五年</sub> ○寬政 十一月六日牛込神樂坂上横町拜領屋敷四百九十四坪<sub>レ</sub>、田安附東條權太夫拜領屋敷南木所六軒

堀貳百三拾三坪餘<sub>レ</sub>相對替仕度段、奉願<sub>レ</sub>處、同月<sub>十二月</sub> ○寬政五年 廿日願之通被仰付<sub>レ</sub>。

正喜<sub>龜太郎</sub> ○市岡。

同政<sub>五年</sub> ○寬政 五癸丑年大御番堀内藏頭支配福王新右衛門下、屋敷相對替奉願、同年<sub>五年</sub> ○寬政 十二月廿八日願之通被

仰付旨、京極備前守<sub>久高</sub> 御書付以傳。

通顯<sub>長之助</sub> ○河野。

寬政五年十二月廿二日私屋敷、市ヶ谷本村尾張殿下屋敷、四ッ谷追分ヶ御番醫師船橋宗麴屋敷元飯田町

二合半坂、右三方相對替願、廿九日願之通對馬守<sub>信成</sub> 傳之段、南部主稅傳之。私高祖父藏人迄糶町五丁

目谷六百四十六坪拜領、享保十二年十二月六日貳番町<sub>久</sub> 出火、其節類燒仕<sub>レ</sub>。右屋敷御用地<sub>レ</sub>上り、爲

替地四ッ谷私屋敷伊勢右衛門上地割残り五百三十坪被下之、享保十三年二月十二日相渡申<sub>レ</sub>。

— 寬政呈譜

圖<sub>略</sub>。

牛込若宮 佐々木勘三郎上ヶ地 貳百坪。

東北 今村五右衛門。道。西南 野村權九郎。

西北 道。東南 野村權九郎。

東北 十六間。西南 十五間一尺。

西北 十三間。東南 十二間四尺餘。

野村權九郎

牛込若宮新坂通佐々木勘三郎殿引替上ヶ地、野村權九郎<sub>レ</sub>被遊御預、<sub>中</sub> 奉預<sub>レ</sub>。爲後日仍如件。

御代官野村權九郎手代 鳴田 順 藏印

寬政五年十二月三日

殷 昌 期



御普請方下奉行  
明樂八五郎殿  
御普請方改役  
清水三右衛門殿

前書御繪圖之通銘々屋鋪境目立合ひ處、御改之通相違無御座い。爲後日仍如件。

御勘定組頭今村五右衛門内  
鈴木良兵衛印  
御代官野村權九郎手代  
嶋田順藏印

圖略○

四谷新屋鋪六軒町 秦甚三郎上ヶ地 坪數六拾五坪餘。

東北 道、河野政次郎。 西南 山本市左衛門。  
東南 青木助七、原田長十郎。 西北 森田源藏。  
東北 西南 十三間二尺。 四間二尺。  
東南 西南 五間三尺。 西北

四谷新屋鋪六軒町秦甚三郎上ヶ地、山本市左衛門に被遊御預、略中奉預い。爲後日仍如件。

寛政五丑年十二月七日

御普請方  
佐藤源七殿

同改役假役  
角田武右衛門殿

前書御繪圖之通境目立合ひ處、御改之通り相違無御座い。爲後日仍如件。

大御番堀内藏頭組山本市左衛門内  
大塚忠藏印

西丸切手御門番之頭竹田清次郎組同心  
青木助七印

吹上奉行明樂嘉太夫支配御掃除之者  
河野政次郎印

鐵炮洲佃島寄場村田鐵太郎支配  
森田源藏印

大御番堀内藏頭組山本市左衛門内  
大塚忠藏印

小十人新見長門守組原田長十郎内  
鈴木久兵衛印

圖略○

小日向 椀方六尺文次郎上り地 坪數四拾坪。

東 伊平次。 西 喜兵衛。  
南 茂作。 北 道。  
東北 西南 八間。  
東南 西南 五間。

小日向新屋敷椀方六尺文次郎上り地、拙者に被成御預、略中御預り申い。爲後日仍如件。

寛政五丑年十二月八日

御普請方改役  
鈴木喜太郎殿

御普請方  
佐藤源七殿

前書御繪圖之通境目立合ひ處、御改之通相違無御座い。爲後日仍如件。

殷昌期



御賄頭支配御賄新組伊平次當番ニ付代、御賄六尺方

長谷川斧右衛門印

御賄頭支配御賄六尺

喜兵衛印

同

茂作印

奥村源太郎

青山 奥村源太郎屋鋪 坪數貳百五坪餘。

東南 道。西北 和田源助。

西南 東北 一尾伊織。

東南 西北 十五間四尺。

西南 東北 十三間壹尺餘。

青山新屋鋪六軒町村上新三郎上ヶ地、今度願之通拙者屋鋪拜領仕、被成御渡、略中請取申中。爲後日仍如件。

小普請方吟味役

奥村源太郎印

寛政五丑年十二月十七日

御普請方改役

清水三郎右衛門殿

御普請方

佐藤源七殿

前書御繪圖之通境目立合中處、御改之通り相違無御座中。爲後日仍如件。

御作事下奉行和田源助内

福田定七印

御小性組仙石伯耆守組一尾伊織内

益田覺左衛門印

今西傳左

三田狸穴 今西傳左衛門屋鋪 坪數七拾四坪餘。

東南 木村新藏。北西 道。

南 大谷木茂右衛門。

東南 十壹間貳尺。北西 十三間三尺。

南 四間五尺折込一間二尺。北西 五間一尺。

三田狸穴元御屋鋪跡星野佐太郎上ヶ地、今度願之通拙者屋鋪拜領仕、略中請取申中。爲後日仍如件。

御掃除之者 今西傳左衛門印

寛政五丑年十二月十八日

御普請方改役

林部善太左衛門殿

御普請方

佐藤源七殿

前書御繪圖之通銘々屋鋪境目立合中處、御改之通相違無御座中。爲後日仍如件。

小普請方改役下役

木村新藏印

大御番本多肥後守與力

大谷木茂右衛門印

寛政五丑年十二月十八日

圖略

四谷内藤宿 山口丹波守○直添地 坪數貳百五拾五坪。

東南 道。大塚藤左衛門上ヶ地割殘リ。北西 頼田藤十郎。御鐵炮玉藥奉行組給地。

殷昌期

山口直清



四谷内藤宿裏番衆町大塚藤左衛門上ヶ地之内、今度願之通山口丹波守屋鋪添地拜領仕、被遊御渡、四方間數坪數、略奉請取<sub>レ</sub>。爲後日仍如件。

寛政五丑年十二月廿日

日光奉行山口丹波守内  
石田良助印

御普請方下奉行

明樂八五郎殿

同改役  
鈴木喜太郎殿

御普請奉行長田阿波守渡<sub>レ</sub>之。外御用ニ付出席無<sub>レ</sub>之。

前書御繪圖之通境目立合<sub>レ</sub>處、御改之通相違無御座<sub>レ</sub>。爲後日仍如件。

御鐵炮玉藥奉行近藤與兵衛組  
齋藤乙之助印

小普請組淺野佐渡守組  
頼田藤十郎印

圖略

四谷内藤宿裏番衆町大塚藤左衛門上ヶ地割残り 坪數七百七拾四坪餘。

東 大久保友之助、堀江荒次郎。  
南 道。  
西 頼田藤十郎。  
北 山口丹波守添地。

南 七十一間三尺。  
北 十間五尺。

四谷内藤宿裏番衆町大塚藤左衛門上ヶ地割残り、大久保友之助<sub>略</sub>被遊御預ヶ、<sub>略</sub>奉請取<sub>レ</sub>。爲後日仍如件。

大久保忠嘉

仍如件。

寛政五丑年十二月廿日

御普請方下奉行

明樂八五郎殿

同改役  
鈴木喜太郎殿

小普請組南部主税支配大久保友之助内  
武田長右衛門印

小普請組淺野佐渡守組  
頼田藤十郎印

御小性組高木筑後守組堀江荒四郎内  
淵井專助印

小普請組南部主税支配大久保友之助内  
武田長右衛門印

前書御繪圖之通境目立合<sub>レ</sub>處、御改之通相違無御座<sub>レ</sub>。爲後日仍如件。

圖略

青山權田原 出口清五郎添地 百坪。

東 道。  
南 齋藤三之丞上ヶ地割残り。  
西 道。  
北 出口清五郎、萩原庄助。

東 八間餘。  
南 十間壹尺餘。  
西 九間餘。  
北 十間三尺。

青山權田原齋藤三之丞上ヶ地之内、今度願之通拙者添地拜領仕、被成御渡、四方間數坪數、略請取申<sub>レ</sub>。爲後日仍如件。

殷昌期

出口清五郎



寛政五丑十二月廿一日

御普請方改役  
鈴木喜太郎殿

同假役  
端山定五郎殿

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通相違無御座ハ。爲後日仍如件。

吹上奉行支配御普請方  
萩原庄助印

圖略〇

青山權田原 齋藤三之丞上ケ地割残り 坪數百拾六坪餘。

東道。西道。出口清五郎。

南 七間二尺餘。北 十壹間二尺餘。  
十四間。北 十貳間壹尺餘。

青山權田原齋藤三之丞上ケ地割残り、拙者ハ被成御預、略中預り申ハ。爲後日仍如件。

寛政五丑十二月廿一日

御普請方改役  
鈴木喜太郎殿

御普請方假役  
端山定五郎殿

種姫君様御侍  
出口清五郎印

圖略〇

小石川 渡邊喜内屋鋪 坪數六拾七坪餘。

東道。安藤甚之助。北西 横川文吉。

南 十四間三尺。  
北 十四間四尺。

小石川後藤彌左衛門上ケ地、今度願之通拙者屋鋪引替拜領仕、被成御渡、略中請取申ハ。爲後日仍如件。

寛政五丑年十二月廿二日

御普請方  
野中 新三郎殿

御普請方  
角田武右衛門殿

前書御繪圖之通境目立合ハ處、御改之通相違無御座ハ。爲後日仍如件。

野村次郎左衛門組御小人  
安藤甚之助印  
小普請方御掃除之者  
横川文吉印

圖略〇

小石川新鷹匠町 新見勝左衛門上ケ地 坪數貳百坪。

東南 伊熊貞三郎。西北 波多野忠藏。  
西南 道。東北 岡田和平、朝倉權左衛門。

東南 西北 貳十間三尺。  
西南 十間。

小石川新鷹匠町甲府小普請新見勝左衛門殿上ケ地、朝倉權右衛門ハ被遊御預替、略中奉預ハ。爲後日仍

殷昌期



如件。

寛政五丑年十二月廿三日

御普請方改役

清水三郎右衛門殿

御普請方假役

松尾藤兵衛殿

前書御繪圖之通境目立合い處、御改之通相違無御座い。爲後日仍如件。

御鳥見波多野忠藏・小普請組南部主税組名代

池田次左衛門印

御臺所頭支配無役

岡田和平印

御鷹匠伊熊貞三郎内

梅濱勇次郎印

小普請組南部主税支配朝倉權右衛門内

菅山利兵衛印

小普請組南部主税支配朝倉權右衛門内  
菅山利兵衛印

飯塚忠右

圖略○

四谷北寺町 飯塚忠右衛門屋鋪 坪數七拾壹坪餘。

東道。 鈴木源藏、朝比奈十郎右衛門。  
南 藤井庄三郎。 北 田中幸右衛門。

東 三間二尺五寸。  
南 北 貳十壹間餘。

同 田中幸右衛門屋鋪 坪數七拾壹坪餘。

東道。 飯塚忠右衛門。 鈴木源藏。  
南 北 濱中金六郎。

東 三間二尺五寸。  
南 北 貳十壹間餘。

四谷北寺町柳川新四郎上ヶ地、今度願之通拙者共兩人屋鋪拜領仕、被成御渡之、四方間數坪數、○中請取申い。爲後日仍如件。

寛政五丑年十二月廿四日

諏訪部八十郎支配御口之者  
飯塚忠右衛門印  
田中幸右衛門印

御普請方改役  
林部善太左衛門殿

御普請方假役  
端山定五郎殿

前書御繪圖之通境目立合い處、御改之通相違無御座い。爲後日仍如件。

御廣敷添番  
濱中金六郎印

御留守居岩本内膳正同心組頭  
鈴木源藏印

御裏御門番之頭加藤源之丞組同心  
藤井庄三郎印

小普請組石河壹岐守組  
朝比奈十郎右衛門印

圖略○

殷昌期



大川 御徒水稽古場繪圖

駒形町河岸より諏訪町河岸通之至ル小屋場 拾貳ヶ所。

河岸物置裏にて。 各 東 西 五間。 南 北 貳間。

右本證文無之。

寛政五癸丑年

- 十一月七日預。秦甚五郎上ヶ地
- 一、四谷新屋敷六軒町六拾五坪餘

文化二丑年二月廿八日河野鐵三郎に預替に。

- 十二月十七日渡。村上新三郎上リ地
- 一、青山新屋敷六軒町貳百五拾坪餘

- 十二月十八日渡。星野佐太郎上リ地
- 一、三田狸穴七拾四坪餘

- 十二月廿日渡。大塚藤左衛門上リ地之内
- 一、四谷内藤宿裏番衆町貳百五拾五坪

但、爲添地一渡。

- 十二月廿一日渡。齋藤三之丞上ヶ地之内
- 一、青山權田原百坪

但、右同斷。

- 十二月廿六日渡。後藤彌左衛門上ヶ地
- 一、小石川六拾七坪餘

屋鋪渡預繪圖證文

大御番堀内藏頭組  
山本 市左衛門  
預地。

小普請方吟味役  
奥村 源太郎

御掃除之者  
今西 傳左衛門

日光奉行  
山口 丹波守  
添地。

種姫君様御侍  
出口 清五郎  
同斷。

西丸御臺所小間遣  
波邊 喜内

諏訪部八十郎支配御口之者  
飯塚 忠右衛門  
田中 幸右衛門

山口 兵庫

屋敷書拔

大關 伊豫守○增

青山 大膳亮○幸

御旗奉行  
太田 駿河守○資

大關増輔

十二月十六日 ○寛政五年  
○中略

下谷廣小路屋敷御用ニ付差上、湯島天神下  
青山大膳亮屋敷被下、銀貳百枚被下之。

右被仰付旨、於波之間、老中列座、對馬守○安藤申渡之。○中

右湯島天神下屋敷御用ニ付差上、木挽町伊達遠江守屋敷之内三千五百七拾坪被下之。依之銀三百枚被  
下旨、於芙蓉之間、列座同前、○老中同人○安藤申渡之。○中

太田資倍

右下谷廣小路屋敷御用ニ付差上、木挽町伊達遠江守屋敷之内千三百三拾貳坪被下、爲御手當白金八拾  
五兩被下旨、於桔梗之間、伊豆守○松平以御書付申渡之。

般 昌 期



備前守殿○京極高久

御目付〃

御掃除之者  
高坂茂助  
御挑灯屋  
平兵衛  
小島兵助  
右拜領町屋敷、御用之付可差上旨、可申渡〃。尤町奉行可被談〃。代地之儀〃、追多可相達〃。  
—寛政録

附記、一  
千住大橋更架

〔附記、一〕千住大橋更架

十二月六日〇寛政五年中略

時服三。

右千住大橋懸直御修復御用相勤〃之付被下旨、於芙蓉之間、列座同前、〇老中同人〇安藤信成申渡之。

銀拾枚。

右同斷之付被下旨、於御右筆部屋縁類、伊豆守〇松平信明申渡之。攝津守〇堀田正敦侍座。大島半左衛門

同七枚。

右同斷之付被下旨、於躑躅之間、若年寄中出座、備前守〇京極高久申渡之。

銀五枚。

御徒目付  
田島清三郎

同三枚。

同。

右同斷之付被下旨、於燒火之間、攝津守申渡之。

攝津守殿〇堀田正敦

御目付〃

銀壹枚宛

千住大橋掛直御普請御用相勤〃之付被下之。

六日〇寛政五年十二月〇中略千住大橋修復の事奉はりしをもて、小普請奉行神保佐渡守長光時服三を賜ひ、所屬のもののおの／＼銀を下さる。

—文恭院殿御實紀

〔附記、二〕大學頭

十二月十六日〇寛政五年中略

林 熊藏〇大學頭

右諸大夫被仰付旨、於同席〇白書院縁類列座同前、同人〇安藤信成申渡之。若年寄中侍座。

十六日〇寛政五年十二月〇中略儒役林衛は大學頭。

—文恭院殿御實紀

〔附記、三〕壹番町藥草植場

十二月十五日〇寛政五年中略

殷昌期

附記、三  
壹番町藥草植場

附記、二  
大學頭



攝津守殿○堀田 正政

御目付〃

御中間

池田源四郎

黒鉄之者 武田八十郎

右此度壹番町明地の御藥草植場出來之付、出役可被申渡〃。出役中假扶持三人扶持宛被下〃間、其段可被申渡〃。尤佐橋長門守村垣左太夫可被談〃。

是年

○寛政五年（紀元二四五三年）

社寺ノ異動若干有リ。

○拜領寺社帳。地子古跡寺社帳。御朱印拜領地寺社帳。除地古跡寺社帳。古跡寺社帳。拜領除地寺社帳。

寛政錄

社寺異動 社寺異動事

社寺地異動 寛政五年寺地ノ異動有リタル者ヲ舉グ。

神明社 再營。

除地 境内千五百八十八坪

淺草寺末深川神明別當南本所 天台宗 泉 艱 寺

有來門前町屋小間四十六間餘。

右相願候者、同寺抱所深川元町神明社地、天明三卯年類焼〃候之付、此度中門通東之方八間五寸、西ノ方十間三尺ノ石垣繕、右之場所〃何レも高サ六尺之玉垣再建、屋根瓦葺〃候〃、且中門西ノ方之六尺寄、石垣より三尺引込、假木戸門〃之〃候〃、明キ八尺、兩開高サ八尺五寸、東ノ方三尺ノ潜付、并門番所間口一間四尺、奥行一間半之〃間四方ノ庇、入口ニケ所明ケ、屋根瓦葺、門〃より西ノ方幅四尺二寸之高六尺之袖塀附、作事〃之度旨、願出候之付、遂吟味隣寺處之〃ものへも相尋候處、障儀無之旨、證文差出候付、願之通差免、泉艱寺〃エ證文申付、寺社方帳面張紙仕候由、松平右京亮〃より印形之斷手紙ヲ以申越

候。依之寛政五癸丑年八月廿日申上、御帳面張紙仕候。右之趣松平伊豆守殿〃エ申上。

拜領除地寺社帳

龍眼寺

龍眼寺 再營。

糀町平川天神別當 龍眼寺留守居

天台宗 信 行 院

拜領地 社内貳千百拾三坪

門前町家 小間四拾壹間。

右相願〃者、寛政四子年類焼〃いたし〃之付、此度梁間四間半、桁行拾貳間半、玄關間口貳間、奥行九尺、廊下長サ三間、幅三尺、臺所向是迄惣二階家之有之〃所、右二階家此度相止、尤日光御門跡御通行之節、御休所之相成、手挾〃之者差支〃得共、以前之梁間壹間半相減、右間敷通再建〃いたし度段、立花出雲守殿〃種寺社御勤役中願出〃之付、被御吟味、所之者〃之被成御尋〃處、障儀無之旨、證文差出〃。然處右者間延作事之儀之付、采女正殿〃氏教〃之御伺之上、願之通御差免、則信行院〃之證文被仰付置〃旨、右之付寺社方帳面張紙仕〃由、青山下野守〃之印形之斷手紙を以申越〃。依之寛政五癸丑年十一月十日申上、御帳面張紙仕〃。

拜領寺社帳

常照寺

常照寺 貸家ヲ撤却ス。

古跡年貢地 境内七百七拾八坪。

東叡山末芝高輪 天台宗 常 照 寺

内、三百三拾坪 除地。

四百四拾八坪 年貢地。

般 昌 期



右境内年貢地之内南之方空地之場所、横町通り拾貳間之處、表通り竹垣いたし、入口三ヶ所明、通りより三尺引込、梁間貳間半前三尺之庇、後之壹間之下屋、桁行拾壹間、茅葺一棟作事いたし、寶曆九卯年より丑年<sup>〇明和</sup>迄中年拾年季貸家いたし度旨、阿部伊豫守殿<sup>〇正</sup>寺社御勤役中願出、御差免、其後年季明<sup>〇寛政</sup>度之願出差免置<sup>〇</sup>い。且又境内除地之内、南之方横町通り空地之場所、表通り竹垣いたし、入口三ヶ所明ヶ通りより三尺引込、梁間貳間半、前之三尺之庇、後之壹間之下屋、桁行拾五間、茅葺一棟新規貸家建添作事いたし、寛政元酉年より未年<sup>〇寛政十</sup>迄中年拾年季貸家いたし度段願出、差免置<sup>〇</sup>い。然る處右門前地町屋之内之女共抱置茶屋へ遣、身賣爲<sup>〇</sup>致、且所持地面料理茶屋へ客有之節、藝者呼寄身賣爲<sup>〇</sup>致儀を不<sup>〇</sup>存罷在、旁々不埒之付、右地面建家共去る子年<sup>〇寛政</sup>十一月取上相成、右建家二ヶ所共、當二月<sup>〇寛政</sup>爲<sup>〇</sup>取拂<sup>〇</sup>い段、小田切土佐守<sup>〇</sup>より通達有<sup>〇</sup>之、常照寺よりも届出<sup>〇</sup>之付、寺社方帳面張紙仕<sup>〇</sup>由、板倉周防守<sup>〇</sup>より印形之斷手紙を以て申越<sup>〇</sup>い。依<sup>〇</sup>之寛政五癸丑年四月二日申上、御帳面張紙仕<sup>〇</sup>い。

地子古跡寺社帳

了學寺

了學寺 門前町屋ト共ニ本堂其他ヲ改建ス。

拜領古跡地  
境内貳百貳拾六坪餘

増上寺末  
淨土宗 四谷伊賀町  
了學寺

右門前町家三軒、此小間西南に折廻シ貳拾九間、致作事度旨、寶永元甲申年願出、永井伊賀守<sup>〇</sup>寺社勤役中差免置候處、此度右門前町屋不<sup>〇</sup>殘取崩シ、南之方<sup>〇</sup>桁行拾間半、梁間貳間半、前通り右桁行壹間之庇、後之方桁行七間半壹間之庇附、惣二階家造り、惣屋根瓦葺之致、西之方<sup>〇</sup>路次口壹ヶ所明ヶ、尤町屋之男

女猥之<sup>〇</sup>地内<sup>〇</sup>立入候儀無<sup>〇</sup>之様、町屋裏通り板塀之致、南之方<sup>〇</sup>町屋並高サ壹丈三尺五寸、幅七尺五寸、兩扉付腕木門、是迄有<sup>〇</sup>形之通場所引直シ致修復、門左右板塀之いたし右之方<sup>〇</sup>高サ四尺幅貳尺五寸之出入口附、表通西之方<sup>〇</sup>梁間九尺、桁行三間之土藏壹ヶ所、新規取建、其外表通惣板塀之致、境内本堂庫裏并觀音堂等建直し修復致作事度段願出候付、遂吟味、近寺并所之者<sup>〇</sup>之衰相尋候處、障儀無<sup>〇</sup>之旨、證文差出候付、願之通差免、右門前町屋紛敷商躰之者<sup>〇</sup>差置申間鋪、且門前町家取崩し<sup>〇</sup>敷、又者是迄之有<sup>〇</sup>形引直候節者届出、差圖ヲ請可<sup>〇</sup>取計旨、了學寺<sup>〇</sup>證文申付、寺社方帳面張紙仕<sup>〇</sup>由、板倉周防守<sup>〇</sup>印形之斷手紙を以申越<sup>〇</sup>い。依<sup>〇</sup>之寛政五癸丑年八月四日申上、御帳面張紙仕<sup>〇</sup>い。

了學寺門前町屋長屋三軒ニ賣人罷在、延寶七己未年御帳吟味ニ付住持申越<sup>〇</sup>い。

一、門前町屋三軒此小間西南に押廻貳拾九間。

右四谷伊賀町増上寺末了學寺門前町屋作事、寺社奉行所に願之通差免之、小間相改<sup>〇</sup>旨、永井伊賀守<sup>〇</sup>方<sup>〇</sup>印形之斷手紙を以申越候。依<sup>〇</sup>之此方御帳面致張紙<sup>〇</sup>ニ付、寶永元甲申年六月右之趣申上御張紙差<sup>〇</sup>上之。

拜領寺社帳

寶泉寺

寶泉寺 貸地ヲ繼續ス。

除地  
境内六千九百十二坪

東叡山末  
天台宗 寶泉寺

右相願候者、境内稻荷門外圍之内、右ノ方間口三十間、奥行二十間百姓五人、左ノ方間口三十五間、奥行二十間百姓七人、都合十二人エ、天明三卯年<sup>〇</sup>當丑年<sup>〇</sup>迄中年十年季貸續度旨、井上河内守<sup>〇</sup>寺社

般昌期



勤役中願出、差免置候處、年限之付、此節建家不殘取拂候旨届出候間、遂吟味候處、相違無之、寶泉寺工證文申付、寺社方帳面張紙仕候由、脇坂淡路守○安印形之斷手紙を以申越候。依之寛政五癸丑年十二月十八日申上、御帳面張紙仕候。

除地古跡寺社帳

金剛寺

貸地承續。

駒込吉祥寺末

拜領地  
境内六千四百四拾八坪。

曹洞宗 小日向 金

剛 寺

門前町屋惣間口間數、東南折廻し五拾六間貳尺。

右相願い者、境内西之方六拾坪之地所、清水殿普請奉行大河原喜三郎元支配當時目付普請奉行兼帶一尾又右衛門支配小普請改役中里新右衛門へ、天明三卯年七月より當丑年○寛政五年迄中年拾年季貸地いたし度旨、阿部伊勢守殿○正倫寺社勤役中相願、御差免被置候處、猶又當丑年○寛政五年より來る亥年○享和三年迄中年拾年季右新右衛門へ貸地貸續度段、立花出雲守殿○種寺社御勤役中願出候之付、被遂吟味、隣寺并之所之者へも相尋候處、障儀無之旨、證文差出候之付、願之通り差免、尤又貸等不爲致、年季明候ハ、勿論、年季之内之亦も致返地、家作取崩候者、可相届旨、金剛寺へ證文申付候旨、右之付寺社方帳面張紙仕候由、青山下野守○忠より印形之斷手紙を以て申越候。依之寛政五癸丑年十一月十日申上、御帳面張紙仕候。

古跡寺社帳

大圓寺

地所貸繼。

上州館林茂林寺末

拜領地  
境内四千三拾貳坪。

曹洞宗 駒込 大

圓 寺

門前町屋數間口三間。

右境内北之方横町表通貳拾七間半裏行貳拾間之場所、是迄拾年季貸地いたし置候處、此節年季明キ候之付、家作取拂候段届出、且右地面之内西北之方角九間四尺之四間半之所、片町御年貢地罷在候清八徳兵衛と申者代々借地いたし、物置土藏三ヶ所、并之町内自身番、古來より建置候右地所者當丑年○寛政五年より來る亥年○享和三年迄中年拾年季貸續度旨、右清八徳兵衛并町役人共一同願出候之付、遂吟味、近寺所之者へも相尋候處、障儀無之旨、證文差出候之付、願之通り差免、尤又貸等不爲致、年季明候ハ、勿論、年季之内之亦も返地いたし候者可相届旨、大圓寺へ證文申付、寺社方帳面張紙仕候旨、松平右京亮○輝より印形之斷手紙を以て申越候。依之寛政五癸丑年八月四日申上、御帳面張紙仕候。

古跡寺社帳

永昌寺

貸家撤去。

増上寺末

拜領地  
境内九百七拾五坪。

淨土宗 下谷 永

昌 寺

右門前空地之場所、表門東之方、梁間貳間半、桁行拾五間、表通三尺之庇、裏通六尺之下屋附、入口七ヶ所明、同西之方、梁間貳間半、桁行五間、表通三尺之庇、裏通り三尺之下屋附、入口三ヶ所明、裏門北之方、梁間貳間、桁行八間、表通三尺之庇、裏通三尺之下屋附、入口四ヶ所明ケ、右三棟共、前通下水内竹垣いたし、三尺引込、新規二階家瓦屋根をいたし、表門西之方、裏之九尺二間之貳間四方之藏地添、裏門北之方、裏之貳間四方之藏地添、是迄拾年季家作いたし候處、去る子年○寛政四年明之付、家作不殘取拂候跡、

殿 昌 期



葭垣之いたしゆ旨届出ゆ之付、遂吟味ゆ處、相違無之、隣寺よりも證文差出ゆ之付、永昌寺へ證文申付、寺社方帳面張紙仕ゆ由、立花出雲守○種より印形之斷手紙を以て申越ゆ。依之寛政五癸丑年四月六日申上、御帳面張紙仕ゆ。

祝言寺

古蹟拜領地

境内 表口三拾七間。裏行六拾間。

駒込吉祥寺末  
淺草新寺町  
曹洞宗 祝言寺

右相願ゆ者、境内南之方拾間四方之場所、淺草本願寺末入樂寺へ、安永七戌年より申年○天明八年迄申年拾年季貸地之儀、牧野豊前守○推成寺社勤役中願出、差免置ゆ處、又ゆ去申年○天明八年より來る午年○寛政十年迄申年拾年季貸續度旨願出ゆ。然る處右年限相延ゆ段相糺候處、祝言寺儀者、當年入院之付不念之筋爰無之、入樂寺儀ハ全く心得違ひ候旨之付、相當の咎申付、貸續之儀ハ遂吟味、隣寺所之者へも相尋候處、障議無之旨證文差出ゆ之付、伊豆守殿○松平信明へ伺之上、願之通り差免ゆ。尤年季之内たりとも致返地候ハ可相届旨、祝言寺並之入樂寺へも證文申付、寺社方帳面張紙仕ゆ由、板倉周防守○勝政より印形之斷手紙を以て申越ゆ。依之寛政五癸丑年九月十日申上、御帳面張紙仕ゆ。

幸龍寺

拜領地

境内 七千三百坪。

内貳千五百坪増坪。

京本國寺末  
淺草  
日蓮宗 幸龍寺

右相願ゆ者、明和九辰年類焼後、客殿假作事之為差置候處、法用之節手狹之付、此度五間梁之貳間之入側、

桁行拾間、四間之八間之角屋、本堂再建いたし度段、願出候之付、遂吟味、隣寺へも相尋候處、障議無之旨、證文差出ゆ。然る處右者間延作事之儀之付、伊豆守殿○松平信明へ伺之上、願之通り差免、則幸龍寺へ證文申付、寺社方帳面張紙仕ゆ由、松平右京亮○和輝より印形之斷手紙を以て申越ゆ。依之寛政五癸丑年五月廿一日申上、御帳面張紙仕ゆ。

金剛院

古蹟拜領地

表間口三拾貳間半。裏行拾間三尺。

門前町屋 表門より東之方小間九間。表門より西南之方へ折廻し小間拾九間。

右金剛院儀、不届之儀有之ゆ之付、去る子年○寛政四年八月中旬伺之上松平越中守殿○定信依御差圖、遠島申渡ゆ。然處右寺地被召上、廢寺被仰付ゆ。依之寺社家作之儘、同○寛政四年九月小田切土佐守○直年へ引渡申ゆ之付、寺社方帳面張紙仕ゆ由、板倉周防守○勝政より印形之斷手紙を以て申越ゆ。依之寛政五癸丑年四月六日申上、御帳面張紙仕ゆ。

善照寺

拜領地

境内 表通り三拾間壹尺。裏通り四拾間。

門前町家拾四間五尺。

東本願寺末  
淺草新堀端  
一向宗 善照寺

右門前表門南之方之有之ゆ地中榮敬寺を門内北之方空地へ引直し、梁間貳間半、桁行四間、土藏作之佛間、梁間三間、桁行五間之庫裡、南之方貳間四方之角家瓦屋根之致し、右榮敬寺跡へ、表通り竹垣いたし、三



尺之入口四ヶ所明ヶ、梁間三間、桁行八間半、前通り壹間之庇、裏通九尺之下屋附、并三尺之路次を附、武階家瓦屋根之作事いたし、是迄拾年季貸家いたし置ゆ處、去る子年〇寛政四年季明ゆ之付、家作不殘取拂ひゆ旨届出ゆ之付、遂吟味ゆ處、相違無之、隣寺よりも證文差出ゆ之付、善照寺へ證文申付、寺社方帳面張紙仕ゆ由、立花出雲守〇種周より印形之斷手紙を以て申越ゆ。寛政五癸丑年四月六日申上、御帳面張紙仕ゆ。

御朱印拜領地寺社帳

幡隨院

幡隨院 文庫轉移。

拜領地  
境内八千貳百五拾九坪。

知恩院末  
淨土宗 淺草 幡隨院

門前町屋惣小間百貳拾四間三尺。

表門より西之方角迄 拾壹間參尺。

表門より東之方角迄 貳拾八間參尺。

南之方角より東頰裏門之際迄 八拾四間三尺。

右相願ゆ者、境内東之方之有之ゆ貳間之五間之文庫藏及大破、其上自坊建前近、非常用之相成兼ゆ之付、此度東之方表通り竹生垣並之地所引直、有來之儘建修復いたし度段、願出ゆ之付、遂吟味、近寺所之ものへ之相尋ゆ處、障儀無之旨、證文差出ゆ間、願之通り差免、幡隨院へ證文申付、寺社方帳面張紙仕ゆ由、青山下野守〇忠裕より印形之斷手紙を以て申越ゆ。依之寛政五癸丑年十二月廿七日申上、御帳面張紙仕ゆ。

御朱印拜領地寺社帳

市街異動  
市街異動事  
蹟  
神田通船  
屋敷

市街ノ異動若干有り。

〇文政町方書上。屋鋪渡  
預繪圖證文。屋敷書抜。

市街異動 寛政五年市街ノ異動有リタル者ヲ舉グ。

神田通船屋敷 河岸通火除地ト爲リ代地ヲ給セラレ。物置場ハ姑ク河岸並ノ如クセシム。

神田通船屋敷〇中

一、町内火除地之儀也、寛政五丑年湯嶋無縁坂ノ出火之類焼致、河岸通町屋火除御用地之被召上、跡退之代地被下置、河岸迄四十間長三十三間此坪千三百二十坪、火除地之相成ゆ所、河岸物置場河岸幅十八間、并同所東之方之東叡山物置場之御座ゆ間、幅二拾貳間、長凡三十一間餘、此坪六百八十貳坪程之御座ゆ。

一、河岸物置場也、前書之通二十間に有之ゆ所、其後年月不相知長サ二十五間、河岸幅東之方之拾間、西之方之拾壹間、物置場之致來ゆ所、元文四未年三月四日妻戀町ノ出火之類焼致し、河岸物置場差置中間敷旨被仰渡ゆ處、難儀仕ゆ旨之類、同〇元文四年十一月朔日石河土佐守様御番所之類水野備前守様御立合、竹木立置ゆ儀之無構、炭薪并竹木之積置ゆ様被仰渡、以來猥之無之様、高積傍小杭御打渡被成下ゆ旨、被仰渡。同〇元文四年十一月十九日傍小杭御打渡し被成下候。然所寛政五丑年十月廿五日湯嶋無縁坂ノ出火之類焼、池田筑後守様御番所御懸り之類、河岸通火除地之相成、翌寅年〇寛政六年二月十八日河岸物置場材木竹木置方之儀御取調有之ゆ之付、小丸太小角之類之長三間を限立置、中丸太之高サ四尺程之鳥居木補理、木先之高サ二間程之致し、長木之儀也、炭薪同様高サ五尺を限り積置ゆ様可仕、右之付場取ゆ間、河岸物置場幅之儀、東之方拾間、西之方十一間有之ゆ處、一同十八間之被成下ゆ様、同御番所之奉願ゆ得之、同〇寛政六年四月廿五日追御沙汰之被及ゆ迄、願之通差置ゆ様被仰渡ゆ。然處炭薪叢



米商賣之もの共儀も、右材木屋之中ニ入交リ罷在、河岸並惡敷御座い之付、材木屋同様河岸幅十八間之被成下い様、同年〇寛政六年九月三日同御番所〇奉願、同月〇寛政六年九月十九日願之通追〇御沙汰之被及い迄え、河岸並之通被〇仰渡い。然所文政七年七月六日神原主計頭様御番所御内寄合〇之、町々河岸地坪數場所柄之應し、相當之冥加金上納可致旨被〇仰渡、同年〇文政七年十月〇、壹坪之付一ヶ月銀五分宛、町内分一ヶ月金三兩三分宛、上納仕い。

文政町方書上

神田佐久間町壹町目 河岸通火除地ト爲リテ後退ス。翌年地所割渡有リ。姑ク此ニ併記ス。

神田佐久間町壹町目〇中

一、寛政五丑年十月廿五日湯島無縁坂〇出火〇之、町内致類焼、筋違橋〇和泉橋内外町々火除地之相成、河岸通町屋并裏通之有〇之〇神田柳屋敷同所御弓師屋敷麴町平河町一丁目代地神田山本町、右町々御用地之被召上、神田柳屋敷麴町平河町一丁目代地之義者、地形引直し相殘、河岸通町屋之儀、尙又操下〇、代地被下置〇い旨、同年〇寛政五年十二月十七日池田筑後守様〇長御番所〇之被〇仰渡、翌寅年〇寛政六年四月十三日地所御割渡被成下、當時之地形之相成、河岸通凡四十四間程、長町並之通火除地之相成申〇。且其節河岸通地所跡退り代地被下置〇い之付、和泉橋入用差出〇儀御免之義奉願〇所、願之通被〇仰付い。

文政町方書上

神田佐久間町貳町目 河岸通火除地ト爲リテ後退ス。翌年新地ノ割渡有リ。

神田佐久間町貳町目〇中

一、寛政五丑年十月廿五日湯島無縁坂〇出火〇之、町内河岸通類焼致、筋違橋〇和泉橋迄内外町々火除地之

相成、河岸通町屋並裏通之有〇之〇麴町平河町壹丁目代地御用地之被召上、地形引直し相殘、河岸通り町屋之儀、尙又跡退り代地被下置〇い旨、同年〇寛政五年十二月十七日池田筑後守様〇長御番所〇之被〇仰渡、翌寅年〇寛政六年四月十三日地所御割渡被成下、當時之地形之相成、河岸通凡四十三間五尺火除地之相成申〇。且其砌河岸通地所跡退り代地被下置〇い之付、和泉橋入用差出〇儀御免之義奉願〇所、願之通被〇仰付い。〇中  
一、神田佐久間町二丁目〇柳原土手通り〇渡ル橋字和泉橋之儀者、掛渡〇初々年月不相知、御入用橋之御座〇處、享保四亥年二月十四日右橋〇西之方神田佐久間町一丁目并町内地面貳ヶ所、下谷御數寄屋町〇出火〇之類焼仕、河岸通火除御用地之相成、跡追々代地被下置〇い處、河岸通隔、商賣物引取持運〇之入用相掛り、且家前之方者往來も少く難義仕〇之付、町家奥行二十一間五尺九寸之内表通拾間差上、河岸通〇地所御引替被成下、尤和泉橋入用新規修復共差出可申旨、享保十巳年十一月廿二日大岡越前守様〇忠御番所〇奉願〇所、同年〇享保十年十二月廿六日同御番所〇之、願之通被〇仰付、夫〇前書之神田佐久間町一丁目不殘、同所同町二丁目地面二ヶ所〇、入用差出、右橋新規修復共致來〇所、元文四未年三月四日妻戀町〇出火〇之、右兩町之内、神田佐久間町一丁目西之方〇九十九間一寸五分類焼致、神田川内町々も類焼致し、大火之相成〇い之付、地面御割替願之通被〇仰付節、外〇火移〇申様可仕段申上被〇仰付所、材木薪〇火移別〇及〇大火〇、不埒〇之付、右類焼之地面被召上、代地不被下〇い。其後者和泉橋入用右町家小間之割合、類焼致〇地面被召上〇分者御入用、類焼殘之分者町方〇差出來〇所、右地面御返被下置〇い様、度々御慈悲奉願、寶曆八辰年十二月晦日依田和泉守様御番所〇之元地御返し被下置〇い様、度々願出、殊之年數も相立〇儀之付、右元地面御返し被下置〇い。勿論和泉橋新規修復共入用差上可申旨、是又願之通被〇仰付い之



付、如先規和泉橋入用全く町方差出來所、寛政五五年十月廿五日湯島無縁坂出火之、壹丁目并和泉橋西之方二丁目分類焼致シ、筋違橋と和泉橋迄内外町々火除地之相成、神田佐久間町壹丁目同所同町二丁目之内地所二ヶ所も、跡退之代地被下置け付、和泉橋入用差出儀御免被成下置け様奉願、同<sup>政五</sup>年十二月十七日池田筑後守様<sup>〇長</sup>御番所之願之通被仰付、當時御入用橋之相成申<sup>〇</sup>。右橋之儀者、町内持場之内之、掃除等之義者仕來、焼失又者満水之節者勿論、損所有之儀等、南御番所御掛之同御番所<sup>〇</sup>御訴申上<sup>〇</sup>。

橋長サ拾四間。幅三間。

但、和泉橋と相唱<sup>〇</sup>譯、向柳原之藤堂和泉守様御屋敷有之<sup>〇</sup>故、相唱<sup>〇</sup>儀之可有御座、且又先年近邊之酒井和泉守様御屋敷有之<sup>〇</sup>故、右様相唱<sup>〇</sup>趣も申傳<sup>〇</sup>得共、礎<sup>〇</sup>仕<sup>〇</sup>儀無御座<sup>〇</sup>。全藤堂和泉守様御屋敷有之<sup>〇</sup>故相唱<sup>〇</sup>儀奉<sup>〇</sup>存<sup>〇</sup>。

文政町方書上

神田花房町代地

神田花房町代地 火後顛移ス。地所割渡ハ明年ニ在リ。今併記ス。

神田花房町代地

一、町内之儀、往古者武州豐嶋郡峽田領之内村名不知、其後年月相分不申、御武家屋敷之相成居候所、寛政五五年十月廿五日湯嶋無縁坂出火之、元地筋違橋御門外町屋類焼仕、河岸通火除地之相成候節、同所河岸通町内跡退之相成候之付、裏通町屋之分、下谷御成道御武家地立跡之代地被下置候旨、同年<sup>〇</sup>十二月十七日池田筑後守様<sup>〇</sup>御番所之被仰付、翌寅年<sup>〇</sup>四月八日下谷御成道東側中興御小性溝口相模守様・中興御番松平彌九郎様・小普請組石河壹岐守様御支配大草備次郎様御屋敷立跡、同所裏通り神

田仲町三丁目續御小性組松平内匠頭様御組永井織部様・御書院番石川大隅守様御組松平八郎右衛門様御屋敷立跡、右貳ヶ所之代地御渡被下置候。依之町名神田花房町代地と相唱申候。猶委細之義者、元地<sup>〇</sup>可<sup>〇</sup>申<sup>〇</sup>上<sup>〇</sup>候。

文政町方書上

神田平永町代地

神田平永町代地 燒後轉移ノ命有リ。明年ニ至リ地所割渡サル。今併記ス。

神田平永町代地

一、右町内之儀、神田平永町之内之寛政五五年十月廿五日夕七時頃、下谷池之端松平出雲守様御屋敷出火之節類焼仕候。尤柳原土手通東側北角之間口拾貳間餘之奥行拾九間四尺焼殘有之候處、柳原土手下町々六ヶ町地主共一同、町御奉行池田筑後守様御番所<sup>〇</sup>被<sup>〇</sup>召<sup>〇</sup>出<sup>〇</sup>、御用地之被<sup>〇</sup>召<sup>〇</sup>上<sup>〇</sup>、來春<sup>〇</sup>下谷御成道之代地被<sup>〇</sup>下置<sup>〇</sup>候旨、被<sup>〇</sup>仰<sup>〇</sup>渡<sup>〇</sup>、追々御調之上、翌寅年<sup>〇</sup>四月六日村上肥後守様御番所<sup>〇</sup>被<sup>〇</sup>召<sup>〇</sup>出<sup>〇</sup>、右町内之儀、東側北角拾七間五尺、奥行貳拾間貳尺、西側北角拾八間三尺六寸、奥行拾九間四尺之、地面數六ヶ所、右焼殘候分共不殘、下谷御成道武士屋敷立跡之、元坪之通代地被<sup>〇</sup>下置<sup>〇</sup>候旨被<sup>〇</sup>仰<sup>〇</sup>渡<sup>〇</sup>、同<sup>〇</sup>年<sup>〇</sup>四月八日御儀奉行太田駿河守様並大關伊豫守様御屋敷立跡之内之、代地御割渡被<sup>〇</sup>下置<sup>〇</sup>、其節<sup>〇</sup>神田平永町代地<sup>〇</sup>と相唱<sup>〇</sup>申候。且往古之申傳等及承不申候。

右元地平永町と相唱候得共、元來<sup>〇</sup>下谷車坂町之内<sup>〇</sup>東叡山御門前地<sup>〇</sup>之御座候。文政町方書上

神田御弓師屋鋪

神田御弓師屋鋪

一、町内之儀者、元地當所共、往古武州豐嶋郡峽田領之内、村名不知。其後武家地又者寺地之由申傳

殷昌期



候。神田佐久間町壹丁目裏通地面、元祿十一寅年神田松永町申町屋之相成候所、享保四亥年類焼後、河岸通火除地之相成、神田佐久間町壹丁目跡退り代地之相成、又候右代地之内表拾間通河岸通割替之相成、右町屋之代地町屋之間火除明地之相成居候内、麴町平河町壹丁目代地續之、間口拾五間裏行貳拾間此坪三百坪、同保〇享十三年十一月廿八日御細工所頭支配御弓師三輪仁兵衛拜領町屋敷之相成、町名之儀を御弓師拜領地之儀之付、其節之神田御弓師屋敷之唱來申候。然ル所寛政五丑年十月廿五日湯嶋無縁坂之出火之勢河岸通り類焼致、火除御用地之相成、佐久間町壹丁目跡退之相成候之付、池田筑後守様〇長御番所御懸り之、同年〇寛政五年十二月十七日下谷御成道武家方上地之内之勢代地被下候旨被仰渡、翌寅年四月八日下谷御成道東側中奥御番松平彌九郎様御屋敷跡之、表田舎間拾四間壹尺八寸、裏行同貳拾壹間之地所、爲代地被下置候儀之御座候。

一、里俗此邊を一圓之新地之唱、町内を八幡長屋之相唱申候。

神田山本町代地 類焼シ、翌年轉移起立ス。今併記ス。

神田山本町代地

文政町方書上

一、右町名起立之儀、古來之芝新馬場同朋町申、芝之有之候町之處、享保十四酉年八月中和泉橋外之引地之相成、佐久間町壹丁目續其節火除御用地明地之場所之替地被下、神田山本町之町名被仰付、其後寛政五丑年十一月下谷池之端松平出雲守様之出火致シ、湯嶋筋邊邊類焼之砌、當時致致類焼、翌寅年〇寛政六年四月中筋違内外町々御火除御用地之被召上、當町引地之相成、小路左右武家方立跡之勢替地被下、町内地面數貳拾壹地面之内、御成小路東側裏通近藤主殿頭様・松平彌九郎様・溝口相模守様御立跡之、地面

拾五ヶ所、且同所西側裏通之離レ大關伊豫守様御屋鋪跡之勢地面六ヶ所、合貳拾壹地面、代地被下候。以來神田山本町代地之相唱申候。

一、町内里俗之儀、前書寛政之度引地之相成候以來、御成小路左右町屋鋪ヲ都勢新地之相唱申候。

文政町方書上

神田小柳町三丁目代地

神田小柳町三丁目代地 燒後轉移ス。地所割渡ハ六年〇寛政ニ在リ。今併記ス。

神田小柳町三丁目代地

一、右町之儀之、神田小柳町三丁目之内之、寛政五丑年十月廿五日下午谷池之端邊之出火仕、土手下町々類焼致、元地小柳町三丁目之内火除御用地被仰出、右町土手付之方間口拾五間三寸、西之方拾貳間五尺五寸、南拾九間、北拾七間壹尺之場所、同年〇寛政五年十一月六日御調被仰付、同〇寛政五年十二月十六日町御奉行池田筑後守様御番所之外町々一同之地主被召出、代地被仰付、翌寅年〇寛政六年四月六日同御奉行村上肥後守様御白洲之被召出、下谷御成道武家方揚地跡之勢小柳町三丁目代地地所之内、壹ヶ所之切坪九拾五坪七合六勺五才、壹割増之分拾坪五合九才、都合百六坪三合五勺五才渡下置候旨、被仰渡、翌〇寛政六年八日村上肥後守様與力衆山崎助右衛門殿・小田切土佐守様與力衆廣田清六殿・町年寄奈良屋市右衛門・樽與左衛門・喜多村彦右衛門・町地割樽屋三右衛門御立合之、右代地御寄合近藤主殿頭様御屋鋪立跡之内之勢御渡被下置候。其節之神田小柳町三丁目代地之相唱申候。

文政町方書上

須田町貳丁目代地 災後轉移起立ス。

須田町貳丁目代地

殷昌期



一、御城の丑寅之當凡廿四丁程。

右者須田町貳丁目之内之、寛政五丑年十月廿五日夕七ツ時頃下谷池之端松平出雲守様御屋敷の出火之節、類焼者不仕候得共、同<sup>○寛政五年十月</sup>廿七日柳原土手下町々火除御用地之相成候間、普請見分候様被仰渡、同<sup>○寛政五年</sup>十一月六日御用地御檢地相始、須田町貳丁目御繩入之相成、同<sup>○寛政五年</sup>十二月十七日柳原土手下町々六ヶ町地主共町御奉行池田筑後守様御番所被召出、來春<sup>○寛政六年</sup>下谷御成道之為代地被下置候旨被仰渡、翌十八日<sup>○寛政五年十二月</sup>又々御檢地相始、須田町貳丁目地所御調有之、土手附之分地主さえ同たと同權兵衛右三ヶ所、同日<sup>○寛政五年十月十八日</sup>御用地傍示杭相建申候。右之内權兵衛地面者切地五坪故御用捨之相成、た之地面者不殘御用地之相成、さえ地面者元坪百三拾三坪貳合之内四拾六坪六勺切地之相成申候。翌年<sup>○寛政六年</sup>四月七日地主共村上肥後守様御番所被召出、下谷御成道松平内匠頭様御組永井伊織様御屋敷跡代地之被下置さえ切地之分、壹割増之為代地被下置候旨被仰渡、翌八日<sup>○寛政六年</sup>御渡之相成申候。其節類焼場者、早々引移、燒殘候場所者、三ヶ年之内勝手次第引移候様被仰渡候。

右元地須田町と相唱候譯、書留等無御座、駈と相分り不申候得共、慶長年中御町割已前者須田町壹丁目貳丁目共、須田村と申候由申傳候。

——文政町方書上

御挑灯屋平兵衛拜領屋敷 顛移ス。地所割渡ハ明年ニ在リ。今併記ス。

御挑灯屋平兵衛拜領屋敷

一、御城の丑寅之當り、凡貳拾四町程。

右元地樽屋三右衛門拜領屋鋪續神田平永町前通り廣道之内、天明七未年八月廿六日御若年寄安藤對馬守様

御目附曲淵勝次郎様、御火之番宮重惣右衛門様、淺利文四郎様御懸り、御挑灯奉行田口與兵衛様、大澤卯兵衛様、瀧又三郎様御列席、於御部屋被仰渡、表田舍間三間半、裏幅壹間四尺、奥行貳拾間、此坪五拾壹坪餘之所、御挑灯屋平兵衛拜領被仰付候處、寛政五丑年十一月近邊類焼之節、當時之類焼不仕候得共、柳原土手下六ヶ町地先火除御用地被召上候旨被仰渡、翌寅年<sup>○寛政六年</sup>四月九日爲代地當時之場所下谷御成道御小姓組松平内匠頭様御組永井伊織様御屋鋪跡之、五拾壹坪拜領仕候。

——文政町方書上

但、右拜領地柳原土手下立跡之儀、圍御藏藏建添地并往還道鋪之相成申候。

樽屋三右衛門拜領屋鋪 轉移。明地地所割渡サル。

樽屋三右衛門拜領屋鋪

一、御城の丑寅之當り、凡貳拾四町程。

右元地須田町貳丁目續、東裏柳原土手下廣道之、表田舍間九間貳尺、裏幅同三間五尺、奥行南之方貳拾九間、北之方貳拾九間半、此坪百九拾貳坪餘、天明七未年六月十八日町御奉行山村信濃守様<sup>○寛政六年</sup>御内寄合之、同御支配地割役樽屋三右衛門拜領仕候所、寛政五丑年十一月近邊類焼之節、類焼不仕候得共、柳原土手下六ヶ町地先火除御用地之被召上候旨被仰渡、翌寅年<sup>○寛政六年</sup>四月七日爲代地當時之場所下谷御成道近藤主殿様御屋鋪跡之、元坪之通拜領仕候。

但、右拜領地柳原土手下立跡之儀、小柳町三丁目切地續廣道往還道鋪之相成申候。

——文政町方書上

芝神明門前 收公セラレタル所有リ。又土手ヲ撤シ、下水幅ヲ變更シタル所有リ。

殷 昌 期

六九五

樽屋三右衛門拜領屋鋪

芝神明門前



芝神明門前

略。上。南之方里俗内門前互相唱申前書増上寺大門境神田三島町切地之相成跡残り百拾七坪之内九拾坪之地所、寛政五五年三月中隱賣女一件之付、池田筑後守様御番所御取上地之相成、家作取拂被仰付跡、葭簧張水茶屋并土弓場補理、請負人方地代上納仕。略。中。

一、増上寺表門前神明社地境土手際下水之儀、正徳三巳年八月中神明社地同門前并外五ヶ町御用地之被召上、右場所境土堀出来仕砌、芝神明門前神明町芝濱松町一丁目同七軒町四ヶ町月行事共、幅不相当、長四十三間通り、新規下水仕付御願申上由申傳得共、御懸り御役所等、年久敷義之付、相分り不申。尤水吐口之儀、増上寺表御門前大下水の落申。

但、寛政五五年四月中、御作事方御掛り之、土堀御取拂、土手御築立之節、下水幅壹間之相成申由申傳。

一、神明社地并同門前町家増上寺大門境土手之儀、正徳三巳年八月中神明門前外五ヶ町御用地之被召上節、神明門前増上寺大門通境之、御小普請方御掛り之、土堀御築立有之、右土堀根張神明社地同門前地所之内貳尺五寸、増上寺大門通地所之内二尺五寸、都合根張五尺通、長四十間程之有之儀、寛政五五年四月中御作事方御掛り之、土堀取崩、當時有形之通土手之相成申。

文政町方書上

赤坂新町五丁目

赤坂新町五丁目 略。中。

表田舎間六間九寸。裏幅同。裏行九間四尺八寸。此坪數六拾坪貳合五与貳才。

御作事方手代 山田 忠 五 郎

右之先拜領主小普請方手代坂田六郎治上り地、去ル寛政四子年十二月五日拜領仕度段奉願候得、翌丑年四月七日願之通右屋鋪被下置。

文政町方書上

鮫河橋谷町

鮫河橋谷町 町屋鋪領受者有リ。

鮫河橋谷町 略。中。

- 一、拜領町屋鋪名前左之通。一。節。
- 一、百四拾四坪餘

小普請 堀 小兵衛  
御小間使 高木 友十郎

右之寛文四辰年四月大竹平兵衛拜領仕儀、子孫平吉遠島被仰付、寛政三亥年十一月二日地面被召上、同政。寛。四子年七月十日種姫様御附御臺所頭折原次郎支配小間使堀與十郎、高木友十郎兩人之拜領仕。

府内備考

内藤宿上水堀端 内藤宿引請ト爲ル。

圖。略。

内藤宿 上水堀端南北除地。

東 道、天龍寺。  
南 新道。北 町屋。中央上水。

南 除地長延貳百貳十壹間餘。幅四尺。  
北 同。長延貳百貳十壹間餘。幅東七間餘、西壹間餘。

内藤宿内藤大和守殿下屋鋪上ヶ地之内、上水堀端南北除地、今度異變其外上水堀浚、并芥取揚等、諸事内

殷 昌 期

内藤宿上水堀端



藤宿町方引請之相成、被成御渡之、四方間數、○申請取申。爲後日仍如件。

寛政五丑年正月十七日

御代官野田文藏手代  
松澤丈兵衛印

御普請方改役  
清水三郎右衛門殿

御普請方改役  
松尾藤兵衛殿

寛政五癸丑年

屋鋪渡預繪圖證文

正月廿七日渡。内藤天和守下屋敷上ヶ地之内  
一、内藤宿上水端南北除地

御代官  
野田文藏

但、諸事内藤宿町方引請之相成、付渡。

屋敷書拔

谷中三崎

谷中三崎 農民某二年季預ヲ爲ス。

圖略

谷中三崎 百姓傳右衛門御預地 坪數四千五百九拾坪。

東南 畑。畑。西北 畑。  
東北 畑。西南 山。  
東南 七十八間。西北 九十貳間。  
東北 五十五間。西南 五十三間。

谷中三崎元御植木方同心御添地之儀、年來右同心衆より私に被成御預、畑地之開發、渡世仕來、今度上ヶ地之相成、是迄之通り御預被下置、壹ヶ年爲冥加金五兩貳分宛上納可仕旨奉願、

當丑年○寛政々來未年○寛政十迄七ヶ年季之積りを以、願之通右地所私に被遊御預ヶ、四方間數坪數、右御繪圖之面、御定杭之通、相違無御座奉預。然ル上、右冥加金々々十二月急度上納可仕。且右地所之内異變等有之、私引請取計、被仰渡、奉畏。勿論右御年限中、外に御拜領地之相渡、被仰渡次第、早速右地所可奉差上。爲後日仍如件。

寛政五丑年三月七日

下駒込百姓  
傳右衛門印  
同所年寄證人  
勘右衛門印

御普請方下奉行  
明樂八五郎殿

御普請方改役  
鈴木喜太郎殿

前書御繪圖之通境目立合、御改之通り相違無御座。爲後日仍如件。

下駒込名主  
甚右衛門印  
屋鋪渡預繪圖證文

森田町

森田町 地尻明地甘蔗植付場ト爲ル。

森田町○淺草  
○中略

一、町内地續き裏通之凡八百拾六坪程之明地壹ヶ所、右地所之儀、先年森田町新旅籠町兩町之町屋之御座、享保十七子年三月中類焼仕、御藏御火除地之被召上、明地之相成、新旅籠町之奉預、罷在所、寛政五丑年三月中武州多摩郡中野村百姓三右衛門甘蔗植付場之拜借地被仰付、右場所内并往還

殷昌期



道半分異變其外取計等之儀也、願人方之引請罷在、尤右場所也、森田町地尻之不用心之付、爲取締、森田町地尻下水外三尺通竹矢來御免被成下置の様、同年〇寛政五年四月申池田筑後守様〇長御勤役之節、森田町家主共奉願上〇下い處、願之通右場所圍被仰付い。然ル處其後拜借人三右衛門儀返地致、〇下

府内備考

橋場町

橋場町 町内ニ砂糖製法所ヲ設ク。

一、銀座附地所 町内下町之有之、表間口四拾六間、裏行貳拾貳間、右之御年貢町屋之多、源七と申もの所持之所、寛政元酉年中上り地之相成、水塚御築立被成い。其後寛政五丑年中砂糖製法所之相成。〇下

文政町方書上

江戸大火

六年甲寅〇寛政(紀元二四五四年)正月十日戊戌〇戊戌、三正綜覽。江戸大火、麴町五町目〇市内麴町區。火ヲ出シ、延燒芝口新錢座〇市内芝區。ニ及ブ。〇變災篇參照。

江戸大火事蹟

江戸大火 變災篇ニ詳記ス。

正月十日〇寛政六年未中刻、糺町五丁目秋田屋何某といへる酒屋より出火、烈風にて、山王御社・永田馬場・霞ヶ關・虎御門外櫻田邊諸侯藩邸數家類燒、大手橋御門燒け、愛宕下・日蔭町・新橋・芝新錢座・仙臺會津家等一圓燒亡せり。

武江年表

是夜市谷七軒寺町火有り、田町河岸マデ延燒シ、十五日〇寛政六年正月十九日〇寛政六年正月ニモ火災有リタルコト、同ク變災篇之ヲ記セバ、今引證セズ。

〔參考〕

正月十八日〇寛政六年

出火有之、風烈にて及大火いり、風筋等無構場所之面々之内、人數差出の様、被仰付い義も可有之哉之付、在府にて手明にていり、兼て其用意いたし、火事之節、早速有合之人數、屋鋪内揃置可申い。尤是迄も大火之節い、其心得之可有之いへ共、猶又不怠用意有之様、無急度可被申通い事。

正月廿一日〇寛政六年

出火之節、在府手明之三萬石以上、人數屋鋪之揃置い義也、人數計差出い事にて、自分出馬之不及段ハ勿論之事之い。右回答之向もいり、此段可被及挨拶い。

制令通彙

正月廿七日〇寛政六年

出雲守殿〇立花種周。

御目付い。

此度出火之付類燒之面々、居屋敷普請之儀、國持たりといふとも、分限とりかろく相見の様可被致い。家作大造之い得之、火災之爲之も不宜い間、是迄ハ猶更作事省略被致可然い。此段爲心得相達い。

右之通此度も類燒之面々ハ可被相觸い。尤西丸御目付ハ可有通達い。正月〇寛政六年

正月廿八日〇寛政六年

松平阿波守〇頼須賀治昭。

去ル十日〇寛政六年正月麴町邊ハ出火之節、人數揃置い段被申聞、則申達い處、早速人數差出、防留い場所も有之、度々出情相勤、尤之事之い。此段可申聞上意之い。

般昌期



去ル十日○寛政六年正月牛込邊〆出火節、人數揃置〆段被申聞、則申達〆處、早速人數差出相働〆段、出情之趣達〆上聞〆。

細川越中守〆治

去ル十日〆〇寛政六年正月、牛込邊〆出火之節、防之儀相達〆處、人數格別骨折相働、消留〆場所も有之、出情之事〆。此段可申聞上意〆。

松平出雲守〆前田利久

右於御白書院縁類、老中列座、采女正〆〇戸田氏教申渡之。

寛政錄

〔附記、一〕 屋鋪受授

寛政六甲寅年

正月廿六日渡。清水龜之助上り地、四谷鮫ヶ橋千日谷百四拾七坪餘

貞恭院様附御用人支配添番格御侍 植野八三郎

屋敷書拔

附記、一、  
屋鋪受授

植野八三郎

同政。六甲寅年正月廿九日於甲府屋敷拜領仕〆。江戸小石川上富坂町拜領屋敷差上申〆。

寛政呈譜

〔附記、二〕 潰銀

正月廿九日 〇寛政六年 〇中略

攝津守殿 正頼田

附記、二  
潰銀

御目付〆。灰吹銀其外潰銀類、銀座并下賣之者〆賣渡、銀道具銀入用之節〆、銀座〆之買請、他所〆之賣買致間敷旨、安永之度も相觸〆處、近年銀座〆之差出〆者少キ趣相聞〆。類焼等之場所〆々々、通用銀貳朱判并銀道具等焼損も可有之〆間、銀座〆之差出、引替〆儀、彌心得違無之様、急度可相守〆。右之通可被相觸〆。尤西丸御目付〆も、可有通達〆。

寛政錄

〔附記、三〕 桶樽職役錢改正

寛政六寅年二月七日小田切土佐守様〆〇直御番所〆、町々桶樽職人二拾七組、壹組〆貳三人宛被召出、右職人共、是迄組頭〆甲を定、此者共〆銘々役錢取集メ、御賄方桶方〆職人共差出來〆處、以來〆御買上ケ相成〆之付、取集組頭〆甲儀御取放、外商賣人同様〆、是迄之通役錢差出〆様被仰渡、尤取寄之番組相立、辨利宜様致、月行事相極、毎月右行事役錢取集メ、壹組限御番所〆相納〆様、御證文被仰付〆。桶樽職人共〆、桶大工頭細井藤十郎・野々山孫助〆、壹人別〆之鑑札相渡〆處、此度鑑札相改渡〆筈〆之間、桶樽職人組々行事〆、組合限人別書、桶大工頭〆之差出、追々鑑札引替請取可致〆家業〆。尤以來休職之者〆、鑑札相戻し、新規職業相初〆者〆、鑑札請取〆様可致〆。

右之通名主支配限り、右職人有之〆分〆、入念申渡〆様、組々可申繼〆。

右〆寅〆〇寛政六年二月八日樽與左衛門殿〆、小口去丑〆〇寛政五年年番〆被申渡〆旨通達。

去丑年〆〇寛政五年〇寛政六年中并當春〆〇寛政六年中も追々御掛合申、名前役錢高等相調〆。桶職人共役錢之義、當二月〆〇寛政六年

般昌期

七〇三

附記、三  
桶樽職役  
錢改正



中被仰渡有之、其節御達置申申通、彌組合取極メ之義、桶屋共之、日本橋之京橋迄之内一組之相成、名目桶町組と相唱、當時人數四拾六人有之、樽屋共之、日本橋之芝并赤坂邊迄一組之相成、是又日本橋組と相唱、何きも一組月行事兩三人つゝ相立世話致し、當正月〇寛政六年の四月〇寛政六年分迄之役錢、先達を被仰渡、御割合之通、去丑年〇寛政五年未納之分共、當四月〇寛政六年桶屋行事五郎兵衛町儀兵衛店清左衛門、具足町孫兵衛店長吉・南傳馬町三丁目八郎右衛門店太兵衛、右三人之を取集メ、當五月廿六日〇寛政六年土佐守様〇小田切直年御番所の上納相濟申申。此後毎月廿六日之右役錢上納致し様被仰渡。尤右桶樽職人役錢上納之義之、暫ク之内南北共去丑年〇寛政五年年番名主之、是迄之通相心得世話致し右職人増減有之、取調、書付可差出旨、右御番所之被仰渡の間、御達申申。右之付桶屋共之内店替商賣替又之病死、他國の引越切、并之他町へ引越參申有之、名前役錢高等、得と相調、書付、拙者共之内へ申出申様、當行事共の申渡、仲ケ間にも申繼申様、申渡申得共、尙又御支配内之桶屋ども行事之相當りの節之、右之趣無心得違取調、毎月十三日限申出申様、被仰渡可被下。尤右増減有之、各様之拙者共内へ被仰聞可被下。右之通之御沙汰有之迄之、是迄之通、拙者共兩人之増減等取調の間、此段御承知可被下。右之段御達申申。以上。

但、樽職人共之儀、此邊不殘四番組〇寛政五年年番之引請世話被致し義之御座。尤右役錢も桶屋共同日四月分迄上納相濟申申。以上。

六月朔日〇寛政六年 岡本清三郎 小宮善右衛門

富澤徳兵衛

寅〇寛政六年 八月三日小田切土佐守様御番所之蠟燭町名主定右衛門・新草屋町同定次郎・神田紺屋町貳丁目同勘次郎・同所三丁目同市之丞・檜物町同又右衛門・佐内町同六右衛門・南傳馬町三丁目同善右衛門・桶町同藤五郎被召出、以來桶樽職役錢取扱掛り被仰付申段、於御白洲被仰渡申段、通達有之。  
同〇寛政六年 九月十六日北御番所の桶樽掛り八人被召出、左之通被仰渡。桶樽職人共の爲取メ私共の鑑札可相渡旨申上、御糺御座申處、桶大工頭細井藤十郎・同野々山孫助儀、先祖代々相勤の御役義之付、鑑札之義之、只今迄之通兩人へ相渡申様仕度申上申之付、尙又御糺御座申處、何き之も目當無之ゆゑ役錢取立を行届兼申之付、桶大工頭共相渡の鑑札之不拘、別紙雛形之通、厚紙之認、押切致相渡申度旨申上申得之、今日〇寛政六年九月十六日被召出、願之通取計可申旨被仰渡、奉畏申爲後日仍如件。

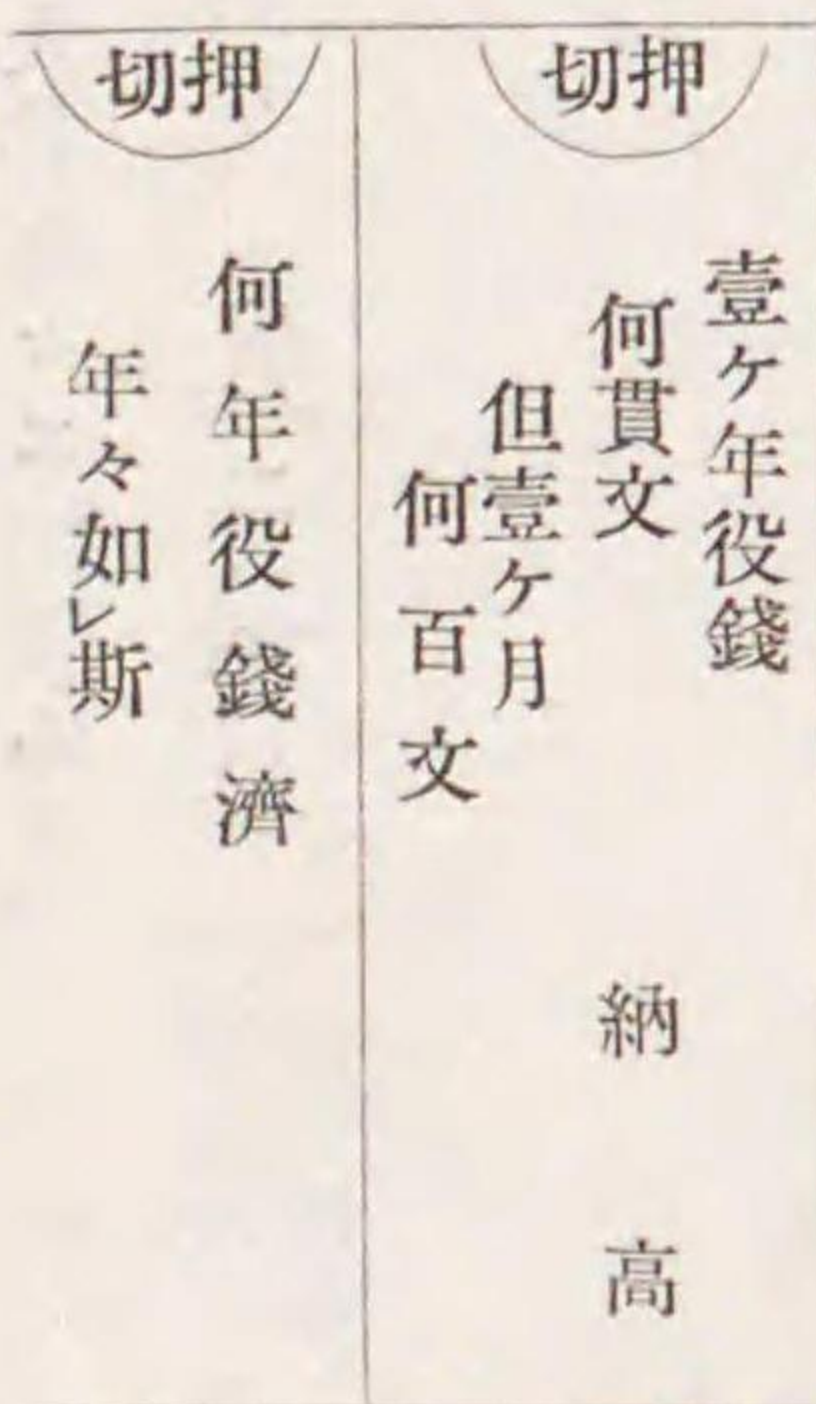
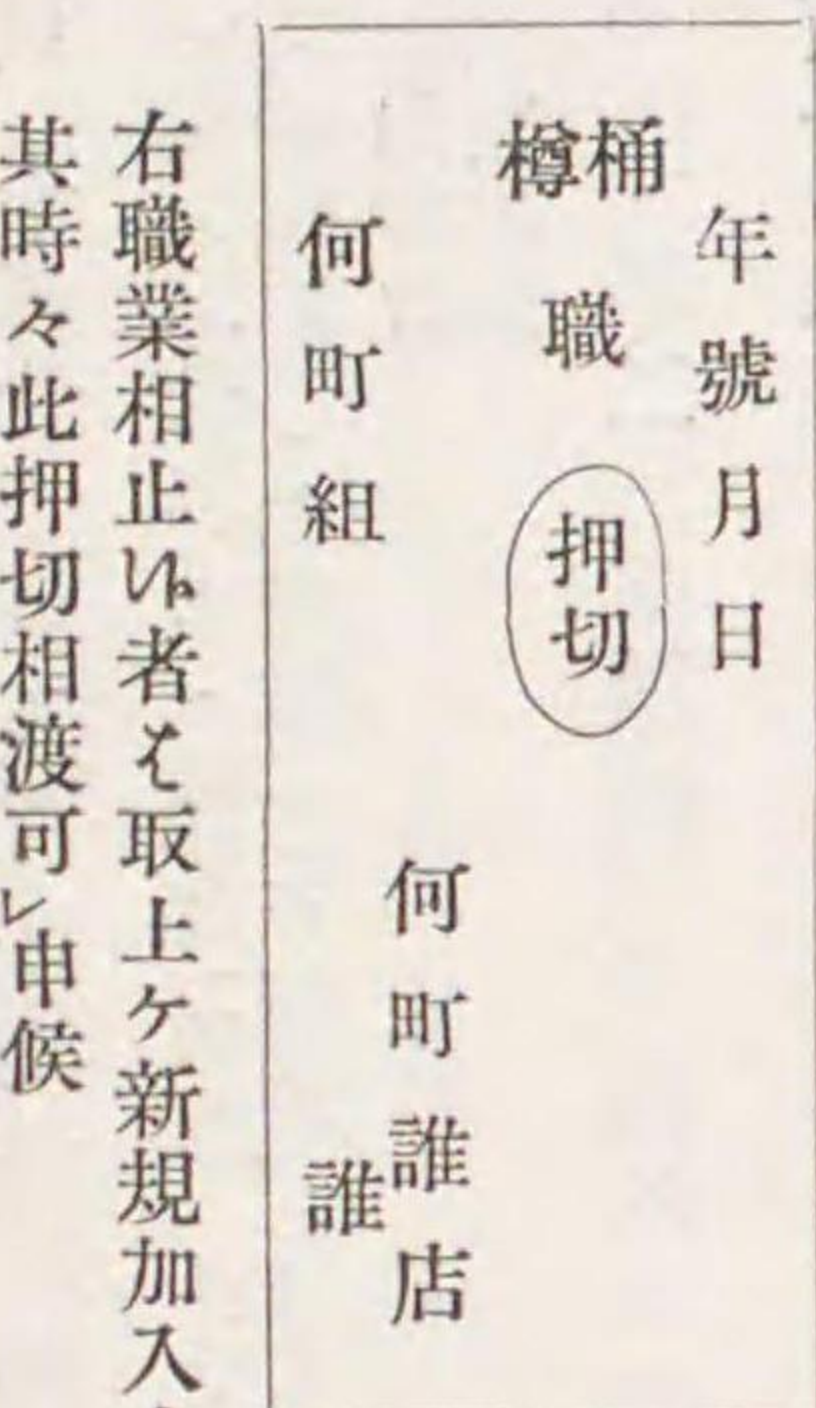
寅〇寛政六年 九月十六日

八人連印

西之内横二ツ折を四ツ折ニシ

上書之圖

上書折返シ内の認の圖



右職業相止申者取上ケ新規加入之者、其時々此押切相渡可申候

殷昌期

七〇五



右押切書付、十月廿一日○寛政六年北御番所御腰掛之形、職人共銘々之相渡之事。

——撰要永久錄

二月八日丙寅

○寛政六年(紀元二四五四年)○丙寅三正綜覽。

屋鋪相對替有リ。外ニ是月

○寛政六年(紀元二四五四年)二月。

屋鋪受授

若干。○相對替御書附書拔。屋敷書拔。

屋鋪受授 寛政六年二月中屋鋪ヲ受授スルコト、左ノ如シ。

寛政六寅年二月八日

備中守○太田專阿彌ヲ以御下ケ、阿波守○長田請取。

御普請奉行記。

小笠原長堯

増山河内守拜領屋敷

外櫻田貳千九百貳拾四坪

小笠原佐渡守拜領屋敷

同所三千六百拾貳坪

小笠原佐渡守○長田

増山河内守○正

——相對替御書附書拔

右願之通屋敷相對替被仰付記間、得其意、例之通被致記。

寛政六甲寅年

一、二月十七日渡。伊達遠江守上ヶ地之内

一、木挽町六百八拾坪

但、下谷廣小路屋敷火除明地御用之付被召上記為代地渡。

一、二月十七日渡。伊達遠江守上ヶ地之内

一、木挽町千二百三拾三坪餘

但、下谷廣小路屋敷火除地御用之付被召上記為代地渡。

同日渡。同斷。

御旗奉行 中奥御小性

太田駿河守○資

御書院番駒木根大内記組

松平八郎右衛門○正

松平正融

太田資倍

溝口直舊

出井正恒

但、右同斷。

同日渡。同斷。

一、同所百五拾三坪餘

但、右同斷。

同日渡。同斷。

一、同所千貳百坪餘

但、右同斷。

同日渡。同斷。

一、同所八百貳拾坪餘

但、右同斷。

同日渡。同斷。

一、同所三千五百七拾貳坪餘

但、湯島天神下屋敷火除地御用之付被召上記為代地渡。

一、二月十九日渡。明地之内。

一、上野山下三百坪

但、下谷廣小路屋敷火除地御用之付被召上記為代地渡。

同日渡。同斷。

一、同所三百坪

但、右同斷。

一、二月廿九日渡。伊達遠江守上ヶ地之内。

一、木挽町貳千貳拾五坪餘

但、右同斷。

清水長柄奉行○重方

出井十四郎○正

中奥御番 松平彌九郎○忠

御書院番石川大隅守組

永井織部○直

青山大膳亮○幸

小普請組石河臺岐守支配

大草傳次郎○高

小十人遠山織部組與頭

加藤權左衛門

寄合 近藤主殿頭

近藤主殿頭

寄合 近藤主殿頭

寄合 近藤主殿頭

寄合 近藤主殿頭

寄合 近藤主殿頭



二月廿九日(○寛政六年)。伊豆守殿(○松平信明)。  
一、下谷廣徳寺前元植木同心上地定普請同心屋敷足地願

曲淵出羽守  
井上美濃守

—屋敷書拔

高豊 大草傳次郎

寛政五年十月十五日下谷廣小路拜領屋敷類焼仕仕處、火除御用地同寅年<sup>○寛政六年</sup>差上、同年<sup>○寛政六年</sup>二月爲  
代地<sup>上野山下賜</sup>、御手當金拾兩賜。 —寛政呈譜

大的等稽古  
場移動

廿九日丁亥

○寛政六年(紀元二四五四)年(二月)○丁亥、三正綜覽。

麴町三丁目裏通明地

○市内麴町區。

ノ内ヲ大的稽古場トス。

大的等稽古  
場移動事蹟

此頃外ニモ大的稽古場ノ移動有リ。  
大的等稽古場移動 左ノ如シ。  
○寛政錄。屋敷書拔。

二月廿九日<sup>○寛政六年</sup>

攝津守殿<sup>○堀田正敦</sup>

御目付<sup>○</sup>

糺町三丁目裏通明地之内、以來大的稽古場之相成<sup>ハ</sup>間、場所不<sup>ハ</sup>込合様、一同申合、稽古可<sup>ハ</sup>致旨、向々<sup>ハ</sup>寄々<sup>ハ</sup>可<sup>ハ</sup>被<sup>レ</sup>達事。

三月十四日<sup>○寛政六年</sup>

○中略。  
兵部少輔殿<sup>○井伊直勝</sup> 御渡。

御目付<sup>○</sup>

櫻田御用屋敷内布衣以上并寄合之面々弓馬稽古場、此度御厩之相成<sup>ハ</sup>之付、爲<sup>ハ</sup>代地、田安御門外火除地之内<sup>ハ</sup>被<sup>レ</sup>仰付、馬見所射小屋并供之者腰懸等も、小普請方之<sup>ハ</sup>取建<sup>ハ</sup>積申渡<sup>ハ</sup>間、得其意、向々<sup>ハ</sup>可<sup>ハ</sup>被<sup>レ</sup>達<sup>ハ</sup>事。  
—寛政錄

寛政六甲寅年

三月八日渡。

一、麴町三丁目裏明地大的場番屋地所三ヶ所  
但、請負年季申渡。

神田富松町家主茂八店扇屋  
金 兵 衛  
京橋彌左衛門町家主甚四郎店三河屋  
喜 右 衛 門

三月十三日渡。

一、田安御門外明地大的場番屋地所貳ヶ所  
但、右同斷。

右 同 人

一、麴町壹丁目貳丁目裏明地右同斷

丸屋町家主三右衛門店土屋  
善 次 外 壺 人 郎

三月廿一日渡。

一、田安御門外火除明地之内  
但、市谷加賀屋敷火除明地之内ト引替、大的稽古場として渡。

小十人頭  
大 屋 源 四 郎<sup>○正</sup>  
桑 山 猪 兵 衛<sup>○元</sup>

同日渡。  
一、田安御門外火除明地之内  
但、新御番組大的稽古場拜借地之渡。

新御番頭  
水 谷 兵 庫<sup>○勝</sup>

殷 昌 期



同日渡。所長七拾六間三尺。幅拾貳間。

但、赤坂溜池端明地之内ト引替渡、小普請組大的稽古場拜借地之渡。

同日渡。所長八拾七間。幅拾七間餘。

但、市谷加賀屋敷火除明地之内ト引替、大的稽古場拜借地之渡。

一、四番町廣小路 長七拾七間。幅拾壹間。

但、市谷加賀屋敷大的稽古場ト引替、拜借地之渡。

一、八月五日渡。明地之内。長九拾間。幅七間三尺。

但、赤坂今井臺大的稽古場御用之付被召上ハ爲代地之渡。

同日渡。同斷。長九拾間。幅拾三間。

但、右同斷。

小普請組 酒井紀伊守忠

南部主稅信

大御番頭 堀田豐前守正

御先手山中平吉組與力 安富軍八

松平下野守孝

御小性組 安藤伊豫守直

淺野壹岐守長

屋鋪受授

三月二日己丑

〇寛政六年(紀元二四五年)〇己丑、三正統賞

屋鋪ヲ受授ス。外ニ若干屋鋪是月

〇寛政六年(紀元二四五年)三月二日受

屋鋪受授事

授サル。

〇屋敷書拔。寛政錄。寛政呈請。相對替御書附書拔。

屋鋪受授

寛政六年三月左ノ屋鋪受授ヲ見ル。

寛政六甲寅年

三月二日渡。青山大膳亮上ケ地 一、湯島天神下三千四百四拾五坪餘

但、右同斷。下合廣小路屋敷火除地御用之付被召上ハ爲代地之渡。

三月七日

〇寛政六年

谷中三崎元植木同心組屋敷上ケ地四千五百九十坪

右願之通下屋鋪被下旨、於御白書院縁類老中列座、對馬守信成申渡之。

三月十四日

〇寛政六年

愛宕下屋敷御用之付差上、爲替地、永田町米倉三八・伊澤内記屋敷之内三千六百坪餘被下之、銀三百

五拾枚被下之。

細川與松齊名代市岡丹後守。茲。

愛宕下屋敷御用之付差上、爲替地、永田町勝田主計・瀧川源八郎屋敷之内二千二百八拾貳坪被下之、銀

三百枚被下之。

分部左京亮〇光實名代土方主。實。

分部光實

般昌期

大關增輔

大關伊豫守輔

屋敷書拔

真田幸弘

真田右京大夫幸弘

大村純鎮

大村信濃守純

名代伊丹與八郎。鎮。

細川齊茲



本田正温

愛宕下屋敷御用之付差上、爲替地、同所本多伯耆守中屋敷被下之、銀貳百五十枚被下之。  
右被仰付旨、於波之間、列座同前、列座中同入申渡之。

本多伯耆守○正  
名代松平備前守○温

柴田康福

愛宕下中屋鋪御用之付差上、爲替地、三河臺明地之内三千五十七坪被下之、銀三百枚被下之。  
右於芙蓉之間、列座同前、同入申渡之。  
初康邦。初七之丞。柴田七九郎。

寛政録

林信彰

同○寛政。六甲寅年正月十日麴町邊分出火仕、愛宕下佐久間小路屋敷類焼仕ハ處、同年○寛政三月十四日右屋敷御用之付差上、爲代地三河臺明地之内貳千貳百六拾貳坪被下、爲御手當金八拾五兩被下置ハ旨、井伊兵部少輔殿○直於御宅被仰渡ハ。  
信彰。口名頼母。又名主水。  
○林百助。

伊澤方守

同○寛政。三月十四日愛宕下居屋敷御用之付差上、爲代地、同所大久保伊賀守屋敷之内四百七拾七坪餘被下置、爲御手當金貳拾五兩被下置旨、御書付を以井伊兵部少輔殿○直於御宅被仰渡。  
方守。幼名吉五郎。後内記。  
○伊澤。

元居屋鋪、元祿十丁丑年半藏御門内鼠穴、當時吹上御庭之内半藏御門竹橋御門間之由之御座ハ處、類焼仕、同年○元祿。右屋鋪爲御用被召上、同年○元祿爲代地永田町屋鋪被下置ハ由申傳御座ハ。坪數千六百拾四坪餘拜領仕罷在ハ處、寛政六甲寅年正月十日類焼仕ハ處、同年○寛政三月十四日右屋鋪御用之付差上、

眞田幸弘筆蹟

東京 横尾勇之助藏

歌二、

もろ人のわきてそめつる秋の夜の空に名高き月の光枝



本田正温

愛岩下屋敷御用之付差上、爲替地、同所本多伯耆守中屋敷被下之、銀貳百五十枚被下之。  
右被仰付旨、於波之間、列座同前、○老中列座、○安藤同人申渡之。  
信成

本多伯耆守○正  
名代松平備前守○温

柴田康福

愛岩下中屋鋪御用之付差上、爲替地、三河臺明地之内三千五十七坪被下之、銀三百枚被下之。  
右於芙蓉之間、列座同前、同人申渡之。  
康福 初康邦、初七之丞、柴田七九郎。

寛政録

林 信彭

同○寛政六甲寅年正月十日麴町邊分出火仕、愛岩下佐久間小路屋敷類焼仕ハ處、同年○寛政三月十四日右屋敷御用之付差上、爲代地三河臺明地之内貳千貳百六拾貳坪被下、爲御手當金八拾五兩被下置ハ旨、井伊兵部少輔殿○直於御宅被仰渡ハ。  
信彭 ○名頼母、又名主水。

伊澤方守

同○寛政六年三月十四日愛岩下居屋敷御用之付差上、爲代地、同所大久保伊賀守屋敷之内四百七拾七坪餘被下置、爲御手當金貳拾五兩被下置旨、御書付を以井伊兵部少輔殿○直於御宅被仰渡。  
方守 ○伊澤、幼名吉五郎、後内記。

元居屋鋪、元祿十丁丑年半藏御門内鼠穴、當時吹上御庭之内半藏御門竹橋御門間之由之御座ハ處、類焼仕、同年○元祿右屋鋪爲御用被召上、同年○元祿爲代地永田町屋鋪被下置ハ由申傳御座ハ。坪數千六百拾四坪餘拜領仕罷在ハ處、寛政六甲寅年正月十日類焼仕ハ處、同年○寛政三月十四日右屋鋪御用之付差上、

眞田幸弘筆蹟

東京 横尾勇之助藏

歌二、

もろ人のわきてそめつる秋の夜の空に名高き月の光哉



東市京史綱

七二二

愛宕下屋敷御用之付差上、爲替地、同所木多伯書守中屋敷下之、銀貳百五十枚被下之。  
右被御付旨、於波之間、列座同前、○寛政同入、○寛政中波之。

木多伯書守

名代松平備前守

愛宕下中屋敷御用之付差上、爲替地、三河查明地之内三十五七坪被下之、銀三百枚被下之。  
右於芙蓉之間、列座同前、同人中波之。

寛政錄

柴田藤勝

○寛政同入、○天明中波之。

○寛政同入、○天明中波之。  
同○元、○享年正月十日、勘町邊、出火仕、愛宕下佐久間小路屋敷頭燒仕仕處、同年○寛三月十四日右屋敷御用之付差上、○天明河查明地之内、○天明御手當金八拾五兩被下置旨、井伊兵部少輔殿、於御宅被御渡也。

林信彰

○天明同入、○天明中波之。

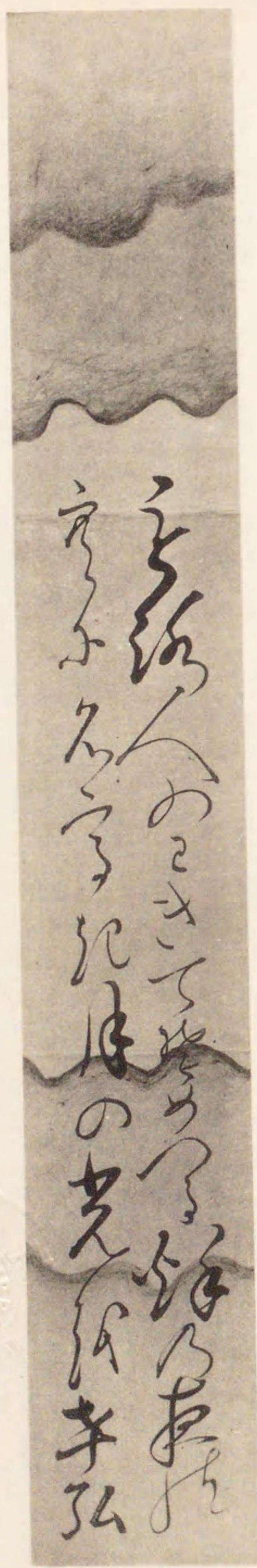
同○寛三月十四日、愛宕下居屋敷御用之付差上、爲代地、同所大久保伊賀守屋敷之内四百七拾七坪被下置旨、爲御手當金貳拾五兩被下置旨、御書付を以井伊兵部少輔殿、於御宅被御渡也。

方守

○天明同入、○天明中波之。

伊藤方守

元居屋鋪、元禄十丁丑年午歲御門内鼠穴、當時吹上御廳之内半藏御門竹橋御門間之由、御座仕處、○天明同入、○天明中波之。  
同○寛、右屋鋪爲御用付旨上、同年○天明爲代地、大田町屋敷被下置旨、由中傳御座仕、○天明同入、○天明中波之。  
同○寛、右屋鋪爲御用付旨上、同年○天明爲代地、大田町屋敷被下置旨、由中傳御座仕、○天明同入、○天明中波之。



ていじんのかみてきつるはたけ  
えふくろに母のきりかみ





興津忠篤

爲代地赤坂三河臺明地之内千六百貳拾六坪餘被<sub>レ</sub>下、爲御手當金八拾五兩被<sub>レ</sub>下置旨、兵部少輔殿<sub>○</sub>直井伊於<sub>ニ</sub>御宅被<sub>レ</sub>仰渡<sub>レ</sub>也。年號月日不相知四ツ谷新宿下屋鋪四千六百七坪拜領仕罷在<sub>レ</sub>處、年號月日不相知右屋鋪之内御用之付差上、爲代地本所四ツ目龜戶村之約千三百九拾六坪被<sub>レ</sub>下置<sub>レ</sub>也。  
忠篤<sub>○</sub>始正。彌太郎。後八左衛門。

大木直則

同年<sub>○</sub>寬政六年。三月四ツ谷内藤宿拜領屋敷四百坪<sub>ト</sub>新御番柴田修理亮組笠原平左衛門表二番町屋敷七百壹坪之内三百貳坪<sub>ト</sub>、切坪相對替奉願<sub>レ</sub>處、同月<sub>○</sub>寬政六年三月。十四日被<sub>レ</sub>仰付旨、安藤對馬守殿<sub>○</sub>信成。御書付之<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>也。  
段、頭<sub>○</sub>建部内匠頭。申<sub>レ</sub>渡<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>也。<sub>○</sub>上文參照。

川崎勝久

直則<sub>○</sub>金助。初源八郎。<sub>○</sub>大木。  
同<sub>○</sub>寬政六年。六甲寅年三月十七日糺町八丁目清水谷屋敷、小石川富坂願之通武士屋敷之御引替被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>也。  
勝久<sub>○</sub>民吉。<sub>○</sub>川崎。

寬政六寅年三月十九日小日向臺若荷谷拜領屋敷之内二百坪、小川町松平紀伊守屋敷表通御醫師武田河内守支配町谷元詮屋敷之内貳百坪<sub>ト</sub>、相對替被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>也。  
——寬政呈譜

寬政六寅年三月十三日

對馬守殿<sub>○</sub>安藤信成。專阿彌ヲ以御下<sub>レ</sub>、但馬守<sub>○</sub>三島喜。請取。

御普請奉行<sub>レ</sub>也。

植村家長

稻葉百助拜領屋敷  
愛宕下神保小路七百四拾七坪

稻葉通碩

植村出羽守拜領添屋敷  
同所續千五拾坪之内九百坪

殷昌期

植村出羽守<sub>○</sub>家長<sub>ニ</sub>

小普請組青山美濃守支配  
稻葉百助<sub>○</sub>通<sub>レ</sub>也



酒井友綱  
前田定功  
佐野政安  
石原善政  
笠原信安  
三木伊左  
鈴木忠左  
齋藤彌三  
飯島吉五

前田八右衛門拜領屋敷  
深川船大工町四百坪  
酒井鐵藏拜領屋敷  
本所林町三丁目横町三百坪

石原岩之助拜領屋敷  
向柳原四百坪

佐野嘉右衛門拜領屋敷  
大久保四丁目貳百貳拾五坪

興津八左衛門拜領屋敷  
四谷内藤宿新屋敷四百坪

笠原平左衛門拜領屋敷  
表貳番町七百壹坪之内三百貳坪

鈴木忠左衛門拜領屋敷  
麻布笄橋八拾三坪餘

三木伊左衛門拜領屋敷  
下谷貳丁目貳百坪之内百五拾坪

飯島吉五郎拜領屋敷  
四谷南伊賀町百三拾九坪餘

齋藤彌三郎拜領屋敷  
市谷新木村四丁目七拾四坪餘

右願之通屋敷相對替被仰付の間、得其意、例之通被致し。

寛政六寅三月廿六日

對馬守殿 領收 丹阿彌ヲ以御下ケ、阿波守 領收 請取。

寄 酒 井 鐵 藏 友 友  
小普請組菅沼大膳支配  
前田八右衛門功定

大阪御鐵炮奉行  
佐野喜右衛門政安

小普請組青山美濃守支配  
石原岩之助善政

新御番柴田修理亮組  
笠原平左衛門信安

大御番建部内匠頭組  
興津八左衛門篤忠

小普請組石河壹岐守支配  
三木伊左衛門

元方御金同心  
鈴木忠左衛門

明屋敷番伊賀者  
齋藤彌三郎

同 飯 島 吉 五 郎

御普請奉行

守能圖書拜領屋敷  
表貳番町六百五拾坪之内四百坪

入戸野十五郎拜領屋敷  
青山宿二百三拾壹坪

諏訪部定太郎拜領屋敷  
淺草大護院上地三百九拾八坪

大森市郎右衛門拜領屋敷  
牛込築土明神下貳百五拾坪

玉置丹次郎拜領屋敷  
四谷南伊賀町百五拾坪餘

行岡久左衛門拜領屋敷  
四谷鹽町貳丁目横町百拾九坪餘

篠田四郎五郎拜領屋敷  
小石川元鷹匠町百三拾坪

小樽治兵衛拜領屋敷  
根津元御屋敷之内七拾五坪

右願之通屋敷相對替被仰付の間、得其意、例之通可被致し。

是月 寛政六年(紀元二  
四四四年)三月 幸橋門外

幸橋門外火除地 是年正月十日ノ災ニ燒失シタル幸橋門外市街ヲ轉ジテ、火除ヲ設置ス。

三月 幸橋御門外兼房町・和泉町・鍛冶町・備前町・伏見町・善右衛門町・久保町・太左衛門町等の

内、火除の爲め町家を取拂ひ備地とせられ、當時の所其頃武家地にて在りしを外へ移されて、此の所へ代地を賜はる。

富士見御寶藏番之頭  
入戸野十五郎保  
守能慎明  
大森寬義  
諏訪部定  
昆  
行岡久左  
玉置丹次  
郎  
小樽治兵  
篠田四郎  
五郎

大御番本多肥後守組  
守 能 圖 書 明 保  
小十人遠山織部組  
大森市郎右衛門寬

小普請組石河壹岐守支配  
諏訪部定太郎定  
明屋敷番伊賀者組頭  
行岡久左衛門

同伊賀者  
玉置丹次郎  
御臺様御廣敷伊賀者  
小樽治兵衛

小普請組山口勘兵衛組  
篠田四郎五郎

相對替御書附書拔

○武江年表。御府内  
往還其外沿革圖書。



新シ橋外之内○中  
變容下

新シ橋外東之方、當時鶴見又吉御預御殿、並道向南之方本郷六丁目町屋代地北續大的場東續明地之場所、延寶年中之新シ橋外東之方之善右衛門町伏見町屋地續一纏、同道向和泉町鍛冶町屋地續一纏、同道向備前町屋一纏、同道向兼房町屋一纏有之、四纏共四方道式有之、寛政六寅年右町々爲替地當時之場所引ル被召上、一纏毎火除明地之成。○寛政七年武士屋敷地先之、稻葉伊豫守・京極能登守、御預ニ成、町方地先之町方持ニ成ル。○中略

一、新シ橋外當時本郷六丁目町屋代地南之方道向、兼房町伏見町善右衛門町和泉町鍛冶町備前町久保町太左衛門町右町々之場所、延寶年中之、廣小路西側南之方松平久米之助、北之方角秋月佐渡守之助、久米之助西續水野左近佐久間備中守佐渡守西續大村因幡守松平求馬都合六人地續一纏之助、四方道式有之、西之方道向南之方角大久保甚右衛門、北續御手洗傳右衛門、同續角分部隼人之助、甚右衛門傳右衛門西續青木十左衛門一柳對馬守島津飛騨守、隼人西續稻葉庄右衛門稻葉右京、都合八人地續一纏之助、四方道式有之。寛政六寅年九月細川與松、先山城守○延寶年中秋月佐渡守。林百助、實曆六年十二月松平三左衛門守。大村信濃守、先因幡守。○延寶年中南隣水野屋敷、實曆九卯年。一柳獻吉、先主稅。○延寶年中松平求馬、年號不知池田萬之助。元祿九年十月池田萬之助。大村信濃守。左近屋敷。正徳之比、井關玄俊相對替關込ニ成。柴田酒之丞、分部左京亮、先隼人。○延寶年中南隣御手洗傳右衛門。大久保伊賀守、先甚左衛門、後下野守○延寶年中西隣青木十左衛門屋敷。年號不知。柴田酒之丞。門屋敷。年號不知相對替關込ニ成。知壽光院殿。寛保之頃望月三英。明和三戌年六月大久保下野守添地關込ニ成。都合七人屋敷、並北之方道式之内共被召上、跡地東北折廻角兼房町屋二纏、西之方道向伏見町屋一纏、同道向善右衛門町久保町屋一纏、同道向久保町屋一纏、同道向久保町備前町太左衛門町屋地續一纏、同道向備前町太左衛門町屋地續一纏、南之方道向備前町屋一纏、東之方道向備前町屋一纏、同道向備前町鍛冶町屋地續一纏、同道向和泉町鍛冶町伏見町屋地續一纏、同道向伏見町和泉町兼

房町町屋地續一纏、右町々代地之被下、間々新道敷出來、一纏毎四方道式ニ成。其外向寄屋敷々主替リハ處も有之。  
御府内往還沿革圖書

賭博罰則更定

賭博ノ禁ヲ嚴ニシ、之ガ罰則ヲ更定ス。○御觸書

賭博罰則更定事蹟

寛政六寅年三月

三奉行也。

博奕御仕置御定之内、當分左之通、

博奕打ゆもの

重敲。

輕キ掛之寶引

敲。

よみのるゝ打ゆもの

但、五拾文以上之のけ錢之ゆり、

重敲。

同宿いゝしゆもの

敲。

廻り筒にて博奕打ゆもの

重敲。

右之通可被申付ゆ。此外之儀ハ、只今迄之通可被心得ゆ。三月○寛政六年

寛政六寅年六月

覺

在方博奕之儀ニ付、別紙之通相觸ゆ付、先達て相達ゆ博奕御仕置當分取計方之趣、遠國奉行所之分ニ程能

般 昌 期



三奉行の相達可申事。

御勘定奉行の。

博奕賭之勝負之義、前々より御制禁之所、今以不相止、在々にて博奕又ハ紛鋪賭之勝負いふはもの有之趣相聞、不届之事之い。右之付猶更無油斷手代等相廻し召捕、一同糺之上ハ、手鎖過料敲重敲等、時日を不移咎申付の様可致い。尤筒取有之歟、又定式之宿いふはものをの歟、廻り筒之亦も三四度之及ひハ博奕之類ハ、召捕置、咎之儀早々奉行所ハ可被伺い。尤私領之ても、御料所并他給ハ引合ハ義有之いとも、掛合之上、勝手次第其家之仕置申付、且又小給所家來等を不差置分も、寂寄之御代官ハ村役人より申立、御代官之て、咎之事等を別紙之通達置ハ間、得其意、嚴重之可被取計い。

右之通當分取計可申旨、被仰出ハ間、御代官ハ可被申渡い。私領より御料之引合之て掛合有之節を、筒取又ハ宿或ハ廻り筒三四度之およびハ類を、御代官より伺ハし、其餘ハ引合有之いとも、私領手限之濟ハ様之、早々可及挨拶旨、是又申渡可被置い。六月<sup>〇寛政六年</sup>

覺

在方博奕之儀之付、別紙之通相觸ハ付、先達て相達ハ博奕御仕置當分取計之趣、遠國奉行所之分ハ程能三奉行ハ相達可申事。

博奕賭之勝負之義、前々より御制禁之處、今以不相止、博奕又ハ紛敷賭之勝負いふはものを有之趣之相聞ハ之付、無油斷召捕、ひと御料所之者之いとも、其所之御代官ハ掛合之上、差圖次第直之仕置可被申付い。他領引合も、勿論其領主掛合之上、相互之勝手次第之仕置可被申付い。尤小給之面々、陣屋

無之、家來等も不差置分、并寺社領之分ハ、村役人より寂寄之奉行所又ハ御代官ハ申立、右奉行所或ハ御代官之て咎申付ハ義も、勝手次第之事之い。右之通被相心得、猶又嚴重之可被申付い。右之通可被相觸ハい。

四月四日辛酉 <sup>〇寛政六年(紀元二四五四年)〇辛酉、三正綜覽。</sup> 屋鋪受授有り。外ニ是月 <sup>〇寛政六年(紀元二四五四年)四月。</sup> 若干屋鋪

ヲ受授ス。 <sup>〇屋敷書拔。相對替御書附書拔。寛政呈請。寛政錄。</sup>

屋鋪受授 寛政六年四月左ノ屋鋪受授有り。

寛政六甲寅年

四月四日渡。元植木同心組屋敷上ケ地  
一、谷中三崎四千五百九拾坪

但、下屋敷之渡。

四月五日渡。大竹鐵五郎上ケ地  
一、巢鴨西丸町百貳坪餘

四月六日渡。藪田八十八上ケ地之内  
一、小石川柳町築地貳百坪

四月七日渡。上野安太郎上ケ地  
一、小日向茗荷谷百八拾七坪餘

一、麻布永坂下七拾七坪餘

四月九日渡。齋藤三之丞上ケ地割殘  
一、青山權田原百拾六坪餘

四月十日渡。鹽澤利兵衛上ケ地  
一、本郷丸山六拾坪餘

眞田 右京大夫<sup>〇幸</sup>

御普請役 蓮見 嘉藤 次

紅葉山樂人 中 主 税

表御臺所人 永 島 林 藏

御留守居同心 石 橋 喜 太 郎

御普請役 平 島 源 七 郎

御臺様御廣敷伊賀者 山 中 武 右 衛 門

屋鋪受授

眞田幸弘

蓮見嘉藤次

中 主 税

永島林藏

石橋喜太郎

平島源七郎

山中武右

般 昌 期



土田勘右  
雨宮雲九郎

富士見御寶藏番  
土田勘右衛門  
支配勘定  
雨宮雲九郎

四月十一日渡。新見勝右衛門上ヶ地  
一、小石川新鷹匠町貳百坪  
四月十二日渡。成田八右衛門上ヶ地并永預地共  
一、牛込北御徒町貳百坪  
同日預。同斷、永預地割殘  
一、同所貳拾<sup>三</sup>坪

右 同預地人

(朱)  
文政九戌年十二月六日大久保久六郎に預替ル。

大木直則

御賭頭見習表御右筆頭格  
大木直則

京極高以

表高家  
京極兵庫助

但、神田明神下屋敷之内新道御用之付被召上、爲代地元坪之通渡。

岩本正利

御留守居  
岩本内膳正利

四月廿八日渡。福島助市上ヶ地  
一、本所絲町五百三拾壹坪餘

屋敷書拔

林忠篤

忠篤<sup>藤五郎</sup>肥後守  
○林

米津田將

同年<sup>○寛政</sup>四月廿三日南割下水下屋敷、火消改米津小太夫<sup>○田</sup>南本所菊川町下屋敷貳千坪相對替仕度旨、願之通、同<sup>○寛政六</sup>年四月廿八日被仰付旨、於御用部屋、松平伊豆守殿<sup>○信</sup>被仰渡<sup>○信</sup>。

四月廿三日<sup>○寛政六年</sup>  
<sup>○中略</sup>

寛政呈譜

本多忠壽

赤坂今井臺<sup>○赤坂</sup>  
貳千九百坪餘

本多彈正大<sup>○忠</sup>

右願之通下屋敷被下旨、於奥相濟。

寛政錄

寛政六寅年四月廿八日

伊豆守殿<sup>○松平</sup>春阿彌ヲ以御下ヶ、阿波守<sup>○長田</sup>請取。

御普請奉行<sup>○</sup>。

米津小太夫拜領下屋敷  
南本所菊川町貳千坪

若君様御側衆  
林 肥後守<sup>○忠</sup>

林肥後守拜領下屋敷  
本所南割水八百拾坪

火消役  
米津小太夫<sup>○</sup>

平岩幸助拜領屋敷  
牛込原町四拾貳坪餘

小普請組武田阿波守組  
杉田吉次郎<sup>○</sup>

杉田吉次郎拜領屋敷  
牛込山伏町貳百八拾貳坪餘之内百五拾坪

同同人組  
平岩幸助<sup>○</sup>

右願之通屋敷相對替被仰付<sup>○</sup>間、得其意、例之通可被致<sup>○</sup>。

相對替御書付書拔

五月四日庚寅

<sup>○寛政六年(紀元二四五四)</sup>  
<sup>○庚寅、三正綜覽</sup>

屋鋪受授有り。外ニ是月

<sup>○寛政六年(紀元二四五四年)五月</sup>

屋鋪ヲ受

授スル者若干。

<sup>○屋敷書拔。寛政錄。寛政</sup>  
<sup>呈譜。相對替御書付書拔。</sup>

屋鋪受授ノ寛政六年五月ニ在リタル者ヲ列舉ス。

寛政六甲寅年

荒川長之助

五月四日渡。田中嘉子郎上ヶ地  
一、四谷内藤宿新屋敷六軒町貳百九坪餘

荒川長之助

津田義知

同日渡。長谷川彌四郎上ヶ地  
一、四谷内藤新宿百五拾四坪

津田嘉吉<sup>○義</sup>

殷昌期

七二一



一柳直郷

五月十七日渡。明地之内  
一、三河臺千九百七拾九坪餘

寄一合 柳 猷 吉郷直

米倉昌喜

但、愛宕下屋敷御用之付被召上、爲代地渡。  
同日渡。同斷。  
一、同所千八百五拾九坪

寄米合 倉 頼 母喜

伊澤方守

但、永田町屋敷御用之付被召上、爲代地渡。  
五月十九日渡。明地之内。  
一、三河臺千六百貳拾六坪餘

寄伊合 澤 内 記守方

勝田元休

但、永田町屋敷御用之付被召上、爲代地渡。  
同日渡。同斷。  
一、同所千三百四坪

御書院番石川大隅守組  
勝田 主 計元

本多正温

但、屋敷續帷ふれ地。  
五月廿一日渡。明地之内  
一、同所三千五拾七坪

右 同 永預地人

柴田康福

但、愛宕下中屋敷御用之付被召上、爲代地渡。  
同日渡。同斷。  
一、同所貳千貳百六拾貳坪

寄柴合 田 七 九 郎康福

澁川源八

但、永田町屋敷御用之付被召上、爲代地渡。  
五月廿三日渡。同斷。  
一、同所千貳百貳拾八坪

御小姓組大久保豊前守組  
澁川 源八

大久保忠雄

但、永田町屋敷御用之付被召上、爲代地渡。  
五月廿三日預。明地之内割殘帷ふれ地  
一、三河臺百八坪餘  
但、今度相渡の中屋敷後帷。  
五月廿九日渡。鶴見七左衛門預御跡  
一、永田町千四百三拾坪餘  
但、愛宕下屋敷御用之付被召上、爲代地渡。  
五月十六日 ○寛政六年  
兵部少輔殿 ○井伊直朝

中奥御小姓  
大久 保 伊賀守忠雄

屋敷書拔

後藤重次郎

右願之通屋敷場所被下。御普請奉行可被談。長央 ○初節五郎 改五右衛門 ○今村

御徒目付  
後藤 重次郎

今村長央

拜領屋敷牛込逢坂上五百五十坪之、坪數狹御座、寛政五癸丑年十二月右屋敷續佐々木勘三郎上地之内添地奉願、同政。六甲寅年五月十六日七拾坪添地被下旨、太田備中守殿御書付を以達段、御勘定奉行佐橋長門守申渡。

飯田好古

好古 ○勝次郎 又左衛門 ○飯田

同政。六寅年五月廿三日小石川三百坂屋敷、三方相對替、願之通井伊兵部少輔殿 ○直達。 七二三



寛政六寅年五月廿三日

備中守殿○太田丹阿彌ヲ以御下ケ、兵庫頭○野一色請取。

御普請奉行ニ。

福原資始  
矢部定好  
鈴木政恭  
關保壽  
鈴木丈右  
石寺熊太郎

矢部大助拜領屋敷  
小石川三百坂三百三拾九坪餘  
飯田又左衛門拜領屋敷  
下谷幡隨院後貳百五拾坪  
福原織部拜領屋敷  
駿河臺二百貳拾坪餘  
關五郎三郎拜領屋敷  
表四番町百八拾貳坪  
鈴木甚三郎拜領屋敷  
青山權田原百四拾八坪  
石寺熊太郎拜領屋敷  
三田元御屋敷之内百三拾七坪  
鈴木丈右衛門拜領屋敷  
麻布市兵衛町中ノ町四百坪餘之内貳百坪

右願之通屋敷相替被仰付ハ間、得其意、例之通可被致ハ。

〔附記、一〕 處罰

五月四日 ○寛政六年  
中略

封廻狀

改易。

右於評定所、桑原伊豫守小田切土佐守村上大學立合、伊豫守申渡ハ段、大學方ハ申來ハ之付廻申ハ。

五月四日 ○寛政六年

御小性組前田安房守組  
井出主稅  
寅五十七。  
當番  
御目付中

寛政錄

四日 ○寛政六年五  
月○中略 小姓組井出主稅某土藉を削らる。こは俣夫婦出奔せしハのち、立歸たるにより押込申付置、その後婦義はその方用向等も致させ、平常のさまに聞へ、且又去し二月 ○寛政六年 中娘病死の節も押かくし罷在、病中の看病も癒なるよし、殊に相番共より搜索の節も、下女を娘と偽、又届遅滞を官長より尋の節も、僻事のみ多く、朦中の身分に在ながら、其儘勤仕せしは、公を憚らざる始末、不埒の至なりとの咎なり。

文恭院殿御實紀

五月十八日 ○寛政六年  
中略

一、雲祥伺之上、御目通差控可申旨、被仰渡ハ。

高麗雲祥

其方拜領屋敷家守出入之儀、於町奉行所遂吟味ハ處、地代先納を申名目ハ之、仕切地ハ之をせし、拜領屋敷を町人共ハ相渡、金子借請、其上證文と對談と相違之處、其儘印形いハし遣ハ段、旁以不行儀ハ之、不束之次第ハ之有ハ之。依之町屋敷被召上。

殷昌期

七二五

寛政呈譜

相對替御書附書拔



五月〇寛政六年

十八日〇寛政六年五月 寄合醫高麗雲祥安性、公より下し賜はりし町屋敷を市井の者に任せ置、其上金貸受證文へ印形致し、種々不束の事ともあるをもて、町屋敷召上られ、御前をとゞめらる。

——文恭院殿御實紀

附記、二一  
幸橋門修理

〔附記、二一〕 幸橋門修理

六月五日〇寛政六年

幸橋御門御普請御用懸り被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>旨。

御作事奉行 井上美作守〇利

御目付 矢部彦五郎〇定

右於芙蓉之間、老中列座、采女正〇戸田氏教申渡之。若年寄侍座。

御大工頭 河田安右衛門 御作事下奉行 森平十郎

六月九日〇寛政六年

右幸橋御門御普請御用掛り被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>旨、於御右筆部屋縁頼采女正申渡之。備前守〇京極高久侍座。

御勘定奉行 久世丹後守〇廣

御作事奉行 井上美濃守〇利

時服三。

金三枚。

右幸橋御門御普請御用相勤<sub>レ</sub>之付被<sub>レ</sub>下旨、於芙蓉之間、老中列座、伊豆守〇藤平申渡之。

但、御目付矢部彦五郎〇定産穢之付、追<sub>テ</sub>被<sub>レ</sub>下之。

金三枚。

御勘定 男谷平藏

同。

御大工男 河田安右衛門

右同斷之付被<sub>レ</sub>下旨、於御右筆部屋縁頼、采女正〇戸田氏教申渡。備前守〇京極高久侍座。

御作事下奉行 森平十郎

金三枚。

右同斷之付被<sub>レ</sub>下旨、於躑躅之間、若年寄中出座、備前守申渡之。

銀十枚。

御徒目付 後藤重次郎

銀十枚。

御徒目付 山本庄左衛門

同七枚。

御被官 田島伊右衛門

同三枚ツ。

御勘定 河平六郎 御徒假役 橋本忠左衛門

同七枚。

大棟梁 甲良筑後

同十枚。

石方棟梁 龜田伊豫

同五枚。

殷昌期



同五枚。

右同斷之付被下旨、於燒火之間、備前守申渡之。

四月五日○寛政七年

金三枚。  
時服二。

右幸橋御門御普請御用相勤被下旨、於芙蓉之間、老中列座、備中守○太田資榮申渡。若年寄侍座。

五日○寛政六年六月

作事奉行井上美濃守利恭、目付矢部彦五郎定令、幸橋門修復の事命ぜらる。

廿八日○寛政七年三月 勘定奉行久世丹後守廣民幸橋口門修築の事奉はりしにより時服三、作事奉行井上美濃

守利恭は時服三に金三枚をそへたまひ、その他所屬のともがらたまもの差あり。

寛政録

大鋸棟梁  
櫻井新兵衛

御目付  
矢部彦五郎

屋鋪受授

六月七日壬戌

○寛政六年(紀元二四五四年)○壬戌、三正綜覽。

屋鋪相對替有リ。外ニ是月

○寛政六年(紀元二四五四年)六月 及七月

文恭院殿御實紀

屋鋪受授事

屋鋪受授

屋鋪受授ノ寛政六年六月七日ニ在リタル者ヲ列記ス。

寛政六寅年六月七日

采女正殿○戸田兵衛 丹阿彌。

御普請奉行。

那須資明

山口直武

柴田勝彭

美濃部茂

近藤義種

竹本正春

杉田忠高

平岡正孝

山口房之助拜領屋敷

本所石原町千貳拾坪

那須與一拜領下屋敷

本所四ツ目千貳百三拾七坪

美濃部主水拜領屋敷

小川町表猿樂町五百五拾坪

柴田三右衛門拜領屋敷

南本所林町三丁目横通四百拾五坪餘

竹本茂兵衛拜領屋敷

牛込藁店上五百坪

近藤助八郎拜領屋敷

牛込山伏町貳百七拾五坪

平岡彌平次拜領屋敷

四谷内藤宿新屋敷七百七拾五坪之内貳百三拾貳坪

杉田金之丞拜領屋敷

表貳番町法眼坂九百七拾七坪之内貳百四拾七坪

右願之通屋敷相對替被仰付の間、得其意、例之通可被致い。

勝彭初政次郎、三右衛門。

寛政六甲寅年六月十六日渡。佐々木勘三郎上ヶ地

一、牛込逢坂上七拾坪

被仰付。

那須ニ罷在一明○資に 與

小普請組青山美濃守支配

山口房之助○直に

御先手

柴田三右衛門○勝に

御書院番戸川山城守組

美濃部主

西丸御裏門番之頭

近藤助八郎○義に

御書院番勝田安房守組

竹本茂兵衛○正に

御小性組前田安房守組

杉田金之丞○忠に

御書院番諏訪若狭守組

平岡彌平次○正に

相對替御書附書拔

寛政呈譜

御勘定組頭

今村五右衛門

添地。

七二九



但、爲添地之渡。

同日渡。同斷。

一、同所百三拾坪

十二月二日(○寛政五年)。對馬守(○安藤信成)牛込薬店佐々木勘三郎上地添地願

(朱) 寛政六寅年六月十六日引渡。

寛政六甲寅年

七月六日渡。大關伊豫守上ヶ地割殘地之内

一、下谷廣小路百五拾坪餘

同日渡。同斷

一、同所百五拾坪餘

七月十八日渡。米倉頼母・伊澤内記・瀧川源八上ヶ地之内

一、永田町三千六百坪餘

但、愛宕下屋敷御用之付被召上、爲代地之渡。

同日渡。勝田主計・瀧川源八上ヶ地之内

一、永田町貳千貳百八拾貳坪餘

但、右同斷。

七月廿二日渡。本田伯耆守中屋敷上ヶ地

一、愛宕下三千八坪餘

但、右同斷。

七月廿三日渡。元植木同心上リ地割殘地之内

一、下谷廣徳寺前二百坪

御徒目付

後藤重次郎

御勘定組頭

今村五右衛門

屋敷書拔

御馬方

大武藤助

支配勘定格與御右筆所詰

屋代太郎

大村信濃守純之

細川與松立之

分部左京亮實光

評定所同心 高木惣助

鈴木次郎兵衛

小島專助

木本佐右

赤城新右

平井忠藏

本多忠壽

林信彰

村上常福

戸田忠鈞

但、壹人之付百坪宛銘々割渡。

同日渡。同斷。

一、同所百坪

同日渡。同斷。

一、同所百拾六坪

但、定普請同心組屋敷添地之渡。

同日渡。同斷。

一、同所百坪

七月廿六日渡。明地之内

一、赤坂今井臺貳千九百坪

但、下屋敷之渡。

七月廿七日渡。大久保伊賀守上ヶ地之内

一、愛宕下四百七拾七坪餘

但、愛宕下屋敷御用之付被召上、爲代地之渡。

寛政六寅年七月十三日

對馬守殿信成 丹阿彌ヲ以御下ゲ。

御普請奉行。

戸田三郎兵衛拜領屋敷

表貳番町七百四拾七坪餘

大河原源太郎拜領屋敷

新道五番町貳百坪

殷昌期

鈴木次郎兵衛

小島專助

御書物同心 木本佐右衛門

御作事方定普請同心組頭 赤城新右衛門

淺草御藏門番同心 平井忠藏

本多彈正大彌忠

林百助信彰

屋敷書拔

寄合

村上三郎右衛門常福

小普請組酒井紀伊守支配 戸田三郎兵衛忠鈞



大河原源太郎  
岡部五左  
岡田利貞  
永田嘉壽  
安見元平  
西山朋昌  
飯田有詮  
町野三成  
中川忠和  
山角盛富  
小田切昌應

村上三郎右衛門拜領屋敷  
四ツ谷内藤宿六百坪之内貳百坪  
同所之内  
四百坪

岡田勇助拜領屋敷  
青山權田原貳百坪餘  
岡部五左衛門拜領屋敷  
青山新屋敷六百坪之内三百坪  
安見藤藏拜領屋敷  
麻布飯倉片町三百坪

永田源次郎拜領屋敷  
四谷大木戸横町百九拾五坪

飯田幾三郎拜領屋敷  
牛込築地赤城明神下百五拾坪餘  
町野三子太郎拜領屋敷  
市ヶ谷淨留理坂上貳百貳拾五坪

西山新右衛門拜領屋敷  
千駄ヶ谷御塩焔藏跡五百四坪之内三百四坪

山角藤十郎拜領屋敷  
四谷表大番町四百坪

中川惣左衛門拜領屋敷  
下谷幡院院後通貳百五拾坪

中川傳左衛門拜領屋敷  
小日向中ノ橋通貳百五拾坪餘  
井口万作拜領屋敷  
同所貳百三拾壹坪餘

中川尹方  
井口高壽  
山田十郎

小田切千次郎拜領屋敷  
四谷内藤宿新屋敷千坪之内五百坪  
同所之内  
五百坪

朝倉政兵衛拜領屋敷  
四谷内藤宿新屋敷六軒町五百坪  
小澤太左衛門拜領屋敷  
北本所南割下水貳百坪

山田十郎右衛門拜領屋敷  
四谷南伊賀町六百八拾坪之内三百四拾坪  
同所之内  
三百四拾坪

中林八左衛門拜領屋敷  
本郷丸山百貳拾九坪餘  
北川八十次郎拜領屋敷  
四谷船板横町袋町八拾八坪餘

右願之通屋敷相對替被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>間、得其意、例之通可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>致<sub>レ</sub>也。

嘉壽 源次郎。百助。  
○永田。

寛政六寅年七月十三日四谷大木戸横町屋敷下、麻布飯倉片町阿部大學支配安見藤藏屋敷下、願之通相對替被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>。

有詮 幾三郎。  
○飯田。

同政○寛六甲寅年七月十三日私拜領屋敷牛込築地赤城明神下百五十坪、小普請組近藤左京支配町野三千太郎拜領屋敷市ヶ谷淨留理坂上貳百貳十五坪餘々、屋敷相對替、願之通被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>也。

殷 昌 期

同阿部大學支配  
大河原源太郎<sub>に</sub>  
御小性組内藤甲斐守組  
岡部五左衛門<sub>に</sub>  
小普請組阿部大學支配  
岡田勇助<sub>に</sub>  
御書院番金田能登守組  
永田源次郎<sub>に</sub>  
小普請組阿部大學支配  
安見藤藏<sub>に</sub>  
大御番堀田豊前守組  
西山新右衛門<sub>に</sub>  
同白須甲斐守組  
飯田幾三郎<sub>に</sub>  
小普請組近藤左京支配  
町野三子太郎<sub>に</sub>  
小十人久松忠次郎組  
中川惣左衛門<sub>に</sub>  
小普請組酒井紀伊守支配  
山角藤十郎<sub>に</sub>  
同石河壹岐守支配  
小田切千次郎<sub>に</sub>

小普請組酒井紀伊守支配  
中川傳左衛門<sub>に</sub>  
同阿部大學支配  
井口高壽<sub>に</sub>  
同石河壹岐守支配  
山田十郎右衛門<sub>に</sub>

御鳥見  
朝倉政兵衛<sub>に</sub>  
御臺様御廣敷添番  
小澤太左衛門<sub>に</sub>  
明屋敷番伊賀者  
北川八十次郎<sub>に</sub>  
同  
中林八左衛門<sub>に</sub>

相對替御書附書拔



小林政光

政光 太左衛門。初庄驛。

同政 ○寛 六甲寅年三月小石川築地柳町屋敷拜領仕度旨奉願<sub>ハ</sub>處、同年 ○寛 六月七月十七日右屋敷被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>段、安藤對馬守殿 ○信 被<sub>レ</sub>仰渡<sub>ハ</sub>段、同政 ○寛 八丙辰年六月右小石川屋敷<sub>ト</sub>湯嶋五丁目屋敷<sub>ト</sub>相對替奉願<sub>ハ</sub>處、同年 ○寛 七月六日被<sub>レ</sub>仰付<sub>ハ</sub>段、右御同人申渡。

— 寛政呈譜

文昭院靈屋修理

七月十日乙未

○寛政六年(紀元二四五四年)○乙未 三正綜覽

老中大垣

○美濃國

城主戸田氏教

○采女正

ヲ總督トシテ、増上寺文昭院靈屋

芝區 ○市内

ヲ修理セシム。

十三日戊戌

○寛政六年(紀元二四五四年)○戊戌 三正綜覽

作事奉行曲淵

景露 ○出羽守

目付桑原盛倫

○善兵衛

ニ奉行ヲ命ジ、勘定奉行柳生久通

○將監

奉行ト爲ル。景

七年乙卯

○寛政(紀元二四五五年)○乙卯 三正綜覽

四月十二日癸巳

○癸巳、三正綜覽

作事奉行石川忠房

奉行ト爲ル。景

露 ○曲淵出羽守

二代ル也。八月八日丙戌

○寛政七年(紀元二四五五年)○丙戌 三正綜覽

正遷座供養ス。

十二月庚寅

○紀元二四五五年)○庚寅 三正綜覽

及九月二日庚戌

○寛政七年(紀元二四五五年)○庚戌 三正綜覽

十一月九日丙辰

○寛政七年(紀元二四五五年)○丙辰 三正綜覽

行賞差有リ。

○寛政錄。文昭院殿御實紀。天保集成。

文昭院靈屋修理 左ノ如ク傳フ。

七月十三日 ○寛政六年

御作事奉行

曲淵

出羽

守 ○景露

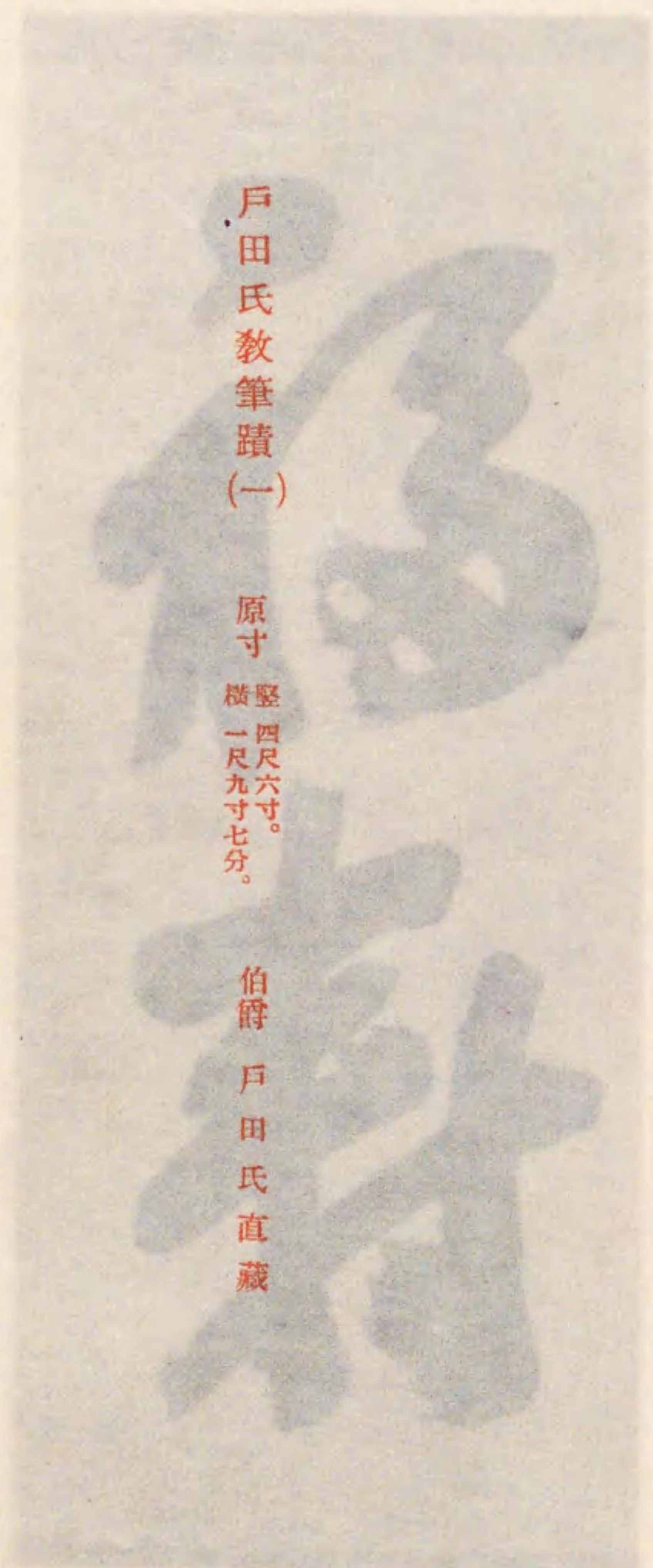
御目付

桑原

善兵衛

○盛倫

右ノ増上寺文昭院様御靈屋向御修復御用被<sub>レ</sub>仰付旨、於芙蓉之間、老中列座、對馬守 ○信成 申渡之。若年寄中侍座。



戸田氏教筆蹟(一)

原寸 整四尺六寸。横一尺九寸七分。

伯爵 戸田氏直藏

文昭院靈屋修理事蹟



政光 太左衛門。初庄廳。○小林。

同政。○寛六甲寅年三月小石川築地柳町屋敷拜領仕度旨奉願ハ處、同年六月○寛政七月十七日右屋敷被下ハ段、安藤對馬守殿○信成被仰渡ハ段、同政。○寛八丙辰年六月右小石川屋敷ト湯嶋五丁目屋敷ト相對替奉願ハ處、同年八月○寛政七月六日被仰付ハ段、右御同人申渡。

寛政呈譜

文昭院靈屋修理事蹟

七月十日乙未 ○寛政六年(紀元二四五四年)○乙未、三正綜覽。 老中大垣 ○美濃國。 城主戸田氏教 ○采女正。 ヲ總督トシテ、増上寺文昭院靈屋 ○市内芝區。 ヲ修理セシム。十三日戊戌 ○寛政六年(紀元二四五四年)七月○戊戌、三正綜覽。 作事奉行曲淵景露 ○出羽守。 目付桑原盛倫 ○善兵衛。 ニ奉行ヲ命ジ、勘定奉行柳生久通 ○膳主。 ニ檢視ヲ命ズ。七年乙卯 ○寛政(紀元二四五四年)○乙卯、三正綜覽。 四月十二日癸巳 ○癸巳、三正綜覽。 作事奉行石川忠房 ○將監。 奉行ト爲ル。景露 ○曲淵出羽守。 ニ代ル也。八月八日丙戌 ○寛政七年(紀元二四五五年)○丙戌、三正綜覽。 正遷座供養ス。十二日庚寅 ○寛政七年(紀元二四五五年)○庚寅、三正綜覽。 八月○庚寅、三正綜覽。及九月二日庚戌 ○寛政七年(紀元二四五五年)○庚戌、三正綜覽。 十一月九日丙辰 ○寛政七年(紀元二四五五年)○丙辰、三正綜覽。 行賞差有リ。○寛政錄。文昭院殿御賞紀。天保集成。

文昭院靈屋修理 左ノ如ク傳フ。

七月十三日 ○寛政六年。

御作事奉行 曲淵

出羽守 ○景露。

御目付 桑原

善兵衛 ○盛倫。

右ニ増上寺文昭院様御靈屋向御修復御用被仰付旨、於芙蓉之間、老中列座、對馬守 ○安藤信成 申渡之。若年寄中侍座。

戸田氏教筆蹟(一)

原寸 竪四尺六寸、横一尺九寸七分。

伯爵 戸田氏直藏



小松政光

東京市史稿

政光法正 御正

七三四

同 六甲寅年三月小石川築地柳町屋敷拜領仕度旨奉願申渡。同年七月十七日右屋敷被下付段、安藤對馬守殿被仰渡申渡。同 八丙辰年六月右小石川屋敷ト湯嶋五丁目屋敷ト相對替奉願申渡。同年七月六日被仰付申渡、右御同人申渡。

文昭院靈屋修理

文昭院靈屋修理

七月十日乙未寛政六年(紀元二四五四年)乙未 三正綜覽 老中大垣美濃國城主戸田氏教采女正ヲ總督トシテ、増上寺文昭院靈屋芝園ヲ修理セシム。十三日戊戌寛政六年(紀元二四五四年)七月戊戌 三正綜覽 作事奉行曲淵景露出羽守目付桑原盛倫兵衛ニ奉行ヲ命ジ、勘定奉行柳生久通膳正ニ檢視ヲ命ズ。七年乙卯田中寛(御願)内月十二日癸巳御願作事奉行石川忠房膳正奉行ト爲ル。景露出羽守ニ代ル也。八月八日丙戌寛政七年(紀元二四五五年)丙戌 三正綜覽 正遷座供養ス。十二日庚寅寛政七年(紀元二四五五年)庚寅 三正綜覽 行賞差有リ。寛政錄 文昭院殿 御賞紀 天保集成

文昭院靈屋修理 左ノ如ク傳フ。

七月十三日寛政六年

御作事奉行

曲淵出羽守殿

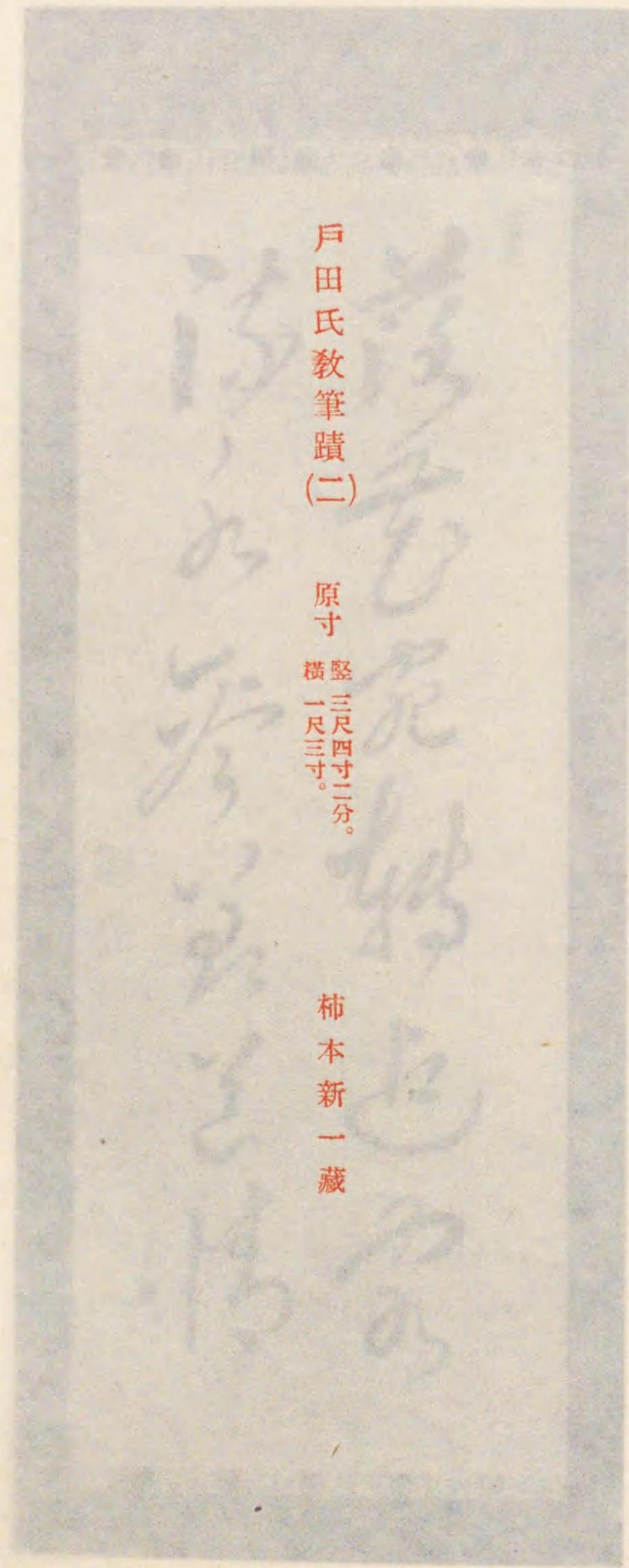
御目付

桑原善兵衛殿

右ノ増上寺文昭院様御靈屋向御修復御用被仰付旨、於美春之間、老中列座、對馬守殿申渡之。若年







戸田氏教筆蹟(二)

原寸  
竪三尺四寸二分  
横一尺三寸

柿本新一藏





戸田氏教筆蹟(二)

原寸  
横一尺三寸  
竪三尺四寸二分

柿本新一藏





落笔转迅如  
流如空谷道情

司田丑峰草书(二)

卷十 第一三三  
三三三三三三

册本卷一第



御勘定奉行  
柳生 主膳 正〇久

右同斷見廻御用被仰付旨、於新番所前溜、采女正〇戸田申渡之。

九月十一日 〇寛政六年  
〇中略

兵部少輔殿〇井伊  
直朝

御目付に。

増上寺文昭院様御靈屋向御修復之付、紅葉山御靈前〇御參詣有之、右御當日増上寺御靈屋〇、御名代有之筈之由。來ル十四日〇寛政七年九月例年之通御名代有之由事。

右之通の間、可被得其意之由。

九月 〇寛政六年

四月十二日 〇寛政七年  
〇中略

御作事奉行  
石川 將 監〇忠

右増上寺文昭院様御靈屋御修復御用被仰付旨、於芙蓉之間、老中列座、備中守〇太田申渡之。

八月五日 〇寛政七年  
〇中略

采女正殿〇戸田御渡。

柳生主膳正・井上美濃守・桑原善兵衛に。

増上寺文昭院様正遷座。

殷 昌 期



八月八日〇寛政七年寅上刻。

御供養 同日〇寛政七年八月八日巳上刻。

右之節御名代等之儀、先達を相達し通し事。

右之通可被得其意。

采女正殿御渡。

柳生主膳正・井上美濃守・桑原善兵衛。

八月八日〇寛政七年増上寺文昭院様正遷座并御供養之節、可被相詰し。若病氣差合等有之ハ、同役之内

申合、相越し様可被致し。且又右御用掛し支配之者も、可被差越し。

八月七日〇寛政七年

今夜丑上刻、増上寺文昭院様正遷座之付、御靈屋の御名代彈正大弼殿〇本多忠勝

一、文昭院様正遷座之付、采女正殿〇戸田氏教今晚より増上寺の御越、九半時參著。

一、御名代九半時過參著。

八月八日〇寛政七年

一、増上寺文昭院様御靈屋御修復出來之付、今曉寅上刻正遷座有之、相濟を御靈前に爲御名代、本多彈正

大弼殿〇忠勝參拜今朝卯上刻同斷御供養有之、相濟を御靈屋御廟前に爲御名代、同人參拜。惣奉行始懸り御

役人相詰、所々御番之面々相勤仕之。

上使戸田采女正  
増上寺大僧正

右同斷正遷座相濟之付、爲御施物被遣之、同傳通院初其外出家中にも、銀子被下之。  
爲御禮増上寺大僧正登城、於御白書院縁頼、謁水野左近將監。

傳 通 院

右同斷拜領物之爲御禮登城、於同席、謁同人。

八月十二日〇寛政七年

御座間。

時服七。

戸田采女正〇氏教

右文昭院様御靈屋御廟向御修復御用相勤し之付、御目見拜領之。〇中略

一、采女正殿増上寺文昭院様御靈屋御修復御用御勤之付、御拜領物有之ハ御吹聽有之ハ。

九月二日〇寛政七年

金三枚。

御勘定奉行  
柳生主膳正

時服三。

御作事奉行  
石川將監

金五枚。

御目付  
桑原善兵衛

時服三。

右増上寺文昭院様御靈屋御廟向其外御修復御用相勤し之付被下旨、於同席〇美譽之間列座同前、〇老中采女正〇田氏申渡。若年寄中侍座。

銀七枚。

御材木石奉行  
鳥居八右衛門

殷 昌 期

七三七



同七枚。

同拾枚。

金二枚。

同。

同。

右同斷之付被下旨、於御右筆部屋縁類、采女正申渡之。

但、八右衛門申渡之節ハ、若年寄中侍座。其外備前守○京極高久侍座。

金二枚。

同。

右同斷之付被下旨、於躑躅間、若年寄中攝津守○堀田正敦

銀七枚ツ、。

御徒目付 諸田 忠五郎

銀七枚ツ、。

御徒假役 土屋 平左衛門

銀七枚ツ、。

御被官 山本 雄二郎

銀七枚ツ、。

御被官 中島 喜右衛門

銀七枚ツ、。

御被官 石川 多次郎

同五枚ツ、。

御勘定 長崎 平五郎

同三枚。

御勘定 福田 佐十郎

同拾枚。

大棟梁 平内 大隅

右同斷之付被下旨、於燒火間、備前守○京極高久申渡。

銀五枚。

御御右筆 高木 新三郎

同三枚。

同 奈佐 榮藏

右同斷之付於奥被下之。

金三枚。

新御番頭 曲淵 出羽守

時服三。

右同斷御用最初ノ骨折相勤之付被下旨、於芙蓉間、老中列座、采女正申渡。若年寄中侍座。

但、御作事奉行勤役中相勤之付被下之。

銀五枚。

御披官格御材木方改役 中村 八兵衛

右増上寺文昭院様御靈屋御廟向其外御修復御用相勤之付被下旨、於燒火間、備前守申渡。

但、右之者新規□□被下初之付、別段之被仰渡有之。

十一月九日○寛政七年

殷 昌 期



銀五枚ツ、

繪 狩師 野 洞 春

銀三枚。

銀三枚ツ、

繪 狩師 野 安 仙

狩 野 永 了  
名代狩野永陸

狩 野 探 信

狩 野 梅 軒

狩 野 梅 笑

右に増上寺文昭院様御靈屋御廟向其外御修復之節、繪御用相勤い付被下旨、於同席〇熾火之間 同人〇堀田正教 申渡。

寛政録

十日〇寛政六年七月 文昭院殿靈廟修理命ぜられしにより、其惣督を戸田采女正氏教に仰付らる。

十三日〇寛政六年七月 作事奉行曲淵出羽守景露・目付桑原善兵衛盛倫は、三縁山文昭院殿靈廟修理の事命ぜられ、勘定奉行柳生主膳正久通同じ檢視の事仰付らる。

八日〇寛政七年八月 この日三縁山文昭院靈廟正遷座により、本多彈正大弼忠篤代參す。よて御施物として銀百枚つかはされ、傳通院銀三十枚、及び出家中へも下され物ありしを謝して、増上寺方丈傳通院まうのぼる。

十二日〇寛政七年八月 宿老戸田采女正氏教文昭院靈廟修理の事奉はりしにより拜謁して時服をたまふ。

二日〇寛政七年九月 勘定奉行柳生主膳正久通・作事奉行石川將監忠房・目付桑原善兵衛盛倫・新番頭曲淵出羽守景露三縁山文昭院殿靈廟修築の事奉はりしにより、おのゝ時服黄金を給ふ。其他所屬のともがら賜物差あり。出羽守景露は、作事の奉行たりし時奉はりしをもてなり。

—文恭院殿御實紀

寛政六寅年七月

寺社奉行い。

増上寺文昭院様御靈屋向御修復被仰出、右御用掛采女正〇戸田氏教 被仰付い。其段増上寺い可被相達い。

七月〇寛政六年

寛政六寅年九月

寺社奉行い。

増上寺文昭院様御靈屋向御修復之付、御新初〇寛政六年九月 當月 十八日過御日取刻限等相考差出い様、増上寺い可被達い。

九月〇寛政六年

寛政六寅年九月

寺社奉行い。

増上寺文昭院様御靈屋御修復之付御新初。  
九月廿日〇寛政六年 辰上刻。

右之通増上寺い可被達い。

寛政六寅年十月

寺社奉行い。

増上寺文昭院様御靈屋向御修復之付、松平上總介猷備之御水屋修復、榊原式部大輔献上之唐銅水溜鉢居直修復之儀、上總介・式部大輔い相達い間、其段役者御別當い可被申渡い。

殷 昌 期



寛政六寅年閏十一月

寺社奉行に。

増上寺文昭院様外遷座、當月○寛政六年閏十一月廿日前後之内、御日取刻限等相考差出様、増上寺に可被達し。

閏十一月十四日○寛政六年

寺社奉行に。

増上寺文昭院様外遷座。

閏十一月廿日○寛政七年申中刻

右之通得其意、増上寺に可被達し。

寛政六寅年閏十一月

寺社奉行に。

閏十一月廿日○寛政六年増上寺文昭院様外遷座之節、何處之内一人相越し様可被致し。

寛政七卯年二月

増上寺文昭院様御靈屋御廟所御修復有之に付、諸家より献備之御燈籠洗磨手入等之儀、先格之通可被

致し。右仕様之儀を、天明二寅年増上寺有章院様・惇信院様御靈屋向御修復之節を御修復懸り申渡し

間、御修復掛手職人に被申付度面々を、采女正○戸田氏教宅に可被申聞し。御取替金を以御修復懸り之を修

復被致度面々も、是又一應可被申聞し。其外都も天明之度之通可被相心得し。

二月○寛政七年

右之趣、萬石以上之面々に可被達し。

寛政七卯年六月

寺社奉行に。

増上寺文昭院様御靈屋正遷座并御供養、來月○寛政七年七月二日以後之御日取刻限等相考差出様、増上寺に可

被達し。

六月○寛政七年

寛政七卯年七月

寺社奉行に。

増上寺文昭院様御靈屋御修復出來之付、正遷座之節

御名代 老中。衣冠。

御供養之節、

御名代 老中。衣冠。

但、御廟にも御名代有之に。

右之通の間、得其意、増上寺に可被達し。

寛政七卯年七月

寺社奉行に。

増上寺文昭院様正遷座、

殷 昌 期